
砂漠の夜は変わる甘味処

ハヤセ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

砂漠の夜は変わる甘味処

【Nコード】

N4183Q

【作者名】

ハヤセ

【あらすじ】

はるか昔、魔法が衰え、科学が萌芽しはじめたころ、砂漠と街でくり広げられる物語。

前の冒険に失敗して、砂漠で干からびていた勇者は、戦士と魔法使いの手で復活する。

勇者の見張り役、おバカな悪魔っ子も飛んできた。

勇者たちは、隣国の謀略で魔物に奪われた故郷の街を取り返す。

強気の地理学者も仲間に加わって、勇者たちは砂漠の奥深く、

魔物の本拠地『城塞』にいる魔王との対決をめざす。

それぞれの想いを抱いた四人の冒険は……

ちよつと傲慢な主人公の、少しおかしな砂漠と魔法の冒険譚。

復活

復活

私は勇者だ。

本人が言うのだから、間違いない。胸を張って言える。

では、なぜこんな場所で、からからに干からびているのかって？

それは、あいつとあの女と悪魔っ子と魔王とちよつとしたヘマと砂漠のせいだ。

とくに砂漠。

はつきり言つて、君は陽射しが強すぎる。一年三百七十八日、毎日晴れやがつて！

よく飽きないものだ。私は飽きたぞ。縛られたまま日干しになつて動けないから、空を見上げるしかやることがない。明るくなって青くなつて、暗くなる。夜には輝く星も月もあるけれど、もうちよつと、雲とか虹とか変化が欲しい。気まぐれな砂嵐は、私の体が埋もれてしまうから、もうやめろ。

雨なら大歓迎だ。復活できるからな。

と、思っていたら、誰か来たようだ。駱駝の走りよる足音がする。野太い声がした。

「ま、魔法使い様、これです」

なに？ 魔法使い？ 二人づれ？

ちよつと違っているようだが、いいぞ、はやくしてくれ。

大男が駱駝から降りて、そばに膝をついた。砂をかき分けて、砂漠の中に半分埋まっていた私の体を掘りだした。

「この人に水をかければ……」

「は、はい、そう聞いています。魔法使い様」

大男の隣に立つた魔法使いも、砂漠用の分厚く白い服を着ていた。上から私を見て顔をそむけた。まあ、今の私は干からびていて、あまり見た目も良くないだろう。当然の反応だ。

ほんとうは水も滴っちゃう良い男なのだが、いまは肝心の水氣がない。

だから、はやく。

魔法使いの女の子は、いったん視界から消えた。大きな水袋を両腕で胸にかかえて帰ってきた。重さでよろめく。危なっかしい。大男がいつしよに水袋を支えると、栓を抜いて、私の乾いた体に水をかけてくれた。

うつひょー。

やった。

この感じっ！

生きかえるぜ！

「う、あ、もう、少し、ゆっくり、と水を……大事な、体、なのだ」
まだ動きにくい口で二人に注意すると、次の水袋からは、ていねいに水を注いでくれた。大男が、短剣で私を縛っていた縄を切ってくれた。

うつ、久しぶりの自由。

体を起こして、手足を動かしてみる。まだ、ぎこちない。首を回してみる。きしる音がした。

「水をくれ」

私の頼みで、魔法使いが駱駝に駆けよって、水筒をもってきた。

この味はなつかしいビブリオ川の水。心ゆくまで飲んだ。水筒はすぐ空になった。

頭をふった。濡れた髪の毛と服は、みるみる乾いていく。砂漠も水を欲しがっていた。

「諸君。ありがとう。勇者は復活したぞ」

髪をなでつけて立ち上がり、両手で顔を確かめた。うん、元通りのいい男だ。

私は女の子の視線を釘付けにする勇者なのだ。

おっと、立って高いところから見直すと、久しぶりに景色が変わった。明るい黄色の砂。風のあとが残って、岩も散っている。西には日干しになるまえに気になっていた小さな砂丘が連なっている。ところどころに緑の塊がある。南は蜃気楼？ 地平線が揺らいでいた。

復活した私は両足で砂漠を踏んでやった。

屈伸運動をする。水を吸い込んだ体は調子が出てきた。ただ、口と舌はまだ調子が悪い。練習をかねて魔法使いの女の子に話しかける。

この子、面影が似ている。いや、そっくりだ。でも若い。

「君、ライデンの孫だろ。歳はいくちゅ？」

「十五です」

うれしいね。魔法使いが十五なら、出発まで三年遊べるぜ。でも、定めの年齢になっていない魔法使いの孫が、なんでここに？

まあ、いいや。とりあえず、しゃべって動きまわれる。これ以上のぜいたくはない。

軽く咳払いした。まだ、舌がかろく廻らかつてくれにゃい。

「しゃ、しゃ、さ、さ、砂漠は街で暮らすより三倍も速く歳をとる。乾燥がチビしいからな。さあ、君もこんな場所はイヤだろろ。急いで街へ帰るぞろ。……君の美貌とお肌の健康のためにも日焼けは避けるべきだ。さあ、砂漠とはおさらばして、街へ行こう！」

復活した私の胸は躍った。

ビブリオの街にもどり、この娘が定めの歳になって出発できるまで、酒と食事と女で英気と体力を養う。金さえあれば極楽な毎日だ。二十年ちかく日干しになっていたあとには、たまらねー。

街に着いたら、まず、行きつけの食堂で金貨を五枚せびる。それを持って博打場にいけば、すぐ二十倍だ。借りた金は返す。私はまじめ勇者だからな。それから、食って飲んで唄って騒いで、もちろん、きれいなお姉様やいたずらな妹たちともお喋りして……あと、

サイコロでイカサマをやったあいつには仕返ししないとな、私の夢を壊しやがったし、やられっぱなしじゃ男がすたる。生きているなら後ろから背中を押して、下水溝に叩き込むか、それとも路地の陰から闇討ちにしてやるつか……死んでいたら……墓石に悪口を刻んでやる。

私は律儀にしつこい勇者なのだ。

それから、あまった金で駱駝を準備して城塞へ。山ほどの財宝が私を待っている。魔物さえやつつければ、私のものだ。その金で貿易船を雇って、一気に五倍、十倍、百倍……私は世界一の金持ちだ。おお、故郷の街ビブリオよ！

砂漠と海をつなぐ交易都市。広場には西瓜売りと冷やし胡瓜の屋台が並ぶ。目ざとい物売りのかけ声をかいくぐり、建物の日陰を伝って港に立てば、白い帆影と潮の香りに心が騒ぐ。

街の賑わいに、砂漠の隊商はひとときの安らぎを覚え、船乗りたちは出帆を思いとどまる。自由にしていかかわしい裏通りと喧騒にして人懐こい路地が私を待っている……怠惰にして余計なことばかりする役所は潰れてしまえ！

砂漠の彼方を見つめて、これからのことをいろいろ思い浮かべていたら、十五の魔法使いが遠慮がちに話しかけてきた。

「あの……」

「どうした」

「ビブリオの街は奪われました」

娘は静かに言った。

……そんな……

私が砂漠で干からびている間に、ずっと思い浮かべて、楽しみにしていたのに。

二人を見た。大男が首を縦にふっていた。

では、なつかしい街は……私は問いかけた。

「君の父上の食堂、凶状持ちの赤い月は黒い監獄を照らす亭は、無くなったのか？」

大男は激しくうなづいた。でかい体に悪人顔……戦士イスハパンの子だ。親父もデカかったが、こいつもまた、それに輪をかけて大きい。堅肥り、筋肉の塊、容貌魁偉って言葉は、この男を見れば理解できる。

あそこは夜になれば、良い酒を出してくれたのに、もったいない。魔法使いの娘を見た。

「では、ライデンの夜香蘭と千日紅の魔法ブティックよん、も、消えた？」

「ビブリオ川の上流に場所を代えて、ほそぼそと」
ライデンの孫が答えた。

こいつの祖母が作った『一夜の恋に使えるかもペンダント』は、嘘っぱいのに効き目抜群だった。後から買った『金貨と黄金お風呂でプレスレット』は、まるきり効かなかったぜ……高かったのに。

それは良いとして

「では、驕る乙女と恥じらい巫女たちが見事に咲き誇りまする夜明かし横丁ビブリオ楽園がんばってます本店も……なくなったのか？」
イスハパンとライデンが顔を見合わせてから、あいまいにうなづいた。

うーむ、健全な青少年にはなじみのない場所だから、知らなくても仕方ない。でも、青い目のお姉さまや褐色の肌の妹たちともお別れか……

ここまでくると、嫌なことも覚悟して、どうしても聞かなければならない。

「街の人は……みんな無事だったのか？」

「さ、ささ、幸い、けが人は出ませんでした。でも、か、体ひとつで街を追いだされて、みんな、ちりぢりばらばらに」

とりあえず、良かった。

「それで、君たちは何をしていたのだ？ 傭兵隊は？」

私は大男を睨んでやった。図体ばかりでかくて、役立たずめ。私の遊び場所がなくなっただじゃないか、大金持ちになる計画もつぶれ

てしまった。

「あの、魔物が急に現れて……傭兵隊は勝ち目がないということで引き上げてしまって、市長様がみんなに避難の命令を」

「魔物？ 砂漠の悪霊が街を奪ったのか？」

「はい」

答えたライデンの孫を、改めて見た。服に付いている頭巾をかぶっていた。砂漠の日差しで濃い影が顔を覆っていたが、引き締まった唇と濃い灰色の瞳に出会った。

祖母の若いときに似ている。違いは髪、褐色だ。

灰色の髪の祖母は、頑固で我がままで踊りがうまくて気まぐれでめったにいない優れた魔法使いで、やたらと男をその気にさせるのに、ヘタに手を出すとこっちの骨を抜かれてそのまましゃぶられてしまう性格だったけれど、魅力的でしなやかな野獣だったね。

ついでに母親は、物知りで知性と正義感が強すぎて融通がきかない堅物の理屈屋で、一つ文句を言う十倍になって返ってきて、よく喧嘩をして私をへこましてくれたけど、魅力的でしなやかな家猫だった。

この魔法使いが二人の血をひいているなら、やつかいだが、まあいい。

とりあえず出発しよう。砂漠で立ち話は好ましくない。

魔物が人間の街を攻めてくるのが異常なら、信用第一の傭兵隊がすぐごと引き下がるのもおかしい。門を固めて城壁の上から矢を飛ばしていれば、負けないはずだ。

ビブリオの紋章は、攻城槌にまたがり、知恵のランプと三本の矢を握る雄鶏だ。誰にも征服されない自由都市の証ではないか。

裏に計略がある。何か分からないけど、きつとある。ゆっくり聞いたほうが良い。

出発のために、私も勇者の身支度を整えなければ。

無粋な格好で街へは行けない。

私はおしゃれな勇者なのだ。

「戦士にして従者の子よ。預け置きたる勇者の印、我が帽子をくれ」
イスハパンに言うと、思いがけず、ライデンの孫が駱駝の背から
大事そうに、大きな箱を持ってきてくれた。ずいぶんやる気だ。大
男の戦士よりも役に立つ。

薄い板で作られた箱をあけた。

なかには私の大きな毛帽子が入っていた。

大事に取り出して両手で振った。寝ていた毛の間に空気が入って
ふんわりとなった。肩幅ほどもある純白の帽子。これと黒い服は地
平線の彼方から見ても分かる勇者の印……

あれ？ 心の中でつぶやいた。

イスハパンの父に預けていたあいだに、ヤクの毛が少し黄ばんで
いる？

つやも少なくなっただような？

まあ、もともとだいぶ古くなっていた。質屋の店先で見えたら、
その主が、この帽子は三百三十三頭の白いヤクの尻尾の毛を集め
て、たんねんに作られた一生ものの絶品と薦めたから、その気にな
って質流れを安く値切って買ってやったのだが……まあ、いいか。

私は細かいことは気にしない勇者なのだ。

帽子を被って、またおごそかに言う。

「魔法使いよ。預け置きたる勇者の証、我が短剣をくれ」

「あの、箱の底に、いっしょ、に」

ライデンの孫は冷たく答えた。私の才能を疑っているかのようだ。
不満そうな態度は、この子の母を思い出させる。

箱の中を良く見た。

なるほど、箱の底で絹に包まれていたのはこれだったか……それ
なら、はやく言ってくれ。取り出して解いてみた。銀の鞘に宝石を
はめ込んだ短剣が出てきた。取り上げて日の光にかざした。

何、これ？ 心の中でつぶやいた。

魔法使いの母に預けておいたのは、これだっけ？ 勇者の短剣に
しては、ずいぶん安っぽい。表は真鍮に銀箔を張ったみたいだし、

宝石はガラス玉のようだ。もっとかつこよかったのに……

古道具屋にあったこれを手に入れるために、私がどれだけ苦労したとか。サイコロに鉛を仕込んで七の目を二十回つづけて出したら、バレそうになったこともある。

まあ、いいや。

勇者の真髄は見かけや装備ではなく、中味にこそ、ある。

短剣を帯に吊るした。準備は整った。

私は宣言した。

「ビブリオへ向かう。とりあえず街を奪い返してから、魔王の城塞を考えよう」

ライデンの孫が顔を輝かせた。その笑顔は朝日をいっぱいにつけて、透きとおるブドウの若葉を想わせた。あしたへのかほりがした。充分な報酬をもらった。

そして、イスハパンの子が遠慮がちに口をはさんできた。

「ゆ、勇者様、あの、俺、イスハパンの三代目で……親父がぎっくり腰に、で、お、俺が、来ました。よろしくとのことでした」

孫かよ！ 言われてみれば、ヒゲが薄い。

ということは、まだガキなのにこの図体か？ 未恐ろしい奴。

「勇者で良い……ところで、歳はいくつだ」

「十七で」

なら、充分だ。

初めて冒険に出かけたのは、私が十九、ライデンの祖母が十八、イスハパンの祖父が十七のときだ。暦に見棄てられた私が変わらないあいだに、月日は過ぎた。

移ろいやすい人は流れていくが、真理は変わらない。

私は冒険の師匠に教わった、かつこいい言葉を口にした。

「男の価値は歳ではない。力の強さでもなく、稼ぎの多さでもない。服の着こなしでもなく、女にモテるか、でもない。顔の良さでもなく、背の高さでもない。それは、勇気の量で決まるのだ！ ……祖父さんみたいに私を置いて逃げるなよ」

灰色の服を着て腹には黒い帯、たてにつぶれた帽子を頭にかぶった従者がどもりながら言った。

「じ、祖父さんは、じゅ、充分、反省してました」

「おお、達者でいるか？」

「あの世で、おそらく」

見かけと違って、なかなか礼儀正しい戦士だ。

駱駝に乗って三人で出発した。

東のオアシス

東のオアシス

私が干からびて埋もれていた場所は、人間の領域にある東のオアシスの近くだった。北部砂漠が赤黒白の大地のあたりと思っていたのに、魔王の奴は予想外のところに、私を捨てていた。

あいつも、なかなかやつてくれるぜ。

日も傾いてきたことだし、ビブリオの街に行くまえに、東のオアシスで一泊することにした。

砂漠の汚れを、ここで落としておく。それが砂丘を越えてきた旅人の礼儀だ。

東のオアシスは旅人の憩いの場でもある。半分を小高い崖に囲まれた泉と、節度を守れば誰でも飲める良い水の井戸がある。反対側の砂に削られた大きな赤岩が目印になっていた。

そして、オアシスには木陰もある。

まず、服を洗って、柳の枝にかけろ。そして、水浴び。思い切り水を飲む。水分に飢えていた体も舌も、これで完璧だ。出たときには服も乾いていた。その間、他の二人は焚き火用の薪ひろいへ。

つぎはイスハパン。私とライデンが焚き木ひろいに。街にいた友達の様子を聞いてみた。ついでに、なぜ、十八になっていないのに来たのかも聞いてみたが、顔を曇らせて答えない。いろいろ事情があるようだ。

最後にライデンの水浴びの順番が来た。

「おい、戦士イスハパン。行くぞ。ついてこい」

声をかけて南に連れて行った。でも、そこから引き返して、オアシスを半円形に囲む小高い崖の上に出る。イスハパンのでかい背中を押して、腹ばいになった。

そのまま、ひじとひざを使って進んでいく。

「ゆ、勇者様、こ、これって……」

「従者にして戦士よ、勇者と呼べ。いつもの鑑賞会だ」

戦士は顔を伏せて見ようとしなない。

ふふ、若いな。

頭を上げて岩の陰からうかがう。

「見る見る見る。さすがはライデンの一族。白い肌だ。オアシスに映えるね。おー乙女らしく、ちゃんと隠している。いいねー、あういう恥らしいの強い子は。でも、意外と胸もでかそうだな。あの乳は横から見たいとこだね。それにあの肌。水を弾くぞお。女になりはじめているってか、たまねーぜ。ちかくによると、なんとも言えない良い香りがするだろうな。おおうっと、腰も細い、両手で握れそうな細さだ。これは絶品だね。

なんと！ 脚もまっすぐじゃねーか！ 足首もよくしまっていそう。だ。それにあの太もも。おおお、水をすくって胸の谷間かよ」

ささやいて、イスハパンの肩をつつくと、こらえきれないように前を向いて頭をあげた。

「残念だったな。ついさっきまで全部見えたのに」

少し遅かった。魔法使いのライデンは、さっさと水浴びを終えて服を着ているところだった。

「でもよ。やっぱり女は短い髪がいいな」

戦士は口を開けてまま固まった。食い入るように見つめていた。目の毒か……

「見るよ、あの体なら、一晩中でも華麗に踊れるぜ……あれっ？」
オアシスに黒い鳥が飛んできた。ライデンの頭の周りを飛んでいる。コウモリみたいにひらひら飛んで、何か話をしているようだ。こつちを向いた。

まずい……あれは悪魔っ子だ！

「イスハパン、頭をさげろ」

奴の頭を押さえてから、あとずさりした。ひじとひざで方向転換。そのまま逃げて、安全なところで立ち上がった。

「黙っているよ」

若い戦士に釘をさして服を整えて薪拾いをはじめたら、いったん高く昇った黒い鳥、悪魔っ子が降りてきた。

急降下してきて、目の前で羽ばたきする。うれしくない乾いた翼の音がした。そして、耳障りな声が聞こえた。

「いよう、どぐされ勇者。また復活したようだねえ」

「失礼な言い方は、やめていただきたい。……溶けた硫黄のなかにぶち込むぞ」

悪魔のなりそこないは、あたりを飛び回った。見た目は、髪の手短、極めて小さい女の子だ。手には手袋、足には黒い靴を履いている。体を覆う薄い布も、あいかわらず黒づくめで決めていた。背中にはコウモリの翼がある。尻には棘のしっぽが生えている。いつもの不倫の槍を握っていた。

人間と同じ大きさになって、短いドレスでも着て酒場で唄って踊れば人気者だが、現実にはフクロウのできそこないみたいに小さい。「魔法使いが動きはじめたから、来てみれば……」

悪魔っ子は、いったん切ってから、こちらを向いて、唇の意地悪そうな含み笑いを指先で隠してつづけた。まぬけな獲物をつかまえたような目で、私をあざ笑っていた。

「のぞきをやっていたね」

「君はつくづく失礼だな。まったくもってゲスの勘繰りつてやつだ。二人で夕食用の薪を拾っていただけ。誤解だ。訂正してもらおう」

「へー」

悪魔っ子は、小ばかにしたように、小さな手で握っていた槍の穂先で私たちのうしろを示した。

「砂の上にね、跡が残っているけど」

イスハパンと二人でいつしよに振り返った。なるほど、傾いた日を受けて、くつきりと。

「……あれは……蛇が這った跡だ……」

「へーへーへーびー、砂漠に大蛇が二匹か、おもしろい言い訳ね、

へっへへ」

「蓋然性がある限りは確率の問題だ。オアシスの近くだ。どうして蛇が出てこないと言い切れる。悪魔の一般的な常識で原因と結果を取り違えている。つまり自然現象を解釈するとき可能性があるかぎりにおいては……」

悪魔っ子は私を無視して、小さく羽ばたきしてイスハパンの前に飛んでいった。

「のぞきをやっていたねー、あたい、見たよ〜」

大男は、ばつが悪そうに目を逸らせた。うん、若い。うなだれてしまった。

「水浴びしてたのは、魔法使いの娘だね。……言いつけてこよ、言いつけてこよ」と

楽しそうに言いながら、私の周りを飛ぶ。飛ぶ。飛ぶ。飛ぶ。

高く低く輪を描いて飛ぶ。鳥というよりも巨大な銀蠅だ。飛びながら、こつちを向いて叫んだ。

「言いつけちゃうぞっ!」

黒いコウモリのくせに私を脅すつもりのようなのだ。

「どうぞ。できそこないの魔物の嘘を魔法使いが信じる、と思ってた? 好きなだけ言ってくれ」

私の周りを飛ぶ。迷っている、迷っている。魔物との取引は、相手から条件を言わせなければならぬ。でないと、貧乏くじを引く。どうせ、目当てはあれだろう。

「干しイチジクくれればね、黙っててもいいけどね……」

「よし。取引に応じよう」

「だめ」

悪魔っ子は、また目の前に飛んできた。握っている槍を左右に振っている。

「勇者は口がうまいから。このまえ干しイチジクくれるっていうから喜んだのに、食べられないヘタばかりくれたの、覚えてるよね? ヘタも干しイチジクの実体の一部だって、変な屁理屈こねてさ」

うん、昔のことは忘れた。

いや、あったかもしれない。

ああ、あった。しつこい奴だ。過ぎた話を蒸し返すとは、やっぱり女なのかっ！

「だからね、はつきりね、何個って条件つけてね……」

「わかった。飽きるまで何個でも食べさせてやる。どうだ？」

翼の音を強くした悪魔っ子は、空高く飛んでいった。あいつなりに喜んでいいるのだろう。たぶん……

その日の夕食は、小麦粉の団子と干し肉と乾燥野菜の煮込みだった。焚き火をかこんで、三人で静かに食べた。西に日は沈んで、気づくこともなく夜になっていた。

私の中の詩人が復活した。

オアシスの夜。

ときおり火の粉をあげる薪のまわりでは、夜の暗闇が静かに旅人の背中をいとおしむように包みこみ、かりそめの優しさで我らを漆黒の孤独へ誘おうとしていた。心のよりどころを絶やさぬように枯れ木をくべ、絆への熾き火を仲間とともに丹念につないでいく。

空を見上げれば、黒い天球には悠久に輝く星が、地上に生きるひとときの儚い命を煌きをもって哀れんでいる。

砂漠に疲れたすべての人に安らぎを与えるオアシスの木陰も、今は姿を消して自らの憩いのひとときを楽しんでいる。緑の木々は闇のなかへ人の目を逃れ、遥かにつづく明日へと備えて、音も無く眠りをむさぼっていた。

砂漠の夜は変わる。

市場の喧騒は街路を饒舌にさせ――

湧泉の水面は月影を孤独にして――

砂漠の沈黙は人生を寡黙にする――
樹木の青葉は木陰を泰然にせば――

爆ぜる薪を見つめながら、そ、をどうしようかと考えていると、悪魔っ子が飛んできて、干しイチジクをせがんだ。私の肩に乗って、うるさく催促しやがる。

耳障りな声で――約束したよね――と言って髪をひっぱる。

こいつにはオアシスの詩情も通用しない。

イスハパンに駱駝の背中に積んである荷物から持ってこさせた。さすがは、戦士にして従者の家系、準備に怠りはない。袋から二個とりだして、私が食べた。ヘタは焚き火の中に捨てた。袋の口を閉じた。

「終わりだ」

「えっ？ あたいの分は？」

「言っただろう。飽きるまで何個でも食べさせてやる、と」

「だから、食べてないってば」

「飽きるまでだ。私は飽きた。いつ――お・ま・え・が――飽きるまでといった？」

悪魔っ子は肩の上で立ち上がった。翼を震わせているようだ。

無視してやる。

「うそつき！」

叫んで、ライデンの肩へ飛んでいく。悪魔っ子に飛びつかれて驚いているライデンの耳元でこちらを見ながら

「あいつらね……」

しまった！

あのかきは動揺していて、こっちの条件を言い忘れた。このままではバレてしまう。

私は全身をばねにして、悪魔っ子に飛びかかった。

やったぜっ！

逃げる寸前を左手でひっかけて捕まえた。暴れるコウモリの翼こ

と胴体を握りしめた。右手は頭を握る。そのまま、ひねる。

こきつ

いい音がして、悪魔っ子の首の骨が折れた。ぐったりしたのを確かめて、砂漠の闇の中へ、焚き火の明かりが届かない遠くへ、投げすててやる。

ざまーみる。

元の場所に座ると、ライデンとイスハパンが、おびえたような、咎めるような目で私を見ていた。

「心配するな。あれは死神の手下だ。朝日が昇るころには、よみがえっている」

二人はほっとしたような顔になった。やはり、小さい生き物には愛着が湧くらしい。

「奴は……干しイチジクが大好きでね」

魔法使いと戦士の顔が、焚き火の明かりを受けていた。四つの若い目が私を見ている。真実を教えてやった。

「イチジクの種を口の中で噛み潰すと、人間の魂をつぶすときみたいプチプチして、たまらないそうだ」

悪魔っ子。こいつの役目は、私の魂が地獄に行かないように監視することだ。

よく覚えていないのだが、最初の冒険で死んだとき、なにか手違いがあったようで生きたまま地獄へ行かされて、渡し船でいざこざを起こしてしまったらしい。なんとなく、生意気な口をきいた渡し守と喧嘩して、船底に穴をあけたような気がする。詳しくは覚えていない。

怒った地獄の主からいろいろなところに回状をまわされて、私は死神にも名前を呼ばれなくなった。

暦にも見棄てられた。

私が本当に死んでしまうと、死神は特別な手続きしなければならぬ。と言って、生きて動きまわられるのも、まずい。日干しで動けなくするのが一番というわけだ。

つまり、私を生かさず殺さずに見張るのが、悪魔っ子の仕事だ。
奴はたいていは私の邪魔をしてくれるのだが、困ったことに、たまに助けてくれる。その言葉を信じるか信じないかは、信じたいか信じたくないかの内容次第で信じたくないときはないかもしれないし、あるかもしれない。

ふるさとの街

ふるさとの街

朝早く、東のオアシスを出発した。斜めからの太陽に、ナツメヤシの木が長い影を引いていた。

のんびり行っても陽が高いうちにビブリオの街に着くだろう。

駱駝の上で揺られながら、途中でイスハパン、我が従者に聞いた。従者は歩いて駱駝を引いていた。それでも目線の高さはあまり変わらない。

「なんで、歳のいかない魔法使いが、来てるのだ？」

「えっ、それは……」

口ごもる大男を、しつこく誘導してやると、吐き出した。つまり、

——ビブリオの街は魔物に脅迫された。傭兵隊に引き上げられた街の人は、魔物を恐れて街を明け渡した。そこへ隣国カロイドのアル王が条件をつけて、市長に街を取りもどすことを提案してきた。

その条件とは、魔法使いとして有名なライデン家の孫——私の後ろを駱駝で追ってきた娘——を差し出すこと。これが、普通の結婚ならお祝いだが、第十四夫人では、ライデン家の誇りが許さない。丁重にお断りしたが、今でも街の人たちは、結婚と街の奪回を望んでいる——

市長はライデン一族をかばってくれたが、板ばさみになって困りはてたライデンの祖母と母は、残っている魔力を振り絞り砂漠のなかに捨てられた私の位置を探りあてて、戦士と孫に復活させた、と言っわけだ。

これは謀略だ。直感した。もう、絵は描かれている。そいつを裏から破らないと。

先に行け、と言いつ残して、駱駝の歩みを遅くする。ライデン家の

孫娘が追いつくのを待った。

来た。

駱駝を並べて歩ませる。うすい緑の布で髪を覆っていた若い魔法使いに声をかける。

「君、魔法は使えるのか？」

「はい、少しなら」

「少しではわからない」

口調を強くして、冷たく突き放してやった。

「……癒しと回復、障壁の魔法、でも、ときどき失敗します。攻撃魔法は苦手です。あと、薬草のことでしたら母から」

「薬草を知っているのか。とても良い。これから役に立つ。期待しているぞ」

悪くない。

冷たくしても拗ねないで、きちんと自分の実力を答えたのは良い兆候だ。そして、あの母から薬草の知識を授かっているなら、期待できる。

途中の林の木陰で昼飯を食った。そのあと、ゆっくりお茶を飲みながら作戦を立てた。が、情報がない。戦士が説明してくれた。

街を出て、郊外に移り住んだ人たちが、何度か偵察隊を出したが、城壁の門を固めた魔物に食い止められて、中の様子が分からない。

腕を組んで考えた。

それでは、こんなのはどうだ？ 郊外の一軒家を借りて街を探る。その後、海側から小船で暗い夜に乗りこんで魔物たちを一匹ずつ……だめだ。戦士と魔法使いの経験値が足りない。

いろいろな手を頭の中で試していたら、悪魔っ子が生き返って追いついてきた。干しイチジクを一個、見せびらかしながら質問する。「悪魔っ子よ、街の魔物どもの隊長は？」

奴は空中で首をひねりながら不機嫌になる。昨夜、ちょっと強くなりすぎたかも知れない。手のひらで干しイチジクを転がす。こらえきれなくなったようだ。

「サイクロプスの一つ目野郎ね。力はあるけど、おつむは足りない」
「奴の弱点は？」

「知らないね」

「魔物の狙いは？」

「答えがないので、イチジクの実を大きいのととりかえて、手の上にのせた。」

不倫の槍で、魔法使いを示した。

私の直感は大当たり。

ライデンの孫娘は驚いたように悪魔っ子を見つめていた。

悪魔っ子に干しイチジクを投げてやる。空中で受け止めると、重みで少し落ちてから、そのまま、どこかに飛んで消えた。

敷物の上に座っていた戦士に聞いた。

「イスハパンよ、君は武器をもっていないようだな。剣士とか凶暴戦士には、なれないのか？」

「あつ、お、お、俺はこれです」

拳を突きだした。

「なるほど、期待しているぞ」

二人を順に見る。私は魔法使いを指差した。

「これからビブリオを奪回する。君は、魔法使いであることを絶対に話してはいけない。治療師だ。薬草は使えるな」

魔法使いはうなづいた。

「戦士。君はしゃべるな。腕を組んで立っているだけで良い」

戦士はうなづいた。

「そして、もし何かまずい事が起きたら、私にかまわず、魔法使いを連れて海へ逃げる。街の裏道は知っているだろう。路地から路地を通って、魔物をふりきって波止場へ出る。船で逃げるんだ」

戦士は唾を飲み込むと、さっそく腕組みした。

椀のお茶を一息で飲みこんで、出発。

しばらく進むと、戦士が寄ってきた。

「ゆ、勇者様……」

「なんだ」

イスハパンは後ろを振りかえった。

「魔法使い様……十六になるまでに返事をしないと……あと七日しかありません。親父さんがいれば断れたのに」

こいつ、妙に詳しい。ということはそういうことか。

「私たちは仲間だ。様はやめろ。魔法使いもだ。私も勇者だ。三人で協力しないと、心配するな。あつというまに片がつく」

駱駝に揺られながら、考えた。

自由都市ビブリオに雇われて、街を守るはずの傭兵隊が裏切って引き上げたのはおかしい。これは買収された、と見るべきだ。誰に？ 隣国カロイドのアル王しかない。奴の狙いは豊かな自由都市ビブリオ。魔物たちに街を奪わせて、その後から取引で撤退させる。取引の材料は、結婚に見せかけて手に入れた魔法使い……アル王は街を奪い、魔物は魔法使いを生贄にする。

と、なれば解決しなければならないことは

一つ、我々は街の中に入る。

二つ、隊長のサイクロプスをだまして、味方につける。

三つ、魔物を街から追い出す。

四つ、魔法使いは渡さない。

作戦を練りながら、予定どおり午後遅くビブリオの街に着いた。勇者の帽子と短剣を箱にもどして戦士にもたせた。荷物の中にあつた手ごろな布で頭を覆った。

三人で南の門に立った。

さっそく警備のゴブリンが集まってきた。門番のゴブリンは持っていた槍を交差させて、通せんぼした。

六人というか、六ゴブリン、集まった。取り囲まれた。みんな粗末な服を着て、長槍を持っていた。

「ここは、人間の来るところじゃねえ」

「この、デカぶつ、食いでがありそうよ」

「こっちの女は柔らかそうだぜ」

と、わざとらしく話していたが、私を見て

「こいつは肉が渋そうだ。灰汁が強くて煮ても焼いても食えない。おまえから血祭りに上げるか」

私は揉み手して、愛想笑いを浮かべた。

必要なら、私は卑屈にもなれる勇者なのだ。

「わたくしたちは、こちらの治療師様とお付の者です。隊長のサイクロプス様の目が赤く腫れたとの事でカロイド国よりお伺いいたしました」

「……そんな話、聞いてねえ……」

のど元に槍を突きつけられた。私は両手を上げた。

「おおお、これはこれは。カロイドからの急使で隊長のサイクロプス様の元へ行けといわれましたが……別に帰ってもいいんですけど、手荒に扱ったりしたら上の者から怒られるでしょうなあ。口から溶岩を流し込まれたり、串刺しにされて一年ほど硫黄の炎で焼かれたり、ああ、最近の流行だと、壘の中に臭いスズランと一緒に閉じ込める、てもありませんでしたっけ……いや、苦しむのは貴方ですから、私はかまいませんけどね。ただ、一刻を争うような事態です。なにしろ隊長様は一つ目ですから、さぞ、お困りかと思ひまして」

ゴブリンは躊躇った。

騒ぎを聞きつけたのか、七人目のゴブリンが顔を見せた。他の奴らより体格がよい。

明らかに嫌そうな表情になった。足音を忍ばせて、離れようとする。

「ちょっとそのゴブリン様」

私は手を上げて呼びかけた。

「揉め事がいやなら通して下さいな。三人ぐらい入ってもサイクロプス様は怒りませんよ。なにしろ強いお方ですから」

門番のゴブリンたちは通してくれた。

久しぶりに街へ入ると静まり返っていた。大通りには人影がない。三人で進んでいくと、にぎやかだった南市場に巨人のジャーンが手持ち無沙汰に二人たっていた。意外と警備はうすい。でもジャーンはこちらに気づいたらしい。まずい。路地に入って、小さな店の入り口から裏口に抜けた。

このあたりは、子供のころ、よく市場の屋台から西瓜の切れ端をかつぱらって逃げた場所だ。裏道ならまかせろ。

狭い路地を伝って、ジャーンを撒いてから街を二つに分けるビブリオ川の橋に出た。

さすがに四ゴブリンが橋の入り口で、がんばっていた。

いったん路地の影に引き返して、戦士のもっていた箱から帽子と短剣を出した。身につける。三人で橋に近づいていく。

また、槍で通せんぼ。

「カロイド国よりの急使だ。隊長のサイクロプス殿の元へ」

私は頭をふって、帽子の毛をなびかせた。迷っているゴブリンどもを怒鳴りつけた。

「ええーいっ！ 控えおろう！ この帽子と短剣が目に入らぬか！ それから魔物の責任論を、もう一度しゃべくつてやると、通してくれた。」

「して、サイクロプス殿はいずこに？」

「し、市長室に……」

答えたゴブリンを鼻で笑ってやった。近くじゃないか。

橋を渡る。なつかしい。私の書いた落書きが、欄干に残っていた。何を書いたかは秘密だ。

貿易商組合の高くて大きな建物を横目に見て通りすぎる。

橋の近くの市庁舎の入り口、雄鶏の紋章が掲げられている下で同じ事を繰り返すと、街の守備隊長、サイクロプスの部屋の前に案内された。三階の市長室だ。ドアのまえにはオークの衛兵が両側に腕組みをして立っている。

ここはかつこ良く、ドアを蹴破って入る。

どがん！

びくともしない。反動をつけて、もう一度。だめだ。樫の木でできたドアは頑丈だ。復活したばかりで、蹴る力が足りないのか？

戦士に体当たりさせようかと思っていたら、魔法使いが

「あの、勇者、これは手前に引くドアでは？」

なるほど、良くみると、そのとおりだ。笑って開けた。

勝手に変えるな！ 二人のまえでよけいな恥をかいたじゃないか！ 中には、サイクロプスが愛想笑いを浮かべていた。おそらく愛想笑いだろう、揉み手もしていたから。

かわいそうな一つ目野郎。頭の真ん中に毛を残して、少し充血した目で私たちを見た。

「お待ちしておりました」

間延びした声で、挨拶した。奴の示した長椅子、落とし穴や天井に仕掛けがないか、良く確かめてから腰を下ろした。うん、砂の上よりずっとましな座り心地だ。サイクロプスは正面の椅子に陣取った。

帽子は脱いだ。勇者でも礼儀は守らないといけない。

従者と魔法使いは、長椅子の後ろに立たせておく。

一つ目の魔物と話す。まず、ほめてやった。

「良い街だ」

「は、はい？ ありがとうございます……あの、アル王からの御使者と……」

「城壁を高くすると、もっと守りが堅くなる」

サイクロプスは疑わしそくに、上目づかいになった。

「……はい……」

「下水溝のドブさらいをすると、もっときれいな街になる」

奴は無言で、何度もうなづいていた。

「ついでに港も広げて、新しい埠頭を作る。外国の船がもっと立ち寄るようになって、この街も貿易で栄える。自由都市としての名が上がる。そうだろう？」

語尾を下げて、無理やり同意を求めてやった。

「は、はい、おっしゃるとおりで……それが……何か？」

「うん。明日から始めてくれ」

サイクロプスは押し黙った。しばらくすると、一つ目を瞬きしてから、意味が分かったのか、やっとなのように

「……それは……」

奴の言葉をさえぎる。

「サイクロプス君、これは上からの命令だ。すなわち魔王からの命令でもある。君も今、同意しただろう？　ぐだぐた言うようなら。私から魔王に進言して、君を魔法をかけた鎖で縛りあげ、錘をつけて溶岩の中に沈めようかなー？　と思いはじめている。で、話は変わるが、まず街の清掃から手がけるのはどうだ？　簡単にできるだろ。どうする？」

こんどは語尾を上げて、無理やり同意を求めてやった。

「は、その……いえ、しかし……私が命令された、ましたのは、ま、街の守備で……新しい魔王様から、そのようなことは聞いていません」

新しい魔王？

しまった、初耳だ。魔王はイブリースじゃないのか……

逃げるべきか？

いや。

ここは、押しの一手だ。

「この街の守りが堅くなつて、きれいになれば、兵士の士気も上がる。街が栄えれば、軍資金も豊富になる。それなら新しい魔王も喜ぶだろう。なぜできないっ！　守備隊長がそんな消極的はどうするっ！」

「で、ですから……立場がありまして……あの、私にも……」

サイクロプスは口ごもった。

「君にできないなら、私が手伝ってやる。外の衛兵を呼んで、責任者を集めたまえ。私がやってあげよう」

その日の夕方から、サイクロプスを人質にして街の清掃を指示した。

翌日から、三人と一匹で街の見回りをはじめた。サイクロプスの耳元で囁いて、下水溝の掃除を命令したのに怠けているスライムは蹴っ飛ばさせ、裏通りでほうきを持って油を売っているゴブリンは、槍で尻をつついてやる。手持ちぶさたにしているジンの悪霊にはゴミ拾いを命令させる。

魔物どもが汚した跡を徹底的に水とブラシで洗わせた。

見回りのついでに人気のない薬種問屋から、薬草を補充した。傷ついたり、病気の魔物はその場で従者に捕まえさせた。おとなしくさせてから、魔法使いが薬草を使って、ていねいに治療していく。傷には膏薬を貼って、腹下しには薬草を与えた。必要ならば、ゴブリンの疣だらけの額に手を当てて熱をはかり、薬草を調合していった。見た目は祖母に似ているが、性格は母親似らしい。

治療が終わった魔物たちは照れながら礼をして、仕事にもどっていった。

すぐに魔物たちの間で噂になった。治療師ライデンの笑顔を見て、仮病を使う魔物まで現れた。そういう奴は、戦士イスハパンが耳をつかんで追い払った。

ときどき、引きつった笑いを浮かべている魔物がいた。私たちを知っている奴だ。耳元でささやいてやる。

「上の方ではいろいろあるのだ。つまらない事は見なかった振りをしろ。いい子にしたら、治療師に会わせてやる」

雑魚の魔物は魔法使いの魅力で取り込んでいき、サイクロプスは孤立した。

街は、母なる流れビブリオ川で南北二つに分かれている。二日で南半分、三日で北半分がきれいになった。

清掃が終わった。

このころになると、門番も甘くなったようだ。昔の住人が一人、

二人と様子を覗いにくるようになった。そいつらの一人を捕まえて、市長への手紙を託した。

次の手を出す。

サイクロプスを市長の椅子に座らせて、その後ろにイスハパンを立たせた。

私は魔物の正面に立ち、机に手をついて話し合う。私の両側にはライデンの薬草に魅入られたオークを従えている。

「やあ、これから城壁を高くして、港を広げるには、人間の手を借りなければならん。そこで相談なのだが……諸君は、いったん街の外へ出てもらえないか？　ひとつの街で、人間と魔物がいっしょに暮らして、揉め事が起こると面倒だからな。それに無駄に兵を失えば、君もつらいだろう。私も面子がたたない。最良の手段だと思うが……当然、君も同意してもらえるな」

魔物の隊長は、驚いて立ち上がろうとした。戦士が後ろから肩を押さえて、座らせた。怪力のサイクロプスを押さえ込んだ。イスハパンのでかい図体は伊達ではなかった。

サイクロプスは背中を丸めた。ぶつぶつと口の中で文句を言っている。

まあ、さすがにここまでやれば、やり過ぎというのは、どんな鈍感な奴でもわかるだろう。でも、ここで、一つ目野郎が本気になるはずい。慰めてやった。

「心配するな。街はいままでどおり君のものだ。そのことに揺るぎはない。ただ、諸君は少し離れた場所、街の外に移るだけだ。何も変わらない」

サイクロプスは、震えはじめた。魔王を恐れている。安心させてやった。

「新しい魔王が文句を言ってきたら、私がとりなしてやる」

「ほ、本当に？」

あきらめた一つ目は、すぐるように顔を上げた。守備隊長になったことを後悔しているだろう。新しい希望を与えてやらないと。

「もちろん、君には意外と見所がある。部下を掌握する能力には私も舌を巻き上げさせてもらった。これから隊長として長く働いてもらう。だから……」

私は、いったん区切った。あとは一気に

「新しい魔王はどんな奴か、詳しく聞かせてもらいたいな。なに、ただ参考にするだけだ。君から聞いたとは、口が裂けてもいわないからさ。もう、俺たち友達だろう？ いっしょに街の清掃という困難な仕事をやりとげた親友だよな。いっしょに働かないか。褒美は金貨でざつくざく。食って飲んで唄って踊って夜明かししてぶっ倒れるまで、楽しくやろうぜ。どうだ魚料理は好きか？ なに？ 首を横に振ったりして、まだ食っていない？ じゃ俺が奢ってやる。採れたての活きの良い奴にオリーブ油をつけてじっくり焼いた奴だ。ああ、そうだ魚の目玉はまた格別の味だな。君にぴったりだ。目に良いからな。カロイド風の味付けがいいだろ。もう見ただけで、口の中に唾が湧いてくるって、なにしろ君は友達だからな、特別扱いだ。料理の皿をもってくるのは可愛い女の子だ、君の好みはどうだ、白い肌、褐色、緑も異国っぽくて良さそうだな……髪はどんな色で長さは？ 肩まで、腰まで？ さあ、さあ、気楽に話を聞かせてくれ」

サイクロプスは重い口でしゃべりはじめた。

新しい魔王は、科学技術に凝っているという。新奇な道具を見せられた魔物たちも支持しているようだ。前の魔王は魔物たちの支持を失い、城塞のどこかに閉じ込められている。サイクロプスにしっかりと聞いても、いることは確かだが、どこにいるかはわからない、と言う。

ちなみに奴の好みは、赤い瞳に青い髪、桃色の肌で耳のとがつている大人の女ということだ。そしてパツチリした目が寝不足で赤くなっていると萌えるというが……さて、どうしよう。

幸いなことに悪魔っ子は、サイクロプスに知恵をつけたりする邪

魔はしなかった。何を考えている？ と、思っていたら、アル王からの本物の使者が来た。

まずい。ばれるぜ。

サイクロプスを市長室から追い出して、戦士と魔法使いの耳を集めた。

とりあえず、会ってみよう。

いざとなったら、使者は窓から放り投げられることを戦士に言い含めた。市長室は三階だから、落ちてもしすり傷ですむ……それ以上は落ちた男の運だ。

イスハパンは力強く胸を叩いて答えてくれた。ここ数日で自信をつけたようだ。

私は市長の椅子に座って使者を迎えた。

入ってきたのは、小柄な奴だった。頭巾をかぶったまま、あいさつもしないで、一通の封書を懷から取り出した。机の上に置くと、そのまま後ずさって行った。封書には宛名がない。人には知られたくない密書だ。

と、いうことは、こいつも偽の使者……開いた。

使者と見比べながら、読み進めた。つぎに魔法使いに渡して読ませた。魔法使いは戦士にも読ませた。

魔法使いに目で合図して確かめた。

ライデンは返事を耳元でささやいてくれた。その甘い息。祖母を思い出すぜっ！

どうやら内容は確からしい。

隣国カロイドの内情は複雑だ。正式に即位したのはデル王なのに、その弟アルが軍隊の実権を握って、王位を横取りした。アルは軽装騎兵と弓兵の使い方に長けていた。

そして、デル王は幽閉されて、その側近たちは姫君を連れてビブリオに亡命した。王位復活を狙っているのが、姫君と老軍師のダロワになる。

目の前にいるのはダロワからの使者だ。

読み終わった私と目が会つと、頭巾をはずした。

着古した服を目立たなく着ていた。小柄で腰には細身の剣を下げている。その剣に余計な飾りはなく、短くて反りが強いのは、すばやく抜くためだ。おそらく、鞘から抜きざまに一瞬で、下から切り上げるのを得意技にしている。

黒い髪は短く切りそろえていた。小さな金縁のめがねを鼻に乗せていた。まるで少女のようだが、とても気障だ。姫君の好みなのだろう。

「どうやって入ってきた？」

「君と同じ方法で」

「さすがは軍師の息子だな」

気軽に答えたのに、使者は剣の柄を握り締めた。

おっと、危ない。でも奴との間には、市長の大きい机がある。腰を沈めていないし、いきなり斬られることはない……えっ？

手紙には血のつながるものと書いてあったが、こいつ、女？
ダロワの娘か。

よく見れば、妙に肩はうすいし、首は頼りなく細い。肌の下は筋肉ではなく、つるりとして透き通る白い肉だ。でも、瞳は濃い褐色。切れ長の目の中で落ち着いている。細くてしっかりしたあごは、意志の強さの現われだ。跳躍への準備を整えて、うずくまった砂漠のトビネズミ。そんなふうにも見えた。

これは、申し訳ないことをした。謝ろうかなと思っていらい、その気を読まれた。

「どうだ。アルを滅ぼすために手を組もう。とりあえず、街の守備に弓兵と長槍兵を十名ずつ加勢できる」

使者は、一歩近寄った。私は鼻で笑ってやった。

「ごめんだ。自分の街は自分で守る。お引き取り願おう。……ああ、帰り道は危険だ。ジャーンの護衛でもお付けいたしましょうか？」

使者はかなり傷ついたように見えた。身を翻すと帰った。

ライデンの（小さくなった）夜香蘭と千日紅の魔法ブティックよん

ライデンの（小さくなった）夜香蘭と千日紅の魔法ブティックよん

街から魔物を追い出した。奴らは浜辺で遊んでいた。どうやら海は初めてらしい。浅瀬に入って、飽きずに水のかけっこをしていた。スライムは砂の上でねっとりして、隊長のサイクロプスは膝をかかえ、しょぼくれていた。

街には市長と槍を持った五、六十人の若者が来た。手紙の返信だ。私は助言した。城門の守りを固めて、魔物たちには、命令だといって外から城壁の修理をさせておけば良い。ときどき、魚料理でたぶらかせと。そして、一つ目に思い出させないため、アル王からは決して言わないように口止めした。

あとはまかせた。

三人でビブリオの西門から出て、ライデンの家に向かった。半日の行程だ。昼前についた。

魔法使いの家はビブリオ川の支流、白エボラ川のほとりだった。このあたりまで来ると、猫柳の木が茂り、系杉の街路樹に小鳥の飛び交う姿も見られる。丘陵地にまばらに立っている田舎風の邸宅では、猫でも飼っているのだろう。ときどき茶色の縞猫が垣根の下から、伸びた草をかき分けて私たちを見上げていた。

着いた場所はライデンの祖母の別宅ではないか。見た目はちよつと痛んで傾いた普通の家だが、夾竹桃の生垣には

『ライデンの（小さくなった）夜香蘭と千日紅の魔法ブティックよん』と書かれた横長の木の札が掛けられていた。真新しい看板は百日草の花で飾られていた。

ライデンの祖母と母も、軒から下がっているダチュラの大きな花

の陰から入り口まで、迎えに来てくれた。

魔法を自分のために使っているのだろうか、二人とも相変わらず若い。性格そのままに、祖母は黒い服、母は白い服を着ていた。

「ようこそ、勇者、復活おめでとう」

「ようこそ、戦士。娘を守ってくれましたね。すばらしいわ」

「やあ、ひさしぶり」

ライデンの祖母と母に久方の挨拶をした。

家の中で冷たく冷やしたお茶で、一休みした。

孫娘のとなりになすわったイスハパンは背中中に鉄棒でも入っているかのように緊張していた。たしかに奴がちよつとでも動くと、椅子は壊れそうに軋んだ。

ライデンの母に月の動きを予想してもらった。

部屋の奥から持ってきた分厚い書物の頁を繰りながら、母は算木を使って計算してくれた。

次の新月は三十三日後とわかった。

「では、従者よ。三十五日分の食料と水、野営用具と駱駝を準備して、三日後に戻ってきてくれ」

「かしこまりました」

戦士にして従者、イスハパンとは、ここでいったん別れた。奴は親父の仮小屋にいつて、冒険の手はずを整えてくるだろう。ライデンの祖母に、もう一杯のお茶をお願いしてから、私は驚いて見せた。

「あっ！」

「どうしました」

「イスハパンに言い忘れた。伝えてくる、すぐもどるから」

そう言い残して、駱駝に飛びのって追いかけた。分かれ道の先で、口笛をふきながら駱駝を引いて歩いているイスハパンに追いついた。

「おい、戦士。もどってくるときは、白い花束を忘れるな」

「えっ？ …… ば、冒険に必要でしたっけ？」

「君のための装備だ」

イスハパンは目をぱちくりさせた。

「ライデンの孫娘の誕生日を忘れたのか？」

「で、でも」

奴の日焼けした顔がさらに黒くなった。面の皮を一皮むけば赤くなっているのだろう。

「なあ、魔法使いに手を出さないつもりか？ あれは競争率がめちゃくちゃ高いぞ。今のうちに立候補しておかないで、どうする。細身で長身でさわやかで口がうまくて、髪がさらりとした長髪で思わず蹴飛ばしたくなるような男に口説かれたら、いどころだぞ。そうになったら、おまえは一生、後悔する。夜も昼も寝ている間も夢の中で自分を責める。なぜあの時、思いつて言わなかったのだ、と。今しかない。白い一輪の野の花でも良い。持って行ってやれ」

「で、でも、お、お、お、俺みたいなのとじゃ、じゃ……ふ、ふ、不釣合い……」

私は駱駝のうえで両手を腰にあてて、胸を張った。

「戦士よ。男の価値は勇気で決まるのだ」

言い残して、ライデンの家にもどった。

その日の夕食は豪華だった。

うなぎの燻製を前菜にして、赤エボラ川のカエル骨髄スープ、川鱒と旬の薬草付け合わせ、めったに手に入らない食用チューリップの甘い球根サラダ、締めくくりは、子羊の腿肉あぶり焼きビブリオ風と続いた。うまい。ライデンの母親が、借りてきた馬を飛ばして市場から食材を買い集め、祖母、母、娘の三人がかりで作ったようだ。ライデン一族の料理の腕は一流と呼ぶのにふさわしい。孫娘がこまめに皿を運んできた。

デザートは生の石榴が出た。しかも一人に一個ついた。こんな辺鄙な場所で、占いと魔法ブティックの小間物を扱っていて、決して儲かるとは思えないのだが、どうしてこんな贅沢ができるの？ と思った。

まあ金に関しては、女は見た目よりしっかりしているから……

テーブルの燭台に灯をともし、食後の濃いお茶を飲みながら、四人で語り合った。

私は、愛しいライデンの祖母に尋ねた。

「街の外に魔物を置いたままでは、まずい。すぐ城塞に出かけて、新しい元締め魔王をメてくる。そこで、規定の年齢に達して、移動の技が使える活きの良い魔法使いを紹介してもらえないか？」

正面にすわっていたライデンの祖母が、少し眉をひそめて言った。
「財宝も奪ってくるのでしょうか？　うちの子では駄目？　移動の秘儀も教えてあるし……」

「だって、まだ十六だろ」

「あら、いやだ。最近の子は発育が早わよ、無理に十八にこだわらなくても」

そうだった！

私は興奮して、両手の握りこぶしでテーブルを叩いた。はずみで燭台が踊って踊って踊って、倒れそうになったとき、立ち上がった母が手で押さえた。

相変わらず美しい気品をたたえているライデンがそう言うのだ。

私を魔王の『命の泉』へ後一步のところまで導いてくれた、あの空前にして、おそらく絶後の美しい魔法使いが断言したのだ。間違いはない。なぜ、私は年齢にこだわっていたのだ？

移動の魔法さえ使えば、それで用は足りる。帰り道が確保できれば良い。

「どうだね、孫娘君。来るか？」

尋ねると、こっくりとうなづいた。迷いはない。

彼女は薄い茶色の普段着に着替えていた。清楚な中にも、そこはかかない美しさを匂わせていた。

その決意にあふれた横顔は、私と冒険にでかけた、あのときの祖母にそっくりだ。潔く、気高い。がめつく財宝の分け前を要求しなければ、祖母だって、もっと高貴になれていたのに残念だ。

いざ、出かけむっ！　でも、そのまえに

「預かってもらっていた短剣なのだが、いつのまにか安っぽくなっていた。魔法の効き目が切れたようだ。もう一度、強力なのやつてもらえないか」

魔物は体のどこかに『命の泉』を隠している。それを絶てば消滅する。『命の泉』を残しておく、何度でも復活した。魔法の短剣だけが、魔物の命を絶つことができる。

正面にすわっていた祖母が、孫娘に目をむけた。若い魔法使いは立ち上がった。

いま、その実力が見られる。

魔法使いは、左手の薬指を伸ばして、空中に大きな何かの記号を描いた。そのまま、口の中で呪文を唱えながら、今度は白いテールクロスの上に、指先で七芒星を二重に描いた。魔法をかけるための結界ができた。

「ここへ」

若い魔法使いは静かに告げた。

私も立ち上がり、帯から短剣をはずして、見えない結界の中心にそっと置いた。

孫娘は指先で剣の位置をわずかにずらしてから、両手を上げると祈りはじめた。

「短剣よ。地獄で暴れて叱られて、死神に名を呼ばれず、曆にも見捨てられた勇者を守れ。魔物たちの命の泉を枯れさせる短剣よ。ふたたび、よみがえれ。私が精霊に捧げる言葉とともに」

そして、詠唱にとりかかった。

「……山のかなたの空遠く、光り輝く鉄の精、来たりませつてば、我が家に。絶対来てね、今すぐに。遠い道のり越えてきて、願いをかなえてくれたなら、いついつまでも、いつまでも、鉄を鍛えるものたちに、命じてくれよう、やさしくと。ウーツの鋼は美しく、光り輝くそなたにも、心あるなら伝えてよ、ためらうことなき切れ味の、ためらい傷は痛いけど、刃に付きたる赤い錆、それは苦いかしよっぱいか……」

そのとき、母親が指を鳴らした。
孫娘の集中力がとぎれたようだ。

「ああ、だめ……失敗……お母様ったら」
若い魔法使いは恨めしそうな目をむけた。

「ふふ、まだまだね」

美しい母は椅子の上で半身をひねり、小ばかにしたように娘を見た。

「詠唱のなかで、光り輝く鉄と言って、そのあとすぐ、光り輝くそなた、になっています。長たらしい反復で修飾しているけど、それは、かえって良くないの。いつも教えているでしょう。もっと論理的に魔法を組み立てなさい」

母親は、娘をすわらせてから、ゆっくり立ち上がると、左手の中指を伸ばして、空中に大きく複雑な記号を三度、描いた。そのまま口の中で呪文を唱えて精霊を呼び寄せた。

「勇者、鞘から剣を抜き、ここへ」

今度は白いテーブルクロス的一点を示した。言われたとおりに置いた。彼女は剣の向きを変えてから、指先でまわりに、十三の花弁を持った花丸を描いていった。魔法をかけるための結界ができた。

母親は、抜き身の短剣の上に両手をかざした。手のひらを上へ下へ、指先は柔らかく動かしている。まるで、剣に触らずに動かすつもりのようなのだ。

いや、動いた！

魔法使いの指先から蜘蛛の糸よりも透明な霊気が伸びて、冷たい鋼鉄を震える針のようにかすかに動かした。

……ような気がする。

長い集中の後、魔法使いの母親は、手の動きを止めた。つぎに、短剣に顔を近づけて、呪文をささやいた。

「短剣ちゃん、もっと切れるようにならないと、お仕置きしちゃうぞー」

うおおおおおっ！

熟達した魔法使いのすばらしい技に、短剣は細かく身震いしたかと思うと、鈍かった刃が燭台の明かりを受けて、急に凄みのある冷気を放ちはじめ、虚空の暗闇から姿を現し、人の行いを無にする魔物たちの尽きない命の泉を断ち切る、その役目にふさわしく星の欠片を全身にまとったようにきらめくと、剣の根元から鋭い切っ先にまで輝きの脈動がつづいていき、やがて最後のうねりとともに光の一滴が剣先からこぼれ落ちた。

……そんなふうに見えた。

一つの魔法をやり遂げた母親は、満足げな笑みを浮かべ、私に向き直った。

「勇者よ、朝日とともに出かけて黒エボラ川の河原へ行き、適当な石を一日かけて探しなさい。日没のとき、左足か右足に当たる石があったなら、それは砥石として使えるかも知れません。熱心に探せばきつと見つかります。それで月の夜に短剣を研ぎなさい。完璧に仕上げれば、よりいっそう鋭くなります」

「ありがとうございます」

私は貴重な助言に篤く礼を述べた。

……でも……黒エボラ川は遠い上流にある支流だぜ。今回は間に合わない。それより、もっと大事なことがある。ある意味、贅沢な要求だから私は出来るだけ、ていねいに頼んだ。

「あと、まことに失礼なお願いだと思うのですが、あの、剣の鞘とそれに、握りのここ……」

鞘にもどした短剣。付いている宝石を三人の魔法使いに示した。

「本当は金剛石と赤と青の鋼玉なのに、ガラス玉みたいに偽物っぽくなって、これも、その……もとの本物っぽい輝きにできませんでしょうか？」

魔法使いの母と祖母は、困ったように互いの顔を見交わしていた。どうやら、かなり難しい魔法を要求してしまったらしい。あわてて、付け加えた。

「無理でしたら遠慮しておきます」

「では、わたくしが」

テーブルの正面にいた魔法使いの祖母が、魔法使いらしく音もなく、ゆらりと魔法使いの如く立ち上がった。魔法使いっぽい神秘的な黒い服を着て、魔法使いみたいな赤く細かい襟飾りがついていた。そのまま、魔法使いのゆったりした足取りで歩いてくる。そして、いかにも魔法使いのように私のそばに立つと、

しずかに魔法の声で

「あなたの短剣を握りなさい」

言われたとおりにした。

我が愛しきライデンは、腰をかがめると私の顔に唇を寄せた。熱い吐息で、ふっと耳の穴をくすぐってから、耳元に触れるくらいの近くで、物憂げに呪文をつぶやいた。

「本物よ」

そうだった！

私の心は一瞬で晴れ上がった——もしかしたら、預けていた私の高価な短剣を、二人が金のために売りはらい、安物と交換したのではないかという卑劣な考えを、かすかにでも抱いていた自分を恥じた——

幼馴染で、不世出の美少女にして、唯一無二にして、比べるものがない孤高の魔法使いライデンが断言したのだ。他人にはガラス玉みたいに見えても、私の目はごまかせない。

これは本物の宝石にちがいない。

なぜなら熟達した魔法使いが言い切ってくれたからだ。我が愛しのライデンの言葉は、ただの石ころも、光り輝く宝石に変える。

私は心の底から納得して、磨きぬかれた技に賞賛を贈った。

その夜、私は久しぶりに柔らかい寝台で寝た。

毛布をあごまで引き上げながら考えた。まったく、ライデンの一族は若くて可愛い。魔法は精神に力を与え、歳をとらないのだろうか？ それにしては結婚した夫たちは不運が続いている。

それでも、女だけで三人の暮らしは楽しそうだ。

そんなことを考えていたら眠気が襲ってきた。清潔なシートと毛布にはさまれて、私は復活してから初めて、不安なしに眠りを貪った。夜中過ぎに誰かが来て、護符といっしょにまじないをかけてくれたようだが、よく覚えていない。

イスハパンが帰ってくるまで、そのまま食って寝て、作戦を考えた。課題は三つある。

- 一つ、砂漠の奥深く、魔物の棲家、城塞へたどり着く。
- 二つ、城塞の魔王を倒して、財宝をいただく。
- 三つ、財宝を持ってもどってくる。

問題は水だ。駱駝の背に載せた水が尽きるまえに、三つを片付けなければならぬ。

一つめ、長く困難な旅だが、砂嵐が起きなければ予定通りいけるはずだ。ただし、中間点の赤黒白の大地を越えたら、引き返すことはできない。水が尽きる。

二つめ、新しい魔王の弱点がわからない。ここはやはり、古い魔王を助け出して、新しい魔王を倒してから、古い魔王を私の短剣でやる。古い魔王の弱点は、最初の冒険で、ライデンの祖母が探り出していた。魔王の三本の髪の毛だ。

一つめと二つめがうまく行ったら、あとはライデンの孫娘君の腕を信じる。ふつうは十八になって、魔力がたまるのを待たないと移動の技は使えないのだが、ライデンの祖母が保証してくれた。

移動の魔法は、魔法使いが生涯に一度だけ使える大技だ。孫娘君はきつとやってくれるだろう。

信じるだけ、信じよう。ライデンの祖母が確かに言ってくれたのだ。信じれば、信じられる。ライデンが言ったのだから、信じるられるときは信じたいと、信じなければならぬと、私は信じている。

なぜなら、かけがえのない愛しきライデンの言葉だからだ。

旅立ち

旅立ち

約束の日。

私は早起きして、祖母が準備してくれた勇者の新しい黒い服を着た。白の縁取りが鮮やかだ。身がひきしまる。

部屋を出て朝食のテーブルに向かった。席についていたライデンの一家三人に朝の挨拶をする。

深皿に山盛りにされていたのは、手作りオーガニックシリアルと干しぶどう、それに生のイチジクが置かれていた。シリアルにかけると山羊の乳は、大きなピッチャーに入れている。

その陰には見覚えのある黒いものが……閉じられた翼が見えた。ライデンの母が、お茶を準備しながら、いたずらっぽく笑った。

「あら、ごめんなさい。その邪魔なの、かたづけます」

「また何か、やらかした？」

首を折られた悪魔っ子を、私は指でつついた。動かない。まるで、しかばね屍のようだ。

「お湯が沸いたから、ちょっと目を離れた隙に窓から飛び込んできで、イチジクにかぶりついて」

母は悪魔っ子の翼をつまむと、無造作に生ごみをいれる壺に投げこんでフタをした。

「イチジクを持ったまま逃げようとして、飛べなくなって。ほーんとに馬鹿な子で」

そのまま、娘のほうを向いて、付け加えた。

「おまえも気をつけなさい」
「ばしゃ！」

ライデンの孫娘は、使っていた匙を投げ捨てるように皿の中に置

くと、テーブルを軽く叩いて立ち上がった。何か言いたそうにしていたが、黙ったまま食卓を離れて部屋を出ていってしまった。

テーブルの反対側にいた祖母が取り繕うように

「娘よ、あの子に、もう少し優しく……」

「あら、そんなつもりじゃ。それに娘の教育はわたくしの責任です」
おっと！

家庭内のごたごたに巻き込まれるそうだと。これは早く出発するに限る。

私は揉め事のきらいな勇者なのだ。

と、思っていたら

「ストーリー！」

家の外から、イスパパンの駱駝を止める声が響いてきた。
手早く、朝食をかきこみ、外に出た。

戦士は明るい灰色の服に赤い帯、頭には縦につぶれた鉤形の帽子をかぶっていた。折り目がきちんとついて新しい。黙っていれば若手の大商人と見間違えるほどだ。

「ずいぶん早いな」

「夜明けまえに出てきました。あの、ちょっと、よ、用事もあったもので、そ、そ、そ、草原に」

奴の駱駝を見た。荷物を積んでいる。花も用意しているようだ。

私は胸の前で、親指を立てた握りこぶしを示して元気をつけてやった。イスパパンは、一瞬、泣きだしそうな顔になってから、激しく首を縦にふった。

ライデンの母が出てきた。

「あら、イスパパン、おはよう。ちょっと待っててね。すぐ支度させますから」

そう言つて、ひっこんだ。

女のちよつと待っててね、は絶対信用するな、が私の堅い信念だが、イスパパンには、かなーり、長ーい時間だったろう。ライデンと私が使う騎乗用の駱駝を引きだし、準備の確認をして時間を

つぶした。

やっと三人で出てきた。

「ほんとに、この子はグズで、ごめんなさい」

ライデンの母が、孫娘の背中を押しながら、出てきて謝った。

そんなことは、どうでも良い。ライデンの孫娘は、待たされた甲斐があるほど、きれいだった。砂漠用の白い衣装を着ていた。胸元と袖口には、若草色の刺繍が施されていた。

濃い灰色の瞳をひきたてていた。

刺繍……

祖母も母も手芸の趣味はないはず。というか二人とも料理と男の扱い以外は、ぶきつちよなのだ。つまり、孫娘が自分で縫ったか？
悪くない。

そして、朝の光のなかで出発前のお決まりの別れを交わした。

お元気で、がんばってね、娘をよろしく、迷惑かけるんじゃないよ、水には気をつけて、イスハパンりっぱだわー見直しちゃう、日焼けはお肌の大敵よ、食料はだいじょうぶ、お土産は気にしないでね、さよなら、さようなら、またね……

ありったけ交わしてから、ライデンの母の冷たい手を握り、祖母の暖かい手で握ってもらった……彼女とは、もう生きて会えないかも知れない、胸騒ぎがした。

白い毛帽子をかぶり、魔法をかけた短剣を帯に吊った。

駱駝に乗った。

「いざ、砂漠の彼方へ。夕日の沈むところ魔物の棲家、世界の西の果て城塞へ。邪悪の魔王を打ち倒す。それが我等の使命」

決まり文句を言ってから、別れを告げた。

「さらば」

そのまま、後ろを見ないで駆け出した。

私に追いつくまでの間に、イスハパンはうまくやるはずだ。

……やるはずだ。

やるはず……

……はず……

ライデンの孫娘が追いついても、戦士はなかなか来ない。ずいぶん後ろを付いてくる。良く見ると、肩を落として駱駝に揺られている。駱駝もあの大男を乗せるのは疲れるだろうな。

出発の翌日の夕方、イスハパンが手配していた通りに、東のオアシスで荷物運び用の駱駝を連れた商人たちと会った。連れている駱駝の数がやけに多く感じられた。

三人の駱駝商人のとなりには、薄笑いを浮かべて、ダロワの娘、密使の少女が立っていた。相変わらず腰に細身の剣を下げていた。気障なめがねも変わらない。

商人たちが用意した駱駝は、全部が密使の女に買い占められていた。

歳若い商人が言う。

「子供のころは、あんたの冒険に憧れていたんだけど、大人になると、こちらで商売でね。高値をつけたほうに売らせてもらいます」
残りの二人も苦笑いした。

「勇者、この前の支払いもすんでないですよ」
いちばん年長の駱駝商人が言った。

まだ生きていたのか、しぶとい奴だ。

私は説明してやった。

「城塞の近くで駱駝は放す。ちょっと借りるだけだ。街を取り返してやったのに、君たちは信義を裏切り、よそ者に駱駝を売って、私と競わせて値段を吊り上げようつてのか？ ビブリオの商人としての誇りは、どうした？ そもそも商売というものだ……」

三人の商人は声をそろえた。

「商売ですから」

あきらめて、駱駝を横取りした女と向き合った。

「なんで邪魔する？」

「なぜかって？」

小柄な少女は勝ち誇った笑顔を浮かべた。

「僕は君と同じ。砂漠と魔物が好きだから」

思わず、帽子を脱いで地面に叩きつけたくなった。

僕女かよ！

私は、自分を僕と呼ぶ女の声を聞きたびに、こめかみの血管が切れそうになる勇者なのだ。理由は無い。ただ、私の体の中を流れる赤い血潮が、わけも無く煮えたぎって頭へ逆流する。

私の怒りに目もくれないで密使の女はつつけた。

「ハンスグラム砂漠の奥深く行くのだろう？ 僕もいつしよに行く」……なるほど、それで駱駝が多かったのか。僕女の方も連れてきていたのだ。でも……砂漠を甘く見ている。これから、一つ間違えば、呻きながら自分の運命を呪って、渴いて死ぬ世界に入る。私は片手を上げて、指を折りながら教えてやった。相手を打ち負かすには論理が欠かせない。

一 駱駝は水袋を運べる

二 女は水袋を運べない

三 よって、おまえは無駄に水を飲むだけの足手まとい

小柄な密使の少女もすました顔で片手を挙げた。

一 駱駝を買うには金がいる

二 おまえは金なしの勇者

三 よっておまえは、水を運ぶ駱駝が欲しいなら、僕を連れていけ

僕女は私と同じように、指を折りながら数えていった。うつう。

私に論理をもって反論した女はライデンの母以来だ。しかも、僕

女の言うことは、私よりも理屈が通っていた。

私は論理を超えた論理で、僕女を論破してやろうと決心した。

師匠の技を盗んで、この領域にくるまで苦労した。

いま成果を見せてやる。

につこりと微笑んで、相手に余裕を見せつけてやってから論理を展開していく。

一 私は、カロイドの奴らがきらい

二 したがって、おまえがきらい

三 ゆえに、さつさと駱駝を置いて帰れ

砂漠の衣装に身を包んだ僕女は、私の理屈にたじろいだ。が、すぐ立ち直って片手をあげてまねをした。冷たい笑いを浮かべると、歯切れ良く反論してきた。

一 駱駝たちは、僕が好き

二 したがって、おまえは駱駝からも嫌われている

三 ゆえに、おまえこそ、駱駝の下僕になってさつさと準備しろ

私のまねをして論理を超えてきた。

なかなかの論客である。

ライデンとイスハパンは心配そうに私たちを見ていた。駱駝商人の目と耳もある。勇者が歳のいかない娘っ子と金のことで罵りあったとなれば、街の噂になってしまう。

密使の女をオアシスから離れた木陰に連れていって、草の上に座った。

ここなら二人だけで話ができる。私は再び、論理的に取引をはじめた。

一 城塞の財宝は私の物

二 財宝は私と魔法使いと戦士で三等分する。したがって、おまえの分け前はない

三 よって、口の悪い僕女は、日焼けして死んでしまえ

ダロワの娘は、むっとしたようだ。

一 城塞に財宝はない。古書の読み違いが噂の原因

二 僕は砂漠の地理を調査する。したがって、財宝があっても勝手にしろ

三 よって、金の無い男は、駱駝に蹴られて死ね

私の懷に金がないのは事実だが、僕女は非論理的なってきた。こちらが優勢だ。論理の整合性、語彙の豊富さ、修辞のうまさ、私が勝っている、はずだ。

なぜなら、僕女は財宝の分け前を自分から捨ててきた。そういうことなら、連れて行っても良い。何か別の目的があったとしても、僕女が砂漠の厳しさに負けて、とちゅうで逃げ出してしまえば、駱駝の代金は丸儲け。

よし。あとひと押しで決める。

私は片手を高く上げた。

一 泣き言をいうな

二 死んでも知らん

三 財宝がないってのは嘘だろ？

僕女は、だいが気持ちを高ぶらせているようだ。ずれてきためがねを右手の人差し指で押し上げた。

一 よけいなお世話だ

二 よけいなお世話だ

三 行ってみればわかる。僕は地理学者だ

「地理？ 学者？ 君が？」

「悪いか」

女密使は、胸を張って答えた。たしかに、女の黒い瞳は、可愛さや優しさや、男への媚ではなく、長い学問の困難をのり越えてきてことを示すように、晴れやかな知識の輝きをたたえて落ち着きを浮かべていた。

この眼。ライデンの祖母も持っていなかった。

「歳はいくつだ？」

「ばしっ！」

平手打ちの返事が、油断していた私の左頬に返ってきた。

本気で女に叩かれるのは、お袋とライデンの祖母以外、こいつが初めてだ。打たれた頬の肉と左目のまぶたがひくついた。

「失礼な。もう一度言ったら……これだ」

わきに置いていた細身の剣に手を走らせた。

「分かった。名前は？」

「レンミツキ・ダロワ・アル＝シガティー」

「なるほど、シガテ族、ダロワの娘、レンミツキか。よろしく」

妥協の握手をしてから、さらりとした髪で、男物の服を着て、歳がわからないのに駱駝を買い占めて、城塞までついてくる僕女といったしよに、仲間たちが待つオアシスにもどった。

歩きながら考えた。

駱駝を買う金は誰が出したのか？ 若い地理学者が金持ちとは思えない。

……カロイドの姫君を推戴する軍師ダロワ、それと亡命者たち……魔物と結んだアル王がビブリオの街を手に入れば、強大な勢力を誇ることになる。王位の奪回は不可能だろう。

とすると……このレンミツキの本当の目的は……使者だ。

私はひりひりする頬をなでながら、情勢を頭のなかで整理した。

それから、僕女と駱駝商人を交えて茶を飲みながら、晩飯を食べながら、火に薪をくべながら、いろいろ話した。イスハパンは優れた従者だった。無口に客たちへ茶を配り、そつなくもてなしていた。

焚き火を囲む七つの影が、遠くで砂漠の闇といっしょになったやはり、隣国カロイドの様子がおかしい。噂では、大量の樫と杉の材木を買い漁っているという。

「何だと思う？」

私が問いかけてみると、三人の商人は、それぞれの推測を言った。ビブリオと隣国カロイドを分ける国境の大河、カカドウ川に新しく架ける橋の材料。でも、土台となる石材の注文はない。

攻城用の櫓か投石器。でも、カカドウ川に攻城兵器を渡せる橋はない。

戦争ではなく、新しい街を作るための材料。これも石材がないので『？』

ありそうなのは船の材料だが、陸の内戦に明け暮れていたカロイドには、大型船をつくる船大工はいない。

結局、確かなことはわからない。いろいろ噂が飛んでいるようだ。

「学者先生は？」

聞いてみると、レンミツキはためらっていたが

「おそらく城壁を崩すための投石器。杉はカカドウ川の舟橋を固定するため、表面を焼いて硬くして……」

「だから、あの舟橋じゃ重い投石器は渡せないって」

「そう、街を守るために、わざと不便にしてあるのさ」
商人たちが口をはさんだ。僕女はめがねをかけなおした。

「ばらして通す。渡った後で組み立てれば良い」

「そうお？ 組み立て中に襲われたら、どうするのよ」
もう一人が異議を唱えた。

レンミツキは砂の上に絵を描きながら言った。

「橋のさきに前衛で半円形の陣地を作って攻城兵器を守る。君たちが、うかつに攻めると横から伏せておいた軽装騎兵が突っ込んでくる。アルが良く使う作戦さ」

みな黙り込んだ。

カロイドの王位を横取りしたアルは、紛争の絶えなかった自分の国を一代でまとめ上げた。次に狙うのは、豊かな自由都市ビブリオだ。つい最近、街に税金を寄こせと言ってきたが、市長に断られているそう。ライデンへの求婚をはね付けたことも、開戦のきっかけになる。

でも、私は暴力が大きらいな勇者なのだ。

「まあ、がんばってくれ。私は城塞に行ってくるからな。戦争は君らにまかせた。街を渡すなよ」

「そうお？」

商人の一人が眉を吊り上げながら、語尾も上げた。

「俺たちが負けたら、あんたが復活したときの遊び場所、なくなるよ。アルは秩序と規律が大好きだから、いかかわしい店は根こそぎだろうね。商売には税金がかかって、街は火が消えたようになるって」

うん、それは困る。

乗りがかった沈む舟？ 毒を食べたらお皿も食べちゃってね、か。腹を壊すぞ。

翌日、三人の商人は、口々に我々の健闘を叫びながら、手を振って去っていった。

砂漠を越えて夕日のもとへ

砂漠を越えて夕日のもとへ

さて、魔王の棲家、城塞への旅がはじまった。

城塞へは、ここから砂漠の深部へ進まなくてはならない。

東のオアシスから、西のオアシスへ。そこから、赤黒白の大地を越えて、岩塔の盆地を潜り抜け、静寂の砂漠の奥深く、世界の西の果てへ。

夕日の沈むところに城塞の岩山がある。

行き方は簡単だ。ともかく西に進めば良い。砂漠の寂しさに耐えられる頑丈な心と、水がある限りはだいじょうぶ。だが、途中で尽きたら、それで終わり。

一日目は、準備のためにイスハパンと私でオアシスの井戸の水をくみ上げる。ライデンとレンミツキは、それを水袋と水箱に満たしていた。駱駝の背に乗せる。重い荷を駱駝は嫌がった。気の強い駱駝は唾を飛ばして、暴れようとした。

イスハパンと私で四十頭の駱駝をまとめていく。

歩きはじめたときは、午後になっていた。長く、困難で、気が重くなるような旅だ。

とくに、浮かない顔をして、しょぼくれている戦士イスハパンの姿を見ると……

ライデンも心配したのか、先頭を歩いている私の駱駝に寄って来て、相談してきた。

本当のことは言えない。

「心配するな。腹でもこわしているんだろう」

「でも……」

「それより、ライデン君……誕生日に何かもらわなかったか？」
ライデンの孫娘は駱駝に揺られながら、何も知らないように、にっこりと笑った。

「母から、やつつけちゃえブレスレットをもらいました」

左の袖を捲り上げて、細い腕をだした。金色の鎖でできた腕輪を示した。

「あと、祖母から、いいことあるわよペンダントも」

胸元をかきわけろ。おっと、あと少しで横乳が見える、と思ったら、細い紐につながっている赤い石を見せてくれた。

「ああ……良い贈り物だ。さすがは魔法一家……私のプレゼントは砂漠の中にある。楽しみに待っていてくれ」

つまり、イスハパンよ、失敗したな。私は振りかえって、後ろの大男を見た。まあいい。ゆっくり効いてくる薬もある。

僕女のレンミッキは駱駝の上から、旅人に踏まれて埃っぽくなつた道と灌木の茂み、ちよつと痩せこけた草むらを物珍しそうに見ていた。地理学者というのは、本当かもしれない。

——三日目

レンミッキが、だいぶへたばつてきたようだ。カロイドは馬の国だから、駱駝に慣れていないのだろ。私は笑いをこらえながら、僕女に寄っていく。

「やあ、学者先生。ご機嫌うるわしく。今日も楽しい旅だ」

「……」

朝のあいさつをすると、憂鬱そうな目をこちらに向けてきた。顔色が悪い。激しく揺られて駱駝酔いにかかっていた。今のうちに、気になっていることを確かめないと。

「財宝がないってのは嘘だろ？」

「嘘ではない……古文獻には……千金に値すると、難以交換……うつ……それを君らがかってに誤解して……古語の解釈を間違えている」

「そうか。で、君の役目は新しい魔王への使者か？」

ずばりと切り込むと、こちらに一瞥を加えて、前を向いてしまった。

「そのつもりなら、背中に気をつける」

「ぼ、僕は……地理学者として……」

「じゃ、密偵か？」

「……」

あまり、いじめると意固地になる。適当なところで切り上げてやった。

一日の旅が終わり、夕食は、疲れ果てているレンミッキに頼んだ。この辺で音を上げて帰ってくれば、しめたものだが、意外と我慢強い。イスハパンと一緒にたいて焚き火をおこして、野菜をきざんでいった。

見ていると、塩の入れ方も檸檬汁の入れ方も大ざっぱだ。

地理学者レンミッキは食欲がないようだった。自分の量を減らして、イスハパンの分を増やすと、みんなに皿をまわした。食べてみると、香芹を散らした煮込み汁料理はうまかった。

やはり、要領は良いのかもしれない。

見くびると、こちらの寝首をかかれそうだ。

夕食後、駱駝に積んである水箱のなかで、水漏れを見つけた三つに、解かした瀝青を塗って修理した。戦士の太い指が器用に動いてくれた。

——四日目

西のオアシスに着いた。小さくて東のオアシスに見劣りする。木陰も少ない。

このオアシスの水は苦い。でも、人間が飲める最後の水だ。空きができた水筒、水袋、水箱、と入れられるものはすべて水で満杯にした。イスハパンと二人で四十四頭の駱駝にも、順番で水を腹いっぱい飲ませた。

思いきり水を使える料理もここまでだ。あとは、乾燥させた種無しパンと干し肉、乾燥果実が主体になる。

この日の夕食は、ライデンに頼んだ。

小麦粉の団子と干し肉とニンジンと玉ねぎの煮込みだった。ライデンが香りつけに使った大蒜が食欲をくすぐった。

ただ、盛り方がおかしい。

私とライデンとレンミッキは同じくらいだが、イスハパンは皿からあふれるくらい多い。しかも、ちらりと見ると、肉も多い。いや、べつに食事の量や質でどうこう言うつもりはないが、なんだ、これは？

魔法使いが戦士に元気をつけようとしているのか？ それとも、ライデン対レンミッキで女の戦争が勃発か？ 面倒なことになりそうだと思いつながら、何かわくわくしてくるぜ。

翌日、イスハパンは駱駝の列を前、後ろに飛びまわって急に張り切りはじめた。

「ダワイ！」

列から遅れて怠けようとする駱駝に、イスハパンが気合をかけていた。若いのに駱駝を扱う腕は良い。安心して任せられる。ただ、私と二人で四十頭は、さすがに忙しい。

ライデンは日よけ用のベールを使いはじめた。顔を薄い布で覆い、手にも白い手袋をはめた。

なんてこった。かえって魅力的だ。確かに祖母の血を引いている。

——六日目

背の低い、いじけたような樹木も尽きた。ここから先は草と石ころと砂だけになる。

砂の上におもしろいものを見つけた。角材の薪が転がっていた。

元気になったイスハパンを呼んで見せてやった。

「君の爺さんと来たときの焚き火の跡だ」

奴は立ち止まって、じっと見ていた。

「うまい飯が食えるように、いっしょうけんめい、薪を運んでくれた。祖父君は働き者だったよ」

戦士は何か言いたそうにしていたが、黙ったままだった。

「どうした？」

「爺さんは……逃げたんですよね？」

イスハパンはぼつりと言った。

「ああ、虫がいたからな」

「む、虫？」

戦士は驚いたようだ。

「爺さんから聞いていないのか？」

「さ、砂漠の、ぼ、冒険の話はガキのころから聞かされましたけど、虫は……魔物のことばかりで」

「虫だ、とびきりデカイ奴。魔物のごちそうなんだが……猫くらいの大きさのコオロギとか、長くて足がわしゃわしゃ生えているダング虫とか……魔物がそいつを食っているところに踏み込んだら、祖父さん苦手みたいだったな、一目散に逃げた。背後の守りが無くなった私は後頭をガツンとやられて……」

「虫ですか……」

イスハパンは肩の力が抜けたようにつぶやいた。

「君は大丈夫か？」

戦士は太い親指を立てた握り拳を見せた。

—— 七日目

砂漠は、うねりを見せはじめた。砂丘が現れた。いや、この先でまた平らになるんだけどね。

人を拒む砂漠は表情を変えてきた。

大きな砂丘は風上側の安定した斜面をまわって、小さな砂丘は乗り越えていく。

砂丘の間には白っぽい平らな場所がある。砂漠の靈気が固まっていた。

僕女のレンミツキが駱駝になれてしまったようだ。ときどき駱駝を急がせて砂丘の頂上まで登って、駆け降りてくる。うろちよると目障りだ。

駱駝に揺られながら、ライデンの日よけ用のベールをあきれたように見ていた。

—— 九日目

駱駝が水を飲める最後の塩水の池に着いた。別名を苦味のオアシスまたは後悔の池だ。

なんで、こんなところまで来てしまったんだ、と旅人が嘆いたのが名前のもとになっている。

ここから先は、水が溜まっていいても、苦くて塩辛くて使えない。砂漠の霊気が旅人に警告を与えているのだ。嫉妬かも知れない。

駱駝たちに池から水を飲ませた。駱駝用の水箱にも補充した。あたりには向こう側が透けて見えるみすばらしい草むらがところどころに生えていた。

ここで一休みしてから、手分けして魔物の足跡を探した。ない。

サイクロプスが気づいて城塞へ知らせを送った形跡はない。とりあえずは安心した。私たちが先行している。

目の前にはめったに人の入らない砂漠が広がっていた。

イスハパンが持ってきた薪と草で、火をおこし、お茶を飲んだ。寝るころには月も沈み、満天の星空だ。私たちを脅すように、きらめきもなくただ光っていた。

—— 十一日目

砂丘はなくなり、草も尽きた。

ここはもう、口数の多い下手くそな吟遊詩人でも、二行しか語れない単調な世界だ。

下には黄色い砂。

上には青い空。

そして、太陽と地平線。

…… おつと三行か……

砂漠の詩人としては、もう少しひねりを効かせないと。私は詩想を練った。

砂色の砂に影色の影。

旅人をあざ笑う青い空と駱駝を避ける白い雲。

そして、たまらない太陽と近づかない地平線。

間抜けが一匹、歩いていく。

みんなが集まった夕食のとき、私が練り上げた詩を詠んでやると、僕女のレンミッキが嘲りの笑いを浮かべた。

イスパパンの用意したランプが、ぼんやりと私たちを照らしていた。学者は、私に対抗して、夕食後に書いていた記録の一部を読み上げた。

……西に至りて眼前に寂漠たる景色あり。深き砂漠なり。黄褐色なる塵埃の波頭は万丈を埋め、果て無く広がり往く手を阻まん。樹木、草莽無く動く物絶えて無し。陽高くして行人を酷熱と飢渴に到らしめども寂として避ける能ず。寥として蒼空には数片の白雲が浮かべど地平の彼方になれば引き寄せる術なし。

前途の人跡は皆無也。画然たる印象一片も無く皆茫々。

振り返りて我が駱駝の健勝たるを確認す。

行旅は砂漠にその痕跡を須臾の間留めたれども、後途の地平まで至るべき嫋嫋たる一線は虚空の陽炎に消え人の眼を持って補綴するを能ず。

駱駝は是砂漠の命にして旅人の歩脚なり。この閑寂たる砂漠に立

ち入らんと欲する奇矯の旅人は其の良たるを選別し最良たらんを心掛けるべし。

陽行きて後、日没また美しき哉。寡黙なる景觀一時にして燃ゆ。然れども宵闇速やかに訪れ、孤月陰影を移す。暗夜の星影また颯爽たり。

日暮れたる後は涼として夜半寒気強し。薪炭は無く僅少なる夕餉も鬱寥を呼び覚まさん。渴えまた甚だしく……

砂漠を知らない学者が、なに気取ってやがる。砂の上を良く見れば、虫もトカゲもいる。それに、夏はもっとひどいんだ。

記録を読み終えたレンミツキは、分厚い日記帳を閉じて胸にかかえた。黄色いランプの光が柔らかい陰をつくっていた。砂漠の地理学者も夜は変わる。

駱駝たちは離れた場所で膝を折ってすわり、砂の上で私たちを笑っていた。

——十四日目

ライデンが駱駝から落ちた。あまりの単調さに、駱駝の上で気づかないうちに眠ってしまう。駱駝の周りを歩いていた私が見つけた。怪我をしなかったのが幸이었다。

おしゃべりでもしてれば良いのだが、話が途切れたときに却って砂漠の静寂に飲み込まれる。

みな心の中で自分と語り合っていた。

砂漠の広大さと寂しさは、人の心を押し縮め、肌の下から出られないようにする。思ひは、家にも行かず海にも行かない。体の中を響き渡り、絶えることなしにむなしく木魂した。

みんな寡黙になった。

午後から砂の間に石が混じるようになってきた。

その夜、満月の下で眠った。

——十六日目……らしい

イスハパンが日付を間違えた。単調な風景と野営がつづくので、日付をナイフで板に刻む記録がごっちゃになってしまった。

レンミツキの記録にも、十三日が二日あった。

でも、午後には、旅の中間点、赤黒白の大地の東側に着いた。

ここは赤と黒と白の玉砂利が混じって、動かない川のように目の前に横たわっていた。赤黒い石の帯と砂の筋が北から南に幅広く入り乱れていた。歩くには厄介な土地だが、ここを東から西へ横切っていかなければならない。

レンミツキを呼んだ。

「ここから先に行くと、引き返せない。まだ間に合うが、どうする？」

「行く」

手短で迷いのない声が返ってきた。少し見直した。この旅の秘密を話してやった。

「帰りは移動の魔法を使う。君も魔法使いを守ってくれ」

一休みしてから、イスハパンと私で減ってきた駱駝の荷物をまとめた。水運びの役目が終わった十五頭を自由にしてやる。一列に並べてから、命令した。

「駱駝諸君、ちゃんとビブリオの街に帰れよ。商人たちがうるさいからな」

そして、魔法使いに頼んだ。

「通訳してくれ」

「えっ？」

魔法使いは、迷っていたが、右手で東の方を指して

「あっち。みんな元気だね」

と駱駝に話しかけ、手を振った。それだけで、頑固な駱駝たちもおとなしく、言いつけに従って東に帰りだした。

見ていたレンミツキが顔色を変えた。魔法使いのまえに立った。ならんで立つと、二人は姉妹のようにも見える。

「君、すごい魔法を知っているな」

「いいえ……ただ、なんとなく」

ライデンはさりげなく否定した。

駱駝たちは、列を作って地平線のむこうを目指して遠ざかっていった。湧き上がる蜃気楼のなかに消えていく。

ああ、そうか……私には、わかった……放したのは全部、雄の駱駝だった。

男を魅了するライデン一族の血脈、まことに恐るべし。

魔物との古い契約では、ここから西は魔物の領分になる。人も魔物もどちらも守っていない約束だが。

——十八日目……だと思う

赤黒白の大地を渡って、白っぽい砂漠に入った。

日が傾いてきたとき、早めに足を止めて、野営の準備にかかった。砂の上にすわって、三人に教えてやった。

「この辺はな……」

白っぽい砂をかき回した。あった。今回はツイていた。あるところにはあるのだが、ないところには、まったくない。……あたりまえか

「これだ」

砂の中から朝顔の種くらいの金の粒を拾いあげて、三人に見せてやる。

イスパパンとライデンも砂を掘り返しはじめた。でも、すぐに飽きた。遊びでやるなら、おもしろいのだが、たくさん集めようとすると仕事になる。たとえ金でも、砂漠の上を這いずり回るのは、あまり楽しい作業ではない。レンミツキは熱心で、かなり遠くまで一人で行った。

それでも、みんなで集まって見せ合うと、それぞれ手の平のくぼみが隠れるくらいは集まった。一番大きいのは、ライデンのものだった。小指の先ほどもある。

日暮れには、お茶もないわびしい夕食をとった。

ランプを囲んで寝る前のひと時を過ごした。

「でも……」

ライデンが口を切った。そのとなりには大男のイスハパンが座っていた。

「赤黒白の大地って、ふしぎですね。石が空から降ったみたいに、たくさん」

どうやら、祖母と母から冒険の話を聞いて、想像していたらしい。イスハパンが隣で、黙ったまま、何度もうなづいていた。この男も祖父から聞いていたのか。

レンミツキは膝をかかえていた。そのまま顔を伏せて言った。

「あれは川の流れた跡だ」

「へー。砂漠の真ん中に川ねえ……」

ライデンの母と来たときも、そんなことを言っていた。そのとき、私は笑い飛ばしてやったが、学者先生もかよ。

「あの石の色は、ビブリオ川の支流との関係があるかもしれない」

レンミツキは、そのまま

「ビブリオ川の源は、まだ分かっていない。支流は下から、白エボラ、赤エボラ、黒エボラ……」

「学者先生は口がうまいな」

私は笑ってから、感心してやった

「赤エボラ川は、水が赤くないのに赤エボラです」

意外なことにライデンが、地理学者に付いた。今夜の魔法使いは、母親のしゃべり方にそっくりだ。まるで、乗り移られたようだ。

「そりゃ……、あそこはアカガエルがたくさん取れるからだ」

「砂金は川で取れます。母が言っていました」

「鉱物学の常識だ」

ライデンの声に、僕女が味方した。なんか形勢が悪い。女たち二人が一気に攻めてきた。私は科学に弱い勇者なのだ。

「そして、山師の常識だろ」

嫌味を言つてやった。

「君の母上は、物知りで優等生で堅物だからな。私も屁理屈でやり込められたことがある。あれはひとつの才能だな。誰かに似て、ちよつと偏っているけど」

ライデンがにつこり笑った。イスハパンは黙ったまま、また何度もうなづいていた。

地理学者は顔を上げて、私をじつと見た。その深く黒い瞳は、やはりトビネズミを思い出させる。

私はゆつくりと三人を見渡した。

「さあ、寝よう。明日からもつと厳しくなる」

——十九日目……かもしれない。

再び小さな砂丘が現れた。みんな唇は乾いて、顎の線が鋭くなってきた。

——二十日目……だろうな

人の背丈の二倍ほどの岩の塔の間を、縫って進んだ。やつかいな岩塔の盆地だ。下には岩くずが貯まっていた。駱駝の足を傷付けやすい。一頭が動かなくなった。しかたない。荷物を移して、この場に残していく。

残された駱駝は、悲しそうな目をしていた。生きて帰ってくれ。

岩の迷路をたどつていくと、突然、行き止まりになっていたりする。迂回して、通過するのだが、わき道にそれたりして方向の維持が難しい。

イスハパンも駱駝をまとめるのに苦労していた。

日没で確かめると、少し北に偏ったようだ。

夜は岩陰で眠る。

周りを囲われていると、やはり安心できる。久しぶりにみんなゆつくりと寝た。

——二十一日目……だつたかな

岩塔の盆地の真ん中あたりで、腰までの深さの溝に出会った。浅いのだが切り立っていて通れない。戦士と駱駝を降りて、周りをさぐった。一ヶ所、崩れている場所を見つけた。ここを越えるとき、駱駝の一頭が岩角に水袋を当てて破いてしまった。

ついていない。駱駝への水の割り当てを減らした。

——二十三日目……おそろく

岩塔の盆地を抜けて、岩の狭間を通り抜けると静寂の砂漠に入った。正確には、岩漠と土漠だ。平らな岩盤の上にうつすらと、土がのっている。ところどころ明るい茶色の岩の床がむき出しになっている。

風も吹かないし、砂漠の砂がこすれる音もしない。耳が痛くなるような静けさが満ちていた。

私もレンミツキの記録をまねしなくなった。

おそろく

……年月に掘削されし奇岩林立して天空を指し其の奇観また得がたし。恰も行路を阻む迷路の如し。更に旅程を伸延せば一層静寂たる世界に至る。岩床上に土在りて足音無く又風も無し。眼前茫々《ぼうぼう》無音寂々旅人恐々。然れど避ける不能。余人を知らず駱駝上に在りて沈思黙考せば夢想忽ち無我に至りて魂魄醉酩彷徨三昧を覚ず……

こんな感じが、少し慣れてきたぞ。でも癖になりそう。そして、どうせあいつには詩人の心がない。

夜は岩の上で毛布にくるまった。服が土で汚れるのは、楽しくない。純白の帽子は、駱駝に背負わせた。土がつくと汚れが目立つから。

私は埃っぽく見栄っ張りな勇者なのだ。

——二十五日目……かな

役目を終えた駱駝十五頭を放す。

次からは、静寂の砂漠の名前を変えよう。ライデンとレンミッキが仲良くなって、しゃべっていた。砂漠の静寂を脅かす女たちの噂話……うらやましいような、腹の立つような気になった。

——二十七日目……のはず

静寂の砂漠を抜けた。抜けた。抜けた……

周りの景色は、砂と岩の大地になった。

やっぱり、今回の旅はついている。

砂漠の一部が低くなっているの、行ってみると、いかにもありそうだった。駱駝から降りて手探りで熱い砂の中を確かめていった。手ごたえあり。

駱駝に止まれ、を命令した他の三人も寄ってきた。

「見ろよ、砂漠の薔薇だ」

砂から取り出して、息を吹きつけてきれいにした。砂漠の靈氣が固まって、まるで石でできた花のようになっていた。これは砂漠のお土産として人気が高い。

私のまねをして、みんなで探した。私が二個、ライデンは小さいのを一個、イスハパンは三個で、レンミッキはなし。

口うるさい地理学者は砂漠の靈にも見捨てられやがったぜ。大笑いしてやった。

イスハパンが最後にみつけた薔薇は、大きさが子供の握り拳くらいで、色はとても珍しい青。花弁の数も多いし、めったに見られない美品だった。ライデンのは親指の爪くらいのもので、色は白、花弁は細かく、これもなかなかの物を拾ってきた。あとは茶色の平凡な薔薇だった。

私の見つけた分は、ライデンとレンミッキに一個ずつあげた。

私が駱駝にもどろうとしたときには、背後の戦士が魔法使いに声をかけたのが聞こえた。戦士が思いきりどもっている。

「こ、これ、あああ、あげ、あげる」

「でも」

「お、俺、きよ、きょう、興味ないからから」

「そう？ でも戦士が見つけたんでしょ」

「……やる」

夕食のまえ、ライデンはイスハパンの見た砂漠の青い薔薇を、大事そうに布に包んで、見ていた。

がんばったじゃないか。

——二十八日目……もうどうでもいいや

岩が尽きて、砂だけになった。

日暮れ。

地平線に変化があった。夕日の左下にぼつりと黒い点が見えた。

旅の目的地、魔物の棲家で魔王のいる場所、城塞が姿を現した。夕日の沈むところ世界の果てに魔界が見えた。

四人とも駱駝を降りた。今晚はここで野営する。

「魔法使い、地理学者」

二人を呼んだ。

「あの岩山のでっぺんに、見張り番長という魔物がいる。侵入者を見つけるためにな。地平線の鳥を見分ける奴だ。顔の半分が目玉になっている魔物と聞いた」

魔法使いは真剣なまなざしで城塞を見た。

「こつちを見ている。投げキッスしてやれ。ま、軽い挨拶だ」

ライデンは顔のベールをとると、唇に両手を当てた。城塞に向けて三度の投げキッス。

「学者も」

城塞に向けて三度の投げキッス。

その間に、戦士を手招きした。

「戦士も」

イスハパンは魔法使いの横に立って、二度。

ライデンとレンミッキに見とれていた見張り番長め、ざまーみる。

今夜はイスパンの唇でうなされろ。

私はレンミッキの袖を引いて離れた場所に連れて行った。

「城塞では魔物との戦いが待っている。君に無理強いはできない。どうする？」

地理学者は下げていた剣を手で叩いた。

「物好きだな」

「学者として、これほど楽しい旅はなかった。本に書かせてもらうよ。ありがとう」

「……！……砂金のことは黙っている」

奴は下から私を見て、曖昧な返事をした。

「ほのめかす程度に留めておく。約束する」

私は学者の袖を引いて戦士と魔法使いから、さらに離れた。誰にも聞かれたくない。

「君は、ダロワから魔王への使者だろ？」

地理学者は黙ったまま、否定しない。うすく笑った。袖を握っていた私の手を払うと、自分の駱駝へ歩いていった。

ふりかえると、魔法使いと戦士が、赤い夕日の中に黒いひまわりとたんぽぽみたいに立っていた。

ふたり並んで、赤い光が消えるまで城塞を見ていた。

——二十九日目……だよな

夜明けとともに起きて、口からあふれるほど水を飲んだ。久しぶりに満足した。私とイスパンはついでに髭を剃った。

魔法使いと地理学者は、湿らせた布で顔と手足をぬぐった。

ここから必要なものは、騎乗用の駱駝と三日分の食料と水。ランブとたいまつ三本。そして、それぞれの身の回り品。

最後の突撃に欠かせないものだけだ。

余った少ない水は、すべて駱駝たちに飲ませた。荷物を整理して、積み替える。

「元気でね」

水を運び終えていなくなった駱駝たちは、魔法使いの言葉になづいたが、帰らない。黒い目で私たちを見て立ち尽くす。置いていくことにした。

イスハパンから、小さな皮袋をもらって砂漠の砂を詰め込んだ。

「何だ、それ？」

「用心袋さ」

地理学者に教えてやる。

準備を確かめたあと、服装を整えた。

「行こう」

三人に言って出発した。

見張り番長に見られている。駱駝たちも彼方から見ていた。

ゆっくりと西の城塞をめざした。私たちが来たことは、すでに魔王も知っているだろう。

日没後、短い眠りをとって、星明りを頼りに進んだ。

——三十日目……砂漠の旅が終わる日

城塞から出発しているだろう迎撃隊をかわすため、進む方向を南に変えた。余計な戦闘はさけない。どうせ城塞の入り口で魔物が待っているのだから。

午後からは南東に進む。逆光の中に黒くなった城塞の壁面が右手に見える。駱駝を早足にした。大きく南から回りこんで、城塞に迫る。

日没とともに駱駝を急速歩にして、速度をあげた。イスハパンも駱駝に乗った。人の足では追いつけない。

駆けつづけていると、戦士の大きな体に乗せた駱駝は、遅れぎみになった。イスハパンを先頭に立たせた。四頭の駱駝が、イスハパン、ライデン、レンミツキ、私を乗せて、乾いた星空の下を一行になってひた走る。いずれも足がはやい。良い駱駝だ。

でも、ひでー揺れた。

「ダワイ」

まえから、駱駝を励ます戦士の声がかすかに聞こえた。私は駱駝に鞭をくれて、走り続ける先頭に駆け寄った。彼方に浮かぶ赤い星を示して進路を北東に変える。あとは城塞の裏口まで真っ直ぐだ。夜半、走りつづけた人も駱駝も疲れが濃くなった。見張りを立てて、一眠りした。

見張りの順は、ライデンとレンミッキ、イスハパンと私にした。まず、ライデン組が見張りに立った。二人は南と北に分かれる。

イスハパンと二人になると、小声で語りかけてきた。砂漠の静けさも、明日への不安を鎮められないようだ。

「じ、祖父さん、すごく反省してました。ゆ、勇者様に迷惑をかけたって……」

「気にするな」

戦士は砂の上に横になって、夜空を見たまま言った。巨体が黒く固まっていた。

「それで、親父は俺のこと、いろいろ、き、鍛えてくれました。俺は絶対、逃げません」

「いや、逃げても良い。一言、言ってくればな。君たちは命が一つしかないし、私は……どうにでもなる」

「そうですか？」

イスハパンは、強い口調で返事をした。

「そうさ。もう帰る手段はライデンの移動の魔法しかない」

「お、俺たちは……魔法使いと学者さんだけでも……」

「そうするよ」

戦士は力強くうなづいた。

私は眠れないままに、横になって星の動きを見ていた。交代のときが来た。私は暗い星明りを頼りに歩いていき、膝を折っている駱駝とライデンの傍に立った。

聞いてみる。

「君は、母上とうまく行っていないのか？」

「えっ？」

少しのあいだ考えてから

「わたしの魔法の腕、どうですか？」

「中の上、でも才能はある」

思ったままを答えた。

「……お婆さまみたいな魔法使いになりたいのに、母は薬草とか錬金術とか地理とか歴史とか……あと行儀作法とか、つまらないことばかり」

「好きなようにしな。でも、これからの時代は、薬草とか勉強しておいて損はない。ビブリオでの使い方は見事だった。そっちの側の才能が強いかな。……ところで、踊りはどうだ？」

「母よりは上手だと思います」

暗くて、ライデンの表情は分からない。交代を告げると、魔法使いは寝場所にもどった。

すわって耳を澄ました。暗闇では、魔物のほうが目が効く。足音だけが頼りだ。でも、駱駝の息遣いがうるさい。

眠さをこらえて闇のなかで見張りをつづけた。星空は動き、ぼんやりと二つ並んだ白い星くずの塊が地平線の上に見えた。

頭の上で、星がひとつ流れた。

時は来た。

「集まれ」

小声でみんなに声をかけた。夜明けまでの隊形を説明する。私と戦士が先行して、魔法使いと地理学者は後ろから来る。暗闇のなかでひととき濃い影の仲間を見渡した。

「乗れ」

駱駝を早足にして進む。予定通り、夜明けとともに城塞に着くだろう。

城塞は星空のなかに、台形の黒々とした影になって、私たちのまえに立ちはだかっていた。

城塞へ侵入

城塞へ侵入

夜が明けると、さつそく城塞の警備兵に見つけられた。駱駝を止めて寄って来るのを待っていると、城塞の岩を背景にして、長槍を持った人型のジンが六匹走ってきた。

ひき付けてから砂漠で拾ってきた砂金を手のひらに乗せて、朝日を受けるように奴らに見せびらかす。黄金の輝きに魅せられた魔物たちは足を止めた。

用意していた砂を入れた皮袋に、手の平の砂金を落とす。皮ひもで口を縛って、戦士に投げた。魔物の目は袋を追っていく。

「思いきり、遠くへ」

城塞と反対方向、すこし右に外れるように親指で示した。

怪力イスハパンが駱駝の上から、力いっぱい投げた。空高く飛んでいった皮袋は、砂漠の真ん中に落ちた。

魔物たちと向き合い、微笑んでやった。

「朝の挨拶がわりだ。みんなにあげるよ。早いもの勝ちだぜ」

魔物たちはいつせいに、皮袋を目指して走り出した。その隙に、城塞の岩山のふもとにたどり着く。黒い岩のかけらがいっぱい砂の上に落ちていた。駱駝から、水筒、装備と砂漠の記念品を入れた肩掛け鞆をはずして、身につける。戦士はたいまつを背中にくくりつけ、片手にランプを持った。

駱駝の首を撫でて別れを告げてから、城塞の岩にそって歩いていった。岩の裂け目があった。城塞にいくつかある入り口の一つだ。

「や、奴ら戻ってきます」

魔物を見ていた戦士が、ささやいた。

戦士、魔法使い、地理学者に目で合図して、入り口に飛び込んだ。

洞窟の入り口には、白い衣装の女が待ち受けていた。

「あら、お客様？ 待っていたわよ。それでも食らいなさいっ！」
なかなか目鼻立ちの整っている女だ。胸も大きいし、腰もくびれている。でも、白すぎる。若い女は透きとおった声で歌いはじめた。洞窟の奥を塞いでいる何本もの鉄棒の柵がかすかに見えた……

魔物の歌が耳に響く。この甘い歌声はセイレーンの誘惑。

ああ、だめ……骨抜きにされてしまう……足が動いて……引き寄せられて……気が遠くなっていた……

……

私が夢から醒めると、セイレーンは額を押さえて、うずくまっていた。泣いている。

「……ひどい……顔にぶつけるなんて……」

セイレーンの足元には、布といっしょに茶色い砂漠の薔薇がころがっていた。ライデンが興奮した顔でつぶやいた。

「生意気よ」

手を伸ばして、まだ夢見心地のイスハパンの頬をひっぱたいやる。戦士も目覚めたようだ。

セイレーンは呻いた。

「うう、三人やれるはずだったのに……」

僕女のレンミッキが腰をかがめた。落ちていた砂漠の薔薇を拾うと、もう一度投げつけた。

かわいそうな魔物は洞窟の外へ逃げていった。

砂を入れた袋を拾った魔物たちがもどってくるのが見えた。

奥に向かう。太い鉄棒が何本も天井から床まで通されていて、行く手を塞いでいた。ライデンが

「魔法がかかっています」

私は鞘から魔法の短剣を抜いた。鉄棒を軽く叩くと、金属の音がした。

「魔法は消した。イスハパン、やってくれ」

戦士は進み出て、鉄棒を握る。両腕に力を込めた。曲がった。ラ

イデン、レンミツキ、イスハパン、私の順に潜り抜けた。また、戦士に頼んで鉄棒を元通りにさせ、ライデンが魔法をかけた。

ジンの魔物たちが洞窟の入り口に着いた。逆光のなかでうごめいている。私たちは奥に走った。薄暗い。

「よくもだましたな。中身は砂じゃねーか！」

鉄棒の柵までたどり着いた魔物の一匹が叫んだ。体が大きくて肩までしか通れない。

私は洞窟の先の曲がり角から、頭だけ出して答えてやった。

「失礼だな。君らが勝手に誤解しただけだ。金とは言っていないぞ」
ジンの魔物の一匹が、長槍を投げてきた。私は頭を引っ込めて、奥に逃げこむ。長槍が壁に当たる間抜けな音が木魂した。

イスハパンがランプに灯をつけた。火打石と火口をしまつて前進する。ランプを下げた私、ライデン、前に行く魔法使いを守る戦士、地理学者の順にした。最後のレンミツキには、後ろから来るものは斬れ、と命令した。

右に曲がって、左に折れた。昇って下った。いくつかの分かれ道がある。魔法使いの直感を頼りに選んでいった。地理学者は地図を書くことを主張したが、私は無視した。時間が無い。水も限られている。

通路の壁は荒削りの岩だった。動くランプの光が進むにつれて、両側の岩肌を照らしていく。

通路が少し広くなったと思ったら、行き止まりになっていた。先は一枚岩が塞いでいた。通路の両側には岩を刻んだくぼみの中に、三個ずつ、左は壺、右にはランプが置かれていた。

良く調べる。

行く手を阻んでいる一枚岩は、人の手ではどうしようもないが、何かのからくりで動きそうだ。天井は高く、ランプをかざして上を向いても暗がりのなかに確かめられない。

左に並んでいる壺は首が細くて長い。青銅製で栓がしてある。右の古めかしいランプも青銅製だ。いずれも、赤と青の細かい紋様で

細かく飾られている。取っ手には、それぞれ小さな木の札が付いていて、古い言葉で何か書かれていた。

手前から読んでいくと

細い壺一 左はうそつき。壺の栓を抜くな

細い壺二 君の夢のために栓を抜いて魔人呼び出そう

細い壺三 壺の二は当たり。お気の召すままに

ランプ一 右はしが良いと思うよ、通りたいならね。つまり僕。

ランプ二 ． ランプが当たりです。真ん中を選んでちょうだい。

ランプ三 ． はずれは帰りの近道よ。正しい魔人を呼んでね。

となっている。どうやら、壺の栓を抜くか、ランプをこすって、魔人呼び出し、岩を動かす仕組みのようだ。当りは六つに一つか……みんなの意見を聞いてみた。

ライデン

「直感……細い壺三です」

レンミツキ

「壺とランプのなかで目に付くのは入ってすぐ、右側で手前のランプ一だ。したがって、当りは反対側の細い壺三と思わせて、裏をかくて反対側のランプ三。という予想をしたから、その裏をかくて、最初のランプ一、という可能性が高いが、何かのなぞなぞ、あるいは暗号かも。ゆっくり検討するべきだ」

イスハパン

「お、俺には、わかりません」

私の考え。

「細い壺三だけが、他の壺のことが書いてある。そして、はずれのことを言っているのはランプ三……ランプ一だけは一人称を使っている。……と見せかけておいて」

そこまで言って、思いついた。やってみて損はないだろう。

水を飲んで渴きを癒す。

それから、私は人差し指を唇に当てて、みんなに口止めした。イスパパンにゆつくりと大声で言う。

「ここは行き止まりだ。引き返すぞ。ついてはだ、こんな仕掛けは不愉快でおもしろくない。腹いせに壺とランプは全部ぶっ壊してやる。次に誰か来たときに迷わないように、かけらのかけらまで徹底的にぶち壊す。戦士。準備してくれ」

程なく小さな音がした。細い壺二が、ことり、と音を立てた。しばらくして、また音がした。

なるほど、細い壺二が正解で、しかも中の魔人は臆病者だ。答えを知っていて、出られる機会が来たのに、壺ごとつぶされるのは耐えられなかったのだらう。

私は、当りの壺を選んで、左手で壺の首をつかんだ。蜜蝋で封をされていた栓を抜いた。

壺の口から青い煙が沸き出てきた。上から下に漂って目の前で渦を巻いていたが、そのうちはつきりして、人の形に固まる。

私は慎重に栓を閉じた。

出てきて魔人は腕組みして、闘士の体格をしていた。首筋は太い。顎は大きく、顔も悪くない。筋肉がはつきり見える砂漠の魔人風の服を着て、自分の肉体を見せていた。なで肩なのは、首のうしろの幅広い筋肉のせいだろう。

魔人が太い声で吼えた。

「壺を開けたのは貴様か！ 責任をとって、我が願いを三つ叶えろ！」

ふん。

私はせせら笑った。

体の割りに望みの小さい奴だ。私なら百は望みを並べ立てる。見た目より小物の魔人に冷たく答えてやる。

「たった三つで良いのか？」

「えっ！ 叶えてくれるの？」

「どうせ、水と女と食い物だろ」

魔人は細かく何度もうなづいた。

「長い間、壺の中にいたんだから、そのへんだろ。わかるぜーその気持ち。私も長いこと放置されてた。願いを叶えてやるから、そのあと、あの岩を動かして私たちが先へ通れるようにしろ」

「かしこまりました」

私が一枚岩を指で示すと、魔人は胸に手を当てて頭を下げた。やけにしおらしい。

私は、水筒から、手のひらに水を一滴こぼした。次にレンミッキの肩を押した。それから、干し肉のかけらを取り出した。

「さ、道を開ける」

「えっ！ 何で……」

「水は見せた。女も見せた。食い物も見せた。君の願いは叶えてやった。道を開ける」

「えー、だって、見せてくれただけじゃん……それに……こっちの女の子のほうが俺の好みだし」

壺の魔人はライデンを指差した。

「誰が水をいっぱい飲ませると約束した？ 誰が女を渡して、食べ物あげると。君は見たかったのだ。君の言葉を聞いて私はそう判断した。見たいという、君の望みはかなえてやった。不満なら、最初に条件を決めなかった君の責任だな」

「いや、でも……」

「約束を破るのか、これでも？」

右手に握っていた壺を壁の岩にぶつけた。金属の響く音がした。魔人の悲鳴と混じった。

「やめてください！ それ、私の家なんです」
思わず笑みがこぼれた。

「ふっふっふ……それは良いことを聞いた。家を壊されなくなかったら、はやくしろ」

もう一度、壺をぶつける振りをしてやると、魔人は太い首をすくめて秘密の言葉を漏らした。

「岩の前で、開けゴマと言えば」

私は魔人を見た。ずいぶん平凡な合言葉だ。それにこいつは見た目よりも臆病者……怪しい。奴の横顔からは、嵌め手の香りが匂っている。

「じゃあ、君がお手本をやってくれ」

魔人は目を泳がせた。

私は手にしていた壺で、思い切り壁を叩いて催促した。もっと、打ちつけようとする、と、

「あうう……開けチューリップ……」

私は壺をイスパパンに投げて、岩戸の前に立った。合言葉を言おうとしたとき、レンミツキが止めた。右手を上げていた。

「待て。この魔人は『開けゴマと言えば』までしか言っていないかった。チューリップも怪しい。最後まできちんと呪文を確かめるべきだ」

僕女のくせに、なかなか良いことを言う。私はイスパパンに目で合図した。

戦士の手の中で小さな壺が握り締められた。筋肉が盛り上がった。太い指の間で、そのまま潰れそう。

「ああ、ごめんなさいっ！ 岩のまえで呪文、ワクワクの花は夜開く、と唱えれば通れます。……だから壺を返して……」

私が岩の前で正しい呪文を唱えると、行く手を塞いでいた岩が左に動いて、道が開けた。ランプで先を照らす。異常はなさそうだ。数歩進んでから、振り返って仲間を呼んだ。

魔人が一人、後ろに残された。悔しそうに拳を握りしめている。

レンミツキが、背の高い戦士の手から壺をもぎ取って岩戸へ転がした。魔人は、あわてて駆け寄った。大事そうに拾いあげて、栓を開けようとしている。

地理学者は冷たい声をかけた。

「おい、失礼な魔人。侵入者を罠にかける呪文は？」

壺に気を取られていた魔人は手もとを見ながら

「えっ？ …… 開けゴマと…… あっ！」

ずーん。

天井から大岩が落ちてきて、地響きを上げながら、魔人を押しつぶした。間抜けな音を響かせて、魔人の持っていた壺が私たちの足元に転がってきた。

その壺をつま先で蹴ったレンミッキが、私たちを見わたした。

「僕はひっかけが大きらいな地理学者なのだ」

「まあ…… そうだな…… うん、奴も壺さえあれば復活できるだろうし。うん、たぶん正しい選択だ」

私は同意してから、戦士に壺の栓をしっかりと閉めさせた。奥に進んだ。

分かれ道。左の通路を選んで進んでいく。少し幅が広くなって、床、壁も滑らかになってきた。

少し進むと床は石板を敷き詰めたものに変わり、上には玉石が撒き散らされていた。ランプを上にかかげて照らしてみた。光は遠くまで届かない。しばらくは真っ直ぐな道が続いているが、小石はだんだん多くなっているようだ。

床に散らされた小石を動かさないように慎重に歩いていく。

かちーん。

回廊の後ろで音がした

「止まれ」

その音は、耳と同時に心臓を締め上げた。誰かが仕掛けを踏んだ。みんな立ち止まった。

私はふりかえった。

「何か仕掛けがあった。動くなよ、いま行くから」

「えっ？」

レンミッキが驚く。

かちつ。

また不気味な音がした。えっ？ 私の下だ。
つまり、踏んだのは私？

音も無く床が二つに割れて開いた。

落とし穴！

ばさっ、とか、どさっという感じで、底に落ちた。落とし穴の底には網が張られていた。四人で一塊になった。手にしていたランプは落ちた衝撃で、離してしまった。

「四名様、ご到着ー！ー！ごおちゃくううう」

鉄格子の外で、人型をしたジニーの魔物が大声を上げた。

私の胸の上にあったライデンの足をどかして、イスハパンの腋の下から、まわりの様子を見る。

普通の地下牢だ。天井が落とし穴とつながっている。地下牢の床まで人の背丈よりもわずかに高い。いま居るのは天井からつるされた網の中だ。落とし穴の入り口は閉まっていた。

私は短剣を抜いて、網を斬り破った。

牢の床に飛び降りた。仲間も降りてきた。まわりを良く見る。石造りの牢だ。薄暗いが明かりはついていて。

鉄格子から外をみる。通路を挟んで左右に三つずつ同じ牢があった。さっきの牢番は通路の右端の階段に座っていた。薄汚れた灰色の布地に鉄鉋を打った簡易な鎧を着て、短い棒を帯にはさんでいた。腰には鉄の輪をつけていて、そこに下がっているのは十本くらいの鍵だった。

縦横にしっかりと組まれた鉄格子はイスハパンでも無理だろう。錠も大きく頑丈そうだ。

レンミツキがめがねを直しながら、文句を言った。

「君が先頭を歩いていた。一番ひっかかりやすいのに、なぜ動いた？」

「すまん、音が後ろからして、うっかり」

侵入者の注意を小石にひきつけて置いて、音は後ろで響かせて引き返させる仕掛けだ。

いまさら分かってみてもしようがない。

仲間で怪我をした者がいないか確かめた。みんな無事だった。私は脱げてしまった帽子を拾って被りなおした。

いつのまにか新しいジニーの魔物が、さっきの牢番を連れて鉄格子のまえに立っていた。到着の声を聞いて出てきたのだろう。一見人間のようだが足元が霞んでいて怪しい。

それでも、こざっぱりした青くて長い服は折り目がきちんと通っていた。帯には、宝石がきらめく短剣を挟んでいた。短剣の柄からは青い飾り紐を垂らしている。

なかなかおしゃれな魔物だった。中肉中背、冷酷な感じに目が鋭い。

「武器を渡してもらおう」

魔物の命令で、私は短剣を、地理学者は腰にさしていた剣を、鉄格子の下に置いた。手で追い払われて牢の奥に下がった。魔物は私の短剣を見て言った。

「安物だな」

ひろいあげて牢番に渡した。

「おまえにやる」

つぎに地理学者の剣を取り上げて、満足そうな笑みをみせた。牢番が両手で捧げて扉の向こうに運んでいった。

そのあと、良く通る声で私たちに優しく聞いてきた。

「ようこそ。居心地はどうかね。足りないものがあれば、あの者に持ってこさせるが」

顎で、扉の向こうを示した。

「そうだな、冷たい水と暖かいお茶と新鮮な野菜とお粥と牢の鍵と城塞の地図と魔王の場所と柔らかい寝台と毛布と、それから駱駝と……」

「ふむ、そうか。では、食事は焼いたのと、煮たのと、どちらが好

みかな？」

「……煮てから焼いて、また焼いて煮て煮て……」

偉そうにしている魔物は私の答えを無視して、ライデンと向き直った。

「こちらのお嬢さんは？」

「……焼いたものです」

と魔法使いが答えた。順番に聞いていく。

「蒸したもの」

「ど、どちらでも」

地理学者と戦士が答えた。新しいジニーの魔物が、につこりと微笑んだ。牙がむき出しになった。

「よろしい。では、明日の朝、望みどおりに君たちを料理して進ぜよう。楽しみに待っているよ」

調子のいい奴だと思っていたら、こっちが食材かよ。

牙の魔物は立ち去って、最初の牢番が入ってきて残った。さて、どうしよう。鉄格子を破るのは不可能だし、脱出は難しそうだ。

魔法使いにささやく。

「ライデン。奴の腰に下がっているのは、鍵だ。魔法でとって来れないか？」

魔法使いは首を振った。

「距離がありすぎます」

魔物の牢番は階段の一番下に腰掛けて、何か汚れた巻物を読んでいた。

「地理学者、何か良い知恵はないか？」

少しばかり首を傾げたレンミッキとひそひそ話し。うーむ……ありふれた手だが……仮病を使って、魔物を呼び寄せ鍵を奪い取つか……

みんなと打ち合わせをしてから、イスハパンを床に寝かせて、病気のように苦しそうなうなり声を上げさせた。私は両手で鉄格子をつかんで呼んだ。

「おいっ！ 牢番、仲間が病気だ。ちょっと来てくれ」

魔物の牢番が来た。疑わしそうにこつちを見ている。奴は腰の帯にはさんでいた棒を抜いて、私たちを威嚇した。

「下がれ、離れろっ！ 誰がその手にのるか」

近寄ってきたところを、襟首をつかんで鉄格子に叩きつけて鍵を奪うつもりだったが、見破られた。この牢番、背が低く、丸い目をしていた。

「どうせ仮病だろ。うるさいから止めさせろ。俺の読書の邪魔をするな」

読書？ あの薄汚れた巻物が……まあ、こんな場所で働いていれば魔物でも退屈だろう。

閃いた。

「なあ、牢番君。……この城塞から北へ三千歩、西へ五千歩、南に二千歩行つたところを掘ると、何が出ると思う？」

魔物は疑わしそうな目で

「財宝か？ 埋めてきたのか？」

「汗が出る」

奴は馬鹿にしたように手を振った。かまわずにしゃべった。

「雄の力エルはゲロゲーロと鳴く、雌の力エルはケロケーロと色っぽく鳴く、二人で愛を確かめるためだ。では、愛の結晶の子供は何と鳴く？」

奴は首をひねった。しばらく考えてから

「ケロツコケロツコだ」

「残念、蛙の子はおたまじゃくしだ。鳴・か・な・い」

牢番の目が生き返ってきた。

「じゃ、じゃ。……ちよつと待つてろ。俺だつて、俺だつてな……そうだ……朝の駱駝は四本足で歩くけど、昼間の人間は二本足で歩いて、夕方みたいに三本足じゃない。なーんだ？」

さすがは魔物、ちよろい問題を出してきた。答えは分かっているが、知らないふりをしてやる。

「うーむ、さて？　おい、地理学者……知ってるか？　……おつと、紹介が遅れたな。この人は若いけど、すごい物知りの学者先生だ。きつと解いてくれるだろう」

そう言つて、レンミツキの肩を押した。

「すまない。僕にもわからない」

地理学者も、うまく調子を合わせてくれた。

牢番は得意げに言つた。

「手だけじゃ歩けないから」

私は大笑いしてやつたけれど、地理学者は笑わない。

「あれ？　面白くなかった？　じゃあね、えーとね、えーとね、いま考えるから待つて……」

魔物は必死に頭をひねつて、おもしろいネタを思い出そうとしていた。

私は先手を打つた。

「牢番君、面白い話と言えば、こんなのはどうか。むかしむかしあるところにお姫様がいました。それはそれは美しい姫じゃつたそう。肌は薄く削つた象牙の白さ、目は黒曜石のように輝き、唇は熟した石榴みたいに赤い。腰はくびれて乳はでかく、尻は桃に似てつるりと形良く、足は長く、手の指は細い。砂の上に足跡もつけないで軽やかに歩く姫君だつたそうだ」

牢番が耳をすまして聞き入ってきた。

「でも、その国には悪い王様がいて、美しい姫を見つけると、無理やり王宮の奥深く連れこんで、透き通るような薄い服を付けさせると、絹や更紗で飾つて異国の香を炊き込めた、それはそれは豪華な寝室のなかで、千夜と一夜の長きに渡つて美しい姫を手もとに置いて、後から前から、そしてとうとう横からも。嫌がる姫の硬くなつた場所に手を這わせると……」

私は牢の中を歩き回りながら語つた。そして、鉄格子のすぐそばに立つた。

「どう？　つづきを聞きたい？」

「聞きたいっ！」

牢番は、両手で鉄格子にかじりついた。すかさず奴の両手首を握って引っ張った。鉄格子に押さえつけられて、手を動かせなくなった牢番の腰の帯から、ライデンが鍵束を奪った。

「あっ！」

「声を出すな！ 牢番が鍵を奪われた、では、ただではすまないぞ。さっきの上役が戻ってきて……」

奴にささやいてやった。押さえる役をイスハパンに替わってもらった。

まず、私の短剣を取りもどした。それから鍵を確かめていく。四本目が合った。乾いた音を立てて、牢の錠が開いた。

さて……このまま抜け出だして、迷路を進んでいても時間がかかる……

「おい、牢番君。私は古い魔王に会いたいのだが、どこにいる？」

「し、知らない。知らない。お、俺は知らない」

鉄格子に押しつけられている魔物は激しく首を振った。その額には、知っています、と大きく書かれていた。

「そうか。じゃあ、君のような役立たずは、この牢に残して私たちは先へ進む。後はよろしく」

「そんなぁ……」

私は牢を出て牢番の後ろにまわった。

「さあ、しゃべれよ。困っているなら、私が良い手を教えてやるから」

魔物はあきらめた。

「この通路の奥、階段を三つ下りてください。古い魔王に会えます」私は右手を見た。なるほど、通路は下へ続いているようだ。

戦士に合図して、牢番を放させた。奴は戦士にきつく握られた手首を押さえた。

四本目の鍵を抜き取って、残りの鍵束を魔物に返してやった。

牢番に言い含めた。

「もし、誰かが来て、私のいないことに気づいたら、しらばっくれておいて、後からガツンといけ。私の仲間も協力するはずだ。落ちて置いてうまくやれよ」

それから、残る戦士、魔法使い、地理学者に伝えた。

「ちよつと魔王と話してくる。君たちは、ここで待っていてくれ」「僕も行く」

レンミツキが言ったが、無視して三人の入っている牢の鍵をかけた。

戦士が背負っていた松明をもらって壁の明かりから灯を移した。さて、いよいよ魔王と対面か……

イブリースの鎖

イブリースの鎖

奥の階段は狭く、暗かった。松明の明かりを頼りにして、慎重に進んだ。踊り場に出た。

私は、これからの取引を心の中で整理した。

- 一 財宝をいただく
- 二 魔王を倒す
- 三 仲間の安全を確保する

勇気をふるって降りていく。

さらに下に。また下へ。

明かりが漏れたきた。

広い部屋に着いた。片すみの岩のくぼみで灯心が燃えていた。階段の明かりの源はこれだった。

部屋の真ん中に、鉄の太い柱に鎖で縛られて、背中を向けている魔物がいた。魔王だ。上半身は裸だ。腰布だけは身に着けているようだ。

魔王イブリースの体は赤黒い。病気になった蠍を茹ですぎたような肌の色だ。全体は戦士イスハパンを上から潰した体。つまり、背の高さと横幅があまり変わらない。がちがちの筋肉質だった。そして、その盛り上がった肩の上には、見覚えのある黒いものが……

悪魔っ子だ。

ひとりで砂漠を渡ってきたようだ。こっちを見る。

「いよう！ どぐされ勇者、来るのが遅いね」

耳障りで舌足らずな声がした。気のせいだろうか、うれしそうな

響きが混じっている。

飛んできた。私の周りを飛びまわる。松明の火で、おしゃべりな悪魔っ子を焼いてやろうかと思っただけで、今は余裕がない。

「へへへ、勇者ちゃん。あたい、夜も寝ないで飛んで来たね。ほめて欲しいぞ」

松明をふって、悪魔っ子を追い払ってから、部屋を調べる。

部屋の床には、魔王のまわりを中心にして丸や四角や六芒星が、黄白色の線で幾重にも重なり合って描かれていた。魔王を閉じ込める結界らしい。

この結界を乱さないように部屋の隅をまわって魔王の正面に立った。悪魔っ子の翼の音が不愉快だ。

「やあ、魔王……もと魔王か……元気そうで、なによりだ」
奴は鼻を鳴らした。

「また、おまえか。哀れみはいらん。古いものは飽きられた。それだけだ」

魔王イブリースの目はでかい。鼻は横に潰れている。唇は口の大ささ似合って、ものすごく厚い。突き出た額があって、その上は禿頭だ。太い毛が三本生えていた。

魔王はさっそく取引の条件を出してきた。

「結界を解いてくれたら、おまえの望みを叶えてやる」

悪魔っ子が上から付け足す。

「魔王様には、あたいから良くお話しておいたから、安心して任せろね」

魔王の言った条件を良く考える。

おまえの望みを叶えてやる——たとえば、腹がへっているのに、水筒を渡されて、おまえは水を飲みたかっただろ？ 望みは叶えてやった——だめ。

私は頬を搔いて、条件を催促してやった。

「もう少し、具体的に言ってもらえないか？」

「しつこい勇者だな。誇りをかけた、男と男の約束だ」

「私は男より財宝のほうが好きなのだ。だいたいだな、ここで結界を解いたあとに、これをして欲しい、あれも欲しい、といったら、君は聞くか？」

「聞かないだろうな」

そして、魔王は、目を閉じて考えはじめた。苛立つくらい長い沈黙の後

「俺を縛っている結界を、おまえが解く。それをしてくれたら、城塞の財宝はおまえにくれてやる。新しい魔王は俺が倒す。その代わり、おまえは俺の『命の泉』には手を出さない。どうだ？」

奴の言った意味を吟味した。財宝がいただけなら、悪くはない。目の前の魔王イブリースを殺られないのは残念だが、これ以上、相手に譲らせるのも難しそうだ。

それならば

「私たちの安全を保証してもらいたい」

「俺の手下には、手を出させない」

私はまた考えた。――俺の手下――つまり魔王自身は含まれない。危ない。ひっかかるところだったぜ。

「君と君の部下は私たちに危害を加えない、だろ？」

「おまえ……本当に疑り深い奴だな……あたりまえだろう」

魔王は呆れたようだった。そして

「俺と俺の手下は、おまえたちに危害をくわえない」
よし。

「君を固めている結界を解くには？」

縛られている魔王が説明してくれた。その手順どおりに進めていった。

まず、床の紋様の一部を足で消していく。横幅の広い魔王が通り抜けられるように、奴のための通路を作ってやった。線を蹴散らかしていく。太い声がした。

「おい、ていねいにやれ。硫黄の粉だ。火の気は禁物だ」

「硫黄！ 地獄の炎ね」

叫びながら悪魔っ子は、部屋の入り口まで飛んで逃げていった。
天井ちかくで羽ばたきしている。

つぎは、魔王を縛っている鎖にかけられている魔法を解かなければならない。

私は魔王イブリースの脇に立った。吊るしていた短剣を抜く。
この魔王を解き放つと、もう後へはもどれない。悪魔っ子は、何を話したのだろう？ 取引に間違いはなかったか確かめた。

私はライデンによって魔法をかけられた短剣を高く振りかざした。
これから起きる困難に立ち向かえますように、と、願わずにはいられない。

ありつたけの勇気を掻きたてて、魔王を縛っている魔法の鎖に短剣を打ちつけた。

かきーん！

「うおおおお！」

雄たけびといっしょに、魔王は全身に力をいれた。ふくれ上がる筋肉。鎖がわずかに伸びたと思うと、はじけ飛んで下に落ちた。自由になったイブリースは私と向き合った。私を下から見上げて、大きな唇でにやりと笑う。邪悪そのものの笑いだった。魔王は拳を握りしめると、私に突き出して……

親指を立てた。

喜んでいるのだろう、たぶん。

結界の中心から外へ魔王は歩きはじめた。部屋を抜け出して、階段を昇っていく。悪魔っ子が魔王の耳元に寄って何か話してから、私のところに来た。

「あたい、魔王様にほめられちゃった」

そうだろう。そうだろう。そうだろう。そうだろう。

「悪魔っ子よ、新しい魔王は？」

「デン・シャイターン。元は門番ね。あの顔は、あたいの好みじゃ

ない」

ふたたび、牢のある階に着いた。

魔王は牢のなかの仲間を、ちらりと見たが手は出さなかった。まったく、牢番のもとに歩いていく。

気を付けの姿勢で待っていた小柄な牢番の横つ面を、魔王は思いきり殴った。魔物は奥の階段に、叩きつけられた。それから魔王は、手を貸して立ち上がらせた。

「新しい魔王につくか、俺につくか、どっちだ？」

「魔王イブリーズ様です！」

復活した魔王は、階段の上にあつた牢の間への扉に体当たりをはじめた。

その隙に、牢の錠を解いて仲間を助け出した。みんな、ほっとした様子だった。

悪魔っ子が飛んできて、ライデンに槍の穂先をむけた。

「この子、魔法使いの子供ねっ！ 勇者、聞いて、聞いて！ こいつの親はひどい。死んだ振りしてたあたいを大きな魚のお腹に入れてね、縫って、ビブリオ川の鰐に食べさしたんだよ。鰐のお腹の中は臭いし、出ようとしても鰐の牙が怖くて、出られなかったね。鰐さん大あくびしたとき、やっと出れたの」

私は笑って言ってやった。

「それは良いことを聞いた」

そして、笑いをひっこめた。私と悪魔っ子、顔を見合わせた。お互いに黙っていたほうが良いことをうつかり言ってしまったようだ。「でもね、カロイドが攻めてくるから、魔法使いの家、焼かれる、いい気味ね」

私はコウモリの化け物に目を走らせた。魔法使いも戦士も見た。

私は聞いた。

「おい、ビブリオの街は？」

「みんな戦さの準備してる」

「魔物は？」

「……知らないね」

しゃべり過ぎたことを気づかれたようだ。悪魔っ子は、魔王のもとに飛んでいった。地理学者が聞いてきた。

「おい、あれは何だ」

「砂漠の塵気楼ね」

私はとぼけて答えた。レンミツキが真顔になった。あわてて、なだめた。

「地獄からの使者、君とは関係ないから、あまり気にしないほうがいい」

何度目かの体当たりで行く手を塞いでいた扉が魔王の力で吹っ飛んだ。さすがだ。牢の扉なら魔法がかかっているはずだが、奴は力で打ち破った。

みんなで踏み込んだ。

牢番の控え室だった。壁は滑らかに削られて、机と椅子が置かれていたが、誰もいない。

机の上に、地理学者レンミツキの剣が置いてあった。ふたたび、取り返す。

物音を聞きつけたのか、あの牙の牢番が左の扉を開けてはいつてきた。魔王に気づくと、驚いたようだが、すぐ胸に手を当てて、腰を曲げた。

「イブリーズ様、ご復活おめでとうございます」

さわやかな声で祝いを述べた。

かなり調子のいい奴だ。だから出世して偉そうにしているのだろう。

魔王は疑わしそうに見てから、鷹揚にうなづいた。

かわって、レンミツキの鋭い声。

「おい、貴様。夕食は焼いたのと煮たのと蒸したの、どれが良い？」
剣の柄に手をかけて、腰を沈めていた。やる気だ。冷たい殺気が漂った。

「……あつ……わ、わたくしは……や、野菜が好きでして……」

うわずった声で魔物は答えると、作り笑いを浮かべた。

ついでだから、私も加わった。

「君、良い短剣を持っているな」

「えっ？ あ、そう、そうですか？ あつと、いま、あなたに、差し上げようと思っていたところで……どうぞ」

牙の牢番は、腰からはずした短剣を差し出した。

「そう？ なんか高そうな物を悪いね。それに相手が違う」

魔物はあわてて、ひっかけの大きらいな地理学者に短剣を両手で捧げた。

「いらん」

レンミツキの不機嫌そうな答えが返ってきた。

「じゃ、私がもらっておこう」

手を伸ばして、短剣をひったくった。肩から提げている鞆に収めた。やりとりを見ていた魔王が、牙の魔物に命令した。

「これから、新しい魔王に会いに行く。邪魔する奴は叩きのめす。おまえ、先頭に立て」

「わ、わたくしは、武器を持っていませんが……」

「手があるだろう、足もある。充分だ」

魔王イブリーズは、ぶっきらぼうに言った。

牙の魔物、魔王、牢番の順に部屋を出た。私、魔法使い、戦士、地理学者が続いた。

階段を昇り、回廊を伝っていく。

悪魔つ子は魔王の頭に乗って、愉快そうに後を見ていた。

小柄な牢番が、途中で振り返って私に聞いてきた。

「なーなー、さっきの話だけど、あれで終わり？ つづきは」

「つづきか。つづきは、嫌がる姫の後から前から……肩を揉んであげたのさ」

魔物は、前を向いて肩をすくめた。

回廊は奥へつづいている。

乱戦

乱戦

回廊の途中にあつた脇の扉のまえに、魔王が立った。部屋から扉越しに笑い声が聞こえる。魔王は太い脚をあげて、巨大な足で蹴破った。中に入る。

私たちは入り口から中をのぞき見た。衛兵のような、六、七人の人狼クトルブが飯を食っていた。みんな灰色の毛むくじらだ。狼よりは犬に似ている。かんたんな上着を着ていた。

テーブルの皿の上には虫だ。とびきりデカイ奴。足がわしゃわしゃ生えているダンゴ虫。あぶり焼きにされていた。

すみの人狼クトルブが、虫の脚をむしって口にくわえている。ダンゴ虫はいくつかに分解されて、中身のどろどろをすすられている。人間を食えないときのごちそうらしい。

「うえ」

どさり。

戦士イスハパンが妙な声を上げると、気を失って倒れた。どうやら、苦手な物を見てしまったようだ。ライデンがあわてて駆け寄る。鞆に手を入れて薬草を探した。

魔王の太い声が部屋の外まで響いた。

「魔王イブリースは復活した。味方せよ」

ほんの少し間をおいてから、人狼クトルブの魔物たちがいつせいに立ち上がった。

一人 「やつちまえ」

残り 「魔王様に忠誠を誓います」

一人 きよろきよろと周りを見比べてから「わおおーん」

一人だけ意見のちがった魔物は、ええっ、という顔になった。魔王がそいつを殴る。はずみでテーブルに乗っかって、そのままんどりうつて部屋の壁に叩きつけられる。崩れ落ちたところを、残りの魔物に噛みつかれて、ばらばらにされた。

そのすきに、魔法使いライデンの気付け薬とレンミッキの水筒の水で、戦士イスハパンは気を取りもどした。

「だいじよぶ？ 元気になった？」

「……はい……」

蒼い顔をした戦士が横たわったまま魔法使いに答えた。言いながら魔法使いの小さな白い手を、大きくて毛深い手で握っていた。二人で見つめあっていた。

その麗しいやり取りに気を取られていたら、牙の魔物が逃げた。

通路の奥の暗闇に消えた。牙の魔物の叫びが木霊する。

「イブリースが復活したぞお。知恵者の魔王デン・シャイターン様に味方しろおー！」

部屋からは、ぞろぞろと人狼クトルプが出てきた。私たちを見ている。取り囲まれた。いやな予感がした。

すぐ、私は戦士に手を貸して立たせた。

人狼クトルプは戦士の巨大な体に見下ろされて、足の間で尻尾を巻いた。実に分かりやすい。自分に尻尾がないことを感謝した。

魔王イブリースが、のっそりと出てきた。

「おい。客人に手をだすな。魔王イブリースが復活したことを告げて回れ」

人狼クトルプは四足で四方に走っていった。叫びが通路のなかを木霊する。

「古き魔王、イブリース様が復活したぞおー。みな味方せよ！ 偽物デン・シャイターンをやつつけるおー！」

禿頭の魔王イブリースは私に向かって、片目をつぶった。二度の冒険で、こいつとはやったりやられたりだったが、意外とひょうき

んな性格かも……

地理学者は部屋のなかに入って、顔色も変えないで虫を見ていた。呼び返す。

ふたたび、そろって歩きはじめた。通路は緩やかな上り坂になっていた。迷宮の中が騒がしくなってきた。ときどき人狼の遠吠えが聞こえた。

魔王の後を付いていくと、通路に岩の裂け目があった。腕一本が入るほど隙間だ。横目で暗い間隙を見て、通り過ぎた。

しばらく行くと、足音が少なくなったことに気づいた。振りかえると、最後尾の地理学者が、岩の割れ目を見ていた。腕を入れる。

良くやるぜ。何がいるか分からないのに。

私はランプをもって駆けもどった。

「ぐずぐずするな」

「手を入れてみる。湿っている」

笑っている地理学者の言葉を疑いながら、入れてみた。確かに岩の中はわずかに湿っていた。

「虫がいるのをおかしいと思わなかったか？ 砂漠の真ん中だぞ」

「……」

「この奥、岩のひび割れを伝って水がしみ込んでいる。下へ下へ滲んでいって、やがては一滴の水になって滴り落ちる。城塞の地下には池があるかもな」

「……」

「もしかしたら、それが君の言っていた財宝だったりして」

地理学者レンミツキの笑いは皮肉の色が濃くなった。

何か洒落たきり返しをしてやろうと、考えていたら前のほうから蹄の音がした。

「よける、壁に着け」

魔王の大声が響いた。言われたとおり岩にへばりついていると、目の前を白い塊がすごい速さで通り抜けた。通路の奥に消えていった。

「そいつは一角獣だ。勇者よ、まかせた」

また、魔王の大声が聞こえた。

え？ まかせるって、おいっ！

いったん、通路の奥に消えた蹄の音が、高鳴ったかと思うと近づいてきた。獰猛な一角獣の弱点は……

私は、壁に付いて背中を向けていたレンミツキの脇の下に手をいれて、体を付けた。そのまま持ち上げて、通路の真ん中に出る。地理学者の声が上ずった。

「な、な、なななに……するるる。ははは、はなせっせっせ」
蹄の音が激しくなった。これで止まらなければ、レンミツキを抱いたまま、横っ飛びで逃げるしかない。私は呼びかけた。

「おい、乙女だぞ」

一角獣の蹄の音が、緩くなった。ゆっくりと近づいてきた。見た目はおとなしそうな子馬だが、額から生えている角は長くて鋭い。

地理学者を見て、頑丈そうな前歯をむき出しにして笑った。

「あうう……男っばい女の子。僕の好み、撫でて、撫でてっ！」

私は後から抱いているレンミツキの耳に口をよせてささやいた。

「行け」

レンミツキは恐る恐る一角獣に寄っていく、その首筋からたてがみを撫でた。魔物は震えた。

「あうん、感じちゃううう」

「おい、一角獣、気持ちよくなっていけないで、君は魔王イブリースとデン・シャイターン、どっちに味方する？」

私は鼻の下を伸ばしている魔物に聞いた。

「僕、この人」

一角獣は無造作にうなづいた。あぶねー。長い角を振り回しやがって。危うく刺されるところだぜ。

私は学者先生に合図した。すぐ了解してくれた。

「一角獣君、僕たちのために魔王イブリースが復活した。味方しろ、と触れ回ってくれないか？」

そう言つて奴の長い鼻面を撫でた。奴は前足で床を叩いて、喜んだ。

「はい。我が愛しき人のためなら、どのようなご命令でも我が命に懸けて。……また会つてね！」

鼻息を荒くして早口に答えると、そのまま全力で走り去つていった。遠くから奴の雄たけびが聞こえた。

「魔王イブリーズ様が復活したあー！。みな味方しろあー！」
馬面の珍客がいなくなった後、みんなの無事を確かめた。イスハパンも元気を取りもどしたようだ。まえには、魔王がいる。戦士、魔法使い、レンミツキ、私の順に変えた。

通路を歩いていく。魔王の奴はわき道に目もくれない。

階段の通路を昇つていく。最初の冒険で見覚えのある場所に出た。広間だ。明かりがついていた。飲んだり食ったり、サイコロを転がしていたり、数え切れない魔物がいて、歩いてきた赤黒い魔王イブリーズを見て、みんな固まった。

静まり返る。

魔王が中央に進み出で、両手を広げて吼えた。

「魔王イブリーズは復活した。味方せよ」

広間にいた魔物たちが立ち騒いだ。

いろいろなところで、言い争いがはじまって、それは殴り合いになつていった。

怪しい雰囲気を感じたのか、悪魔っ子が魔王の頭から飛びたった。乱戦になつた。

見境のなくなった魔物が私たちにもかかってきた。

右から、人の形になった巨大なジンが現れた。魔法使いに向かつていく。戦士が立ちふさがる。良い相手を見つけた、と言いたげに巨人が両手を上げて上げた。戦士イスハパンも同じ動作。両手を組み合わせて、戦士と巨人の力比べになつた。

加勢しようと思ったとき、左から灰色の肌をした食人鬼グールが

四匹来た。目のすみで黒いコウモリが槍を振っているのが見えた。悪魔っ子にそそのかされたのかもしれない。私と地理学者で、魔法使いを守るように位置をとって迎え撃つ。

遠くで、魔王イブリースが、半身半獣のキンタウラスを殴っているのが見えた。

「魔王イブリースは復活した。偽物デン・シャイターンをやっつける！」

短剣を抜いた私が呼びかけると、食人鬼グールの一匹がとなりに噛みついて、仲間割れをはじめた。残りは二匹。

「学者、奴らの弱点は腹だ。一度だけ斬れ。二度斬ると生き返る」

レンミッキは、腰を沈めた。

私の正面に、グールが立った。私の後ろで、戦士の齒軋りが聞こえた。魔法使いが呪文らしいつぶやきを唱えていた。

私は帽子を振ってヤクの毛をなびかせてから、正面のグールに話しかけた。

「おまえの『命の泉』は……右手の親指の爪の裏」

だめ、はずれ。グールは平気で手を伸ばしてきた。襟首を狙っている。かわした。

「じゃあ、背中黒子のどれか」

だめ、また、はずれた。優れた魔法使いなら、すぐ『命の泉』のある場所を指摘できるのだが……

そのとき、あの小柄な牢番が横から来て、グールの膝の裏を蹴った。牢番に気をとられてグールに隙ができた。私は右足を軸にして、一回転して、魔物の目を眩ませてから、飛び込んで、相手の首に手をまわして腹に一刺し。魔物は崩れ落ちた。

仲間を見た。

レンミッキは、まだ剣の柄を握ったまま、グールと睨み合っていた。

イスハパンは劣勢だ。背の高い巨人に力負けしそうになっていた。私は短剣を鞘に収めて、牢番の腰から棒を奪った。

「ほらよ」

レンミツキのまえのグールに下から頭へ向けて投げた。魔物とはつさに手を上げて防いだ。その瞬間、レンミツキの剣がきらめいて、魔物の肘から先を切り飛ばした。そのまま手首を返して、剣を上から下へ。魔物の残った手も手首から先が斜めに切り落とされた。

なんで、腹をやらない！

私は、短剣を抜きながら、右足で床を蹴って体を回転させて、頭から魔物の懷に飛び込んだ。腹へ一刺し。

ひゅん！

レンミツキの剣先が、私の耳を掠めた。そのまま転がってかわした。

立ち上がった。まわりに目を走らせる。とりあえず、むかつてくる敵はいない。

魔法使いが呪文を唱え終わった。優勢だった巨人が、恐怖の目で魔法使いを見た。

「おまえなんか、死んじゃえ！」

魔法使いは両手を突き出した。左手の金色の鎖が光った。巨人はひるんだ。

そんな気がした。

攻撃魔法は効いたようだ。イスハパンが盛り返してきて、対等になった。そのまま押していく。カビベに勝った戦士は両手を広げたまま、上から巨人を押さえ込んだ。

巨人が膝をついた。戦士はその胸に膝蹴りを加えた。倒れる巨人。戦士は馬乗りになって、魔物の顔を殴る。殴る。殴る。殴る。両手で殴った。

私は魔法使いに背後から近づいて聞いた。

「あいつの『命の泉』が見えるか」

「……わかりません」

戦士は殴るのを止めた。照れくさそうな笑顔を浮かべて私たちと向きあった。立ち上がった。巨人は動かなくなっていた。

レンミツキはしょんぼりしていた。

「すまない。腹は練習していなかった。あやうく君を」

「私が急に飛びこんだからだ」

私は学者先生の肩を叩いた。剣先は鋭いが、あの剣は護身用、自分の身を守るためのもので、人殺しの剣ではない。良く分かった。

広間の壁際によって並んで観戦した。ここなら安全だ。

「なあ……」

助けてくれた牢番が、そばに寄って話しかけてきた。

「つづきが気になって……味方したから聞かせてくれよ。まさか、あれだけじゃないだろ？ もっと特別なやつが聞きたいんだ。俺が話したとき、みんなの期待に応えてやらないと……」

「うん。でも人前だとな。それに自分で作ったほうがおもしろい」

「そ、そうだな」

牢番は納得したようだ。

乱戦は続いていた。なんとなく優勢だ。

魔王は、広間の真ん中で殴りつづけていた。殴り倒された魔物は、味方にまわった魔物に、袋叩きにされている。

魔物が一匹、足元に転がってきた。人型のジンかジャーンのような。でも、獅子の顔をしていた。たてがみが波打っていた。立たせてやってから質問する。

「おい、君は魔王イブリーズに味方するか？」

首を振ったので、戦士が魔物の肩をつかんで向きを変えて、背中を足で押した。奴は広間の中央に押し出されて、殴られた。テーブルごとひっくり返る。

片すみでは、体が縦に半分になったナスナースが右半分と左半分で戦っている。

部屋のすみで変な魔物を見つけた。赤い鰐だ。食べ残した西瓜の皮みたいな色をしていた。砂漠の城塞に鰐？ 念の為に声をかけてみた。

「おい、君は魔王イブリースに味方するのか？」

知らん振りして、這っていこうとした。棘だらけの尻尾を踏んでやった。鰐の魔物は、振り返った。

「あうう。シャイターンのほう」

戦士が尻尾を握って、引きずってくる。

「敵だ。悪く思ふなよ」

「あああ、待って、待って、待って。あたし、悪運ドラゴンなの。誤解、誤解よ」

「ドラゴン？ 鰐だろ」

「味方よ、味方」

戦士が手を離すと、勢いをつけて鰐の魔物は立ち上がった。太い足と尻尾で体を支えていた。手は小さい。ライデンの半分くらいの背の高さだ。

「だからー、あたし、悪運ドラゴンだってば。あたしがついたほうに、悪運が一杯起きるってこと。あたしがシャイターンについてら、魔王イブリース様のお味方ってわけよ。わかる？」

私は疑いの目で鰐をにらんだ。

「証拠を見せる」

鰐は、広間の乱戦のほうを見た。

「あの人」

半身半獣のキンタウラスを指差した。

とたんに、魔王を後から襲おうとしていたキンタウラスが、後ろ足を滑らせて転んだ。倒れながらテーブルの隅で頭を打つ。見ていた二人の魔物が駆け寄ってキンタウラスを蹴った。それでも、また跳び起きた。なかなか体力のあるやつだったが、どこから飛んできた大きな壺が頭に当たった。陶器の壺は砕け散った。また倒れた。今度は動かなくなった。

私は正直に感想を言った。

「やるな」

「ねっ、いいでしょ。でも、あたし、これのせいで友達ができなく

てね。それが悩みの種なの」

鰐は私ににじり寄ってきた。突き出た細長い口を開いた。

「ねえ、あなた良い人みたいだし、お友達になりませんか？」

うーむ。友達になると、サイコロを二つ振って十二の目が十二回
つづきそうだ。

「うん、考えておく」

広間の入り口に異様な気配が立った。六匹のドヴァルパーがなら
んでいた。

上半身は普通の人間だが、両足は平たい皮ひもになって、後に引
きずっていた。旅人に皮ひもを巻きつけて取って食う魔物だ。

その後に、濃い青い服を着た魔物が立っていた。人猫みたいだ。

「デン・シャイターンよ。自分でかってに名づけた自称だけどね」
鰐がささやいた。

殴りあつて、取っ組み合いをしていた魔物たちの目が集まった。

広間が静かになった。

新しい魔王の瞳は金色に輝いている。頭には、黒い猫の耳が突き
出ていた。育ちの悪い、でも太った親玉猫を思い出させる容貌だ。

「奴につけ」

「わかったわ」

鰐の背中を押して合図した。

ドヴァルパーが、皮ひもの足を魔王に振りまわした。魔王はすば
やく首をひっこめてかわした。空振りした皮ひもは、はずみでひと
まわりして、うしろにいたシャイターンの耳を打った。

「んにゃ！」

声にならない悲鳴をあげて、シャイターンは逃げた。悪運ドラゴ
ンのせいだろうか、途中で転んで、広間の奥に消えていく。魔王イ
ブリースが追いかけようとしたが、皮ひもの魔物ドヴァルパーが行
く手を阻んだ。鞭の足を魔王にたたきつけた。魔王は腕で避けたが、
皮ひもが巻きついた。

残りの三匹も同じようにした。

魔王の両腕と両足に、四匹のドヴァルパーの皮ひもが巻きついた。残りの二匹が、魔王を狙うように位置を変えていく。

他の魔物はドヴァルパーを恐れているのか、手をだしてこない。私は声をかけた。

「こつちにもいるぞ」

レンミツキをはさんで、戦士とともに前に出る。短剣を抜く。

「魔法使い。攻撃の準備を」

うしろから、呪文が聞こえはじめた。二匹が向かってきた。

左右同時に皮ひもが飛んできた。

左は私の腕に、右は戦士の腕に絡みついた。戦士は皮ひもをたぐり寄せた。私のほうは引つ張り合いになった。

レンミツキの剣が下から上へ。力を入れて引つ張っていた皮ひもの足を切られた魔物は、反動で後に倒れた。戦士がたぐり寄せた魔物は、殴られたあと足をつかんで振り回されて、壁に叩きつけられた。

私が相手をしているドヴァルパーが起きた。足を振るってきた。

背中を打たれた。ひるんだすきにもう一度、今度はレンミツキの剣に巻きついた。地理学者の剣は手を離れて宙を飛んだ。

「おまえなんか、死んじゃえー！」

魔法使いの攻撃に、皮ひもの足をした魔物は恐怖に目を開いた。

ひるんだ隙に戦士は倒したもう一方の魔物を、両手で担ぎ上げると、その顔にぶつけた。

「ライデン、奴の『命の泉』は？」

「左目の奥！」

どうやら、見えたようだ。私は短剣を握って、倒れている魔物の左目に突き刺して、えぐった。

ぎゃー

魔物の絶叫が響いた。

『命の泉』を絶った。もう、こいつは復活できない。旅人を誑かしてきた報いだ。思い知れ。

「こっちは？」

もう一匹の倒れて動かなくなっている魔物を指す。

「……わかりません……」

レンミツキは巻きついていて皮ひもを解いて、剣を取りもどした。
魔王イブリーズを見た。

まだ、力比べをしていた。

勝負は長引きそうだ。ドヴァルパーのうしろに回って、四匹の余っている足の皮ひもを結んで戦士に引っ張らせたら、と考えていたら、蹄の音がした。

「たららららったったーたー」

掛け声といっしょに走ってきた白い塊が、魔王を取り巻いている魔物ドヴァルパーの一匹を角で突き刺して、そのまま壁に突進した。
白い馬の尻を見てわかった。一角獣だ

ずーーん

魔物は、一角獣の長い角で壁に串刺しにされた。皮ひもの足が千切れていた。

「愛しの我が君よ、麗しき白馬が助けに来たぞ」

一角獣が叫んだ。

力の均衡が破れた魔王は、ドヴァルパーの一匹を引き寄せると、頭突きを見舞った。崩れ落ちる。

「魔王イブリーズに味方せよ」

魔王の呼びかけに、残りの二匹は皮ひもを解いて忠誠を誓った。

魔王は、ちらりと一角獣を見てから、広間の奥に進んでいった。他の魔物たちもそろそろと続く。

「ねっ、これ、どうにかして……」

広間の壁に角を突きたてた一角獣が呼んだ。深く突き刺さって、自分では抜けなくなっている。

「行こう」

私は仲間たちに声をかけた。鰐もついてきた。

「おお、やるせなきこの世に咲いた汚れなき一輪の花。愛しの我が

君よ、我が見果てぬ夢を果たすため、今生の思い出を我に与えたまえ。……おねがい、撫でてっ！」

一角獣が壁に向かったまま言った。

地理学者はたてがみから、背中まで手を這わせた。

「また後で、お会いしましょう」

レンミツキの言葉に、一角獣は後ろ足を蹴り上げて喜んだ。

広間の次は、玉座の間になっている。

奥は十段位の階段で高くなっていて、その上に魔王の大椅子が鎮座していた。新しい魔王デン・シャイターンは、その玉座の横に立っていた。椅子の上には、何かのガラクタが積んであった。

玉座の間の両側には、広間の乱闘から逃れてきたのだろうか、魔物たちが大勢立ち並んでいた。

古い魔王イブリーズが入っていくと、待ち構えていた魔物たちが威嚇する声まきおこった。

「知識の泉。新しき改革の魔王、デン・シャイターン様、ばんざい」
イブリーズに味方していた魔物たちが、その声に押されたように固まった。

新しい魔王は、その声に元気付けられた。ガラクタから何か取り出すと

「イブリーズよ、これが何か分かるか？」

渋い声で問いかけてきた。

シャイターンが差し出したものは、金属製の大きな円盤だった。

中心に細い棒が立っていた。古い魔王は答えない。

新しい魔王は得意げに、古い魔王に言った。

「これはな、日時計だ。時間が計れる」

両側に並んでいた魔物たちの間から、感嘆の息が上がった。デン・シャイターンがつづけた。

「見る。古い魔王は頭も古い。人間が使う道具も知らない。このままでは、我ら魔物は衰えるばかりだ。人間をやっつけて、魔物の世

界を取りもどせ！」

盛大な拍手が起こった。

イブリースが振り向いた。斜め後ろにいた私たちを見た。私は大声で説明してやった。

「それは、太陽の下で影を計るものだ。城塞の中では使えない」

両側の魔物たちが、いつせいに疑わしそうな目で私を見た。

赤黒い元魔王は、落ち着いた太い声で言った。

「魔王デン・シャイターンよ。魔物には魔物の行きかたがある。人間の真似をしてどうなる？ 人間の下に立って自滅の道を歩むのか？ おまえのやり方には賛成でせん」

「魔王イブリース様、ばんざい」

玉座の間の中央にいた魔物たちが、声をそろえた。

古い魔王と新しい魔王の勢力は、半々ぐらいだろうか。

「じゃじゃじゃ、これを見る。アンテキラの歯車だ」

魔王デン・シャイターンは、木の板に取り付けられた、青銅のぴかぴか光る機械をみんなに示した。毛むくじやらの指で、つまみをつかんで動かして見せた。いくつも組み合わせられた大きい歯車と小さい歯車が音も立てないで回った。

「どうだ。参ったか？」

何人かの魔物は、イブリースのそばを離れて、シャイターンの側に加わった。

レンミツキが進み出た。玉座の間に良く通る声で説明した。

「それは、日食と月食、惑星の動きを計算するためのものだ。地面が動くことを仮定して作られている。信じるか信じないかは使い方しだいだ」

機械に見とれていた魔物たちがいつせいに振り返って拍手した。

一部の魔物たちが、感心して、イブリース側に付いた。

なに？ この違いは？ 私が言ったときは疑わしそうにしていたのに……地理学者の説明は信用するのかよ。まったく、人を見た目で判断しやがって。

「じやじやじや、これを見る。水晶で作られた髑髏だ。魔力拔群だぞ」

おおおお！

魔物たちの驚嘆の声があふれた。

「そ、それなら、お、俺も」

大男、戦士イスハパンは胸元から、首に紐で下げていた赤い小石を取り出して見せた。小柄なジンの魔物の一人が駆け寄って叫んだ。
「本当だ！ そっくりだぞ。しかも血のように赤い！」

うおお！

いつせいに尊敬の眼差しが、戦士に注がれた。

……いや…… あれはどこかで見たような…… 私は記憶を探ったが魔王の声に妨げられた。

「じやじやじや、これを見る。電池だ」

劣勢になった魔王デン・シャイターンは素焼きの壺を取り出した。もったいをつけて、ゆっくりと説明した。

「これがあれば、好きなときに、火花を飛ばせる」

広間は水を打ったように静まりかえった。

「やってみろ」

イブリースがそっけなく言った。

「えーと。どうやったっけ……」

魔王デン・シャイターンは、戸惑っていた。

ライデンが進み出た。やはり、良く通る声で

「それは、電池ではありません。建物を安全に保つために、柱の下に埋められた護符の壺です」

魔物たちがいつせいに賛嘆の声を上げた。指笛を吹く魔物までいた。いつきにイブリース側に立つ魔物が増えた。

「デン・シャイターン！ 男なら持ち物の見せっこではなく、ここで勝負だ」

後から見ていたが、イブリースは身構えて、額を叩いているようだった。

「やれ！」

魔物たちが叫んだ。

「やれ！ やれ！ やれ！ やれ！」

声を合わせた魔物たちは、手拍子をはじめた。

私は鰐の尻尾を軽く踏んだ。驚いて見上げる鰐に言っただった。

「おい、新しい魔王……じゃなかった。古い魔王に、いや、えーと

……」

悪運ドラゴンを使って魔王どもの共倒れを狙った私の声は、魔物たちの歓声にかき消された。

鰐も手拍子をはじめた。

イブリースが玉座への階段をゆっくりと上がっていった。新しい魔王は追い詰められた。逃げ場はない。やる気になったようだ。

イブリースが後二段で玉座にたどり着くというところで、デン・シャイターンは相手の頭をつかんで頭突きをした。身長と高低差を利用した奇襲だった。狭い額を武器に使った。

古い魔王は、まったく動じなかった。玉座の傍らにたどり着いた。四発めまでは、シャイターンの勢いが強かった。イブリースよりも頭一つ背が高い。その分、有利だった。

五発めからイブリースは飛び上がって、頭突きを当てた。九発めか十発めぐらいで、新しい魔王デン・シャイターンの足元がふらついてきた。

「やれ！ やれ！ やっちまえ！」

イブリースは、デン・シャイターンの襟首をつかんで階段のほうへ押して、背の高さの不利を補った。

十二発め。奴はゆっくり背を反らせると、まわりの魔物たちに見せつけるように間を作った。

「やっちまえ！ やれっ！」

魔物たちの興奮は、最高潮だった。みんな腕を突き出して叫んでいた。

がつん！

新しい魔王デン・シャイターンは倒れた。階段を転がり落ちる。イブリースは玉座の上のガラクタを放り投げると、そこにすわった。

「魔王イブリース様、ばんざい」

魔物たちの歡呼が玉座の間に響きわたった。何度も何度も。

地理学者レンミツキは、倒れたシャイターンをじっと見ていた。

君なら意味はわかるだろ？

君なら意味はわかるだろ？

魔王の戦いは終わった。そして、私たちの目的の一つも達成された。

「よし、皆の衆。後片付けをすませて、持ち場へもどれ」

復活した魔王は玉座の間にいる魔物たちに命令した。負けたシャイターンは、いままで部下だった魔物に魔法の鎖でぐるぐる巻きにされて、どこかへ運ばれていった。

魔物たちが散っていく。疎らになった。

座っていた魔王イブリースは、上から私たちをじつと見ていた。レンミッキを指差す。

「この前のとき城塞を荒らしてくれたのは三人だった。こちらのお嬢さんは？」

「僕は……地理を勉強している者だ」

奴は、ゆつくりとうなづいた。魔王は意外と冷静だった。一目でレンミッキを女と見抜いた。でも、一角獣の件もある……私は左手で短剣の鞘を握った。おかしな動きをしたら、飛びかかって、禿頭の三本の毛を突き刺す。どれかに『命の泉』があるはずだ。

そして、地理学者が魔物への密使なら……刃はどちらへ向ければ良いのだろうか？

「ふむ、勇者よ、そう殺気立つな。助けてもらったことだし、約束は守る」

魔王は潰れた顔を歪めた。笑ったのかも知れない。

「財宝を見せてやる」

「ふざけるな。見せるだど？」

——財宝を見せて、さあ、さっさと帰れ——私は自分でも声が荒

くなるのが分かった。

両手を上げて魔王は私を止めた。

「すまん。……財宝をおまえにくれてやる」

軽く笑ったあと、もったいぶって立ち上がると、階段を降りて、玉座の間を横切りはじめた。付いていく。途中で壁のくぼみに置いてあったランプを手にして灯を点した。

左手の壁に行き当たった。魔王はランプを上下左右に振ってから、口の中で呪文を唱えたようだ。暗い入り口が開いた。

魔王は振り返った。

「おっと、悪運ドラゴン、おまえはだめ」

私たちに付いてこようとした鰐を止めた。鰐は手をふって見送ってくれた。

四人で魔王につづいた。私、魔法使い、戦士、学者の順だった。平らな通路を歩いてから、昇りの階段についた。下に行くものと思いいこんでいた私には意外だった。かなり昇っていく。

「気をつけるよ」

木製の扉を開けた魔王が、私たちに呼びかけた。明るい。太陽の光。空だ。ああ……

自慢ではないが、私は高いところが苦手な勇者なのだ。勇気で克服して、他人には知られていないが……

外に出た。扉の向こうの一步さは、すばりと切れ落ちている。

石を落とせば、途中で当たることもなく下の砂漠まで一直線だ。めまいがしそうな高さ。

その城塞の岩肌に左斜め上へ行く狭い岩棚があった。歩幅ほどの狭さだ。表面には、足を置く場所に窪みが刻まれていた。魔王はゆっくりと登っていく。

左は城塞の黒い岩。右は見たくない。でも……

城塞の短い影が砂の上に落ちている。この岩棚は南側だ。慎重に登っていく。

岩棚の尽きるところに、また洞窟が掘ってある。木の扉をくぐっ

て、城塞の中に入った。登りの通路、そして急な階段を昇っていく。先頭の魔王が持つランプの光が揺れた。

空気は乾いている。

途中で何度も踊り場で、方向を変えた。ハシゴまで使った。

どれくらい登ったのだろう。どこに行くのか？ 魔王にだまされ

た？ 私の中で疑念が湧き上がったとき

「着いたぞ」

魔王の声がした。階段が尽きている。魔王は横の扉を開けた。また、太陽の光が入ってきた。

急いでたどり着き、外に出た。空が広がって、陽射しが目を焼いた。

城塞の頂上だった。

仲間たちも駆けあがってきた。

「どうかね？ この眺めは？ 城塞の財宝だ。楽しんでくれ」

魔王はまじめな顔で言った。

「すばらしい」

うしろから地理学者の声がした。私は押しのけられた。

学者は服のすそを翻しながら、角張った岩がごろごろしている頂上を走っていく。岩角から岩角へトビネズミのように跳んでいく。

北の端まで行ったまま立ち尽くした。

私たちも行ってみる。

すばりと切れ落ちた岩の上。

眼下には砂漠の砂色が広がっている。上には青空が輝いている。

その境目に白い波があった。雲ではない。もっと白い。地平線の青い霞に溶け込むようできて、頑なにそれを拒んでいる。波立つように、そして動かない。

「山、雪だ……雨が凍って固まった」

地理学者レンミツキは呻いた。

「そう、北部山脈。君たち人間は……たしかウスト……」

「アウストラルス山脈」

魔王と地理学者はお互いの知識を補っていた。

「あの山脈に大きな川の源がある、と聞いた」

「本当か？」

疑りぶかい地理学者は念をおした。

「うわさでは、そうなっている」

魔王はうなづくと、西を指差した。

「もっと良いものを見せてあげよう」

魔王は優しくかった。みんなを連れて西の端に案内した。

城塞の頂上はほぼ円形だったが、東西に少し長かった。いくつもの起伏があつて、その窪みに大石がばら撒いたように埋められていた。平らな砂漠に突き出た黒い島、それが城塞だった。砂漠の秘密と地理を知るには、絶好の場所だった。

東に岩の高台がある。屋根を架けた四阿のようなものが建っていた。そこに動くものがいた。二匹。見張り番長だ。私が片手を上げると、奴らも応えた。

それから仲間の後を追つて、城塞の頂上、西の端に歩いていった。けっこう遠いぜ。

なんてこつた！ 城塞がこの世界の西の果てだと思っていたが、さきには、まだ世界が広がっていた。

私は地理学者の後ろに立って景色を見た。下には砂漠があつた。そして、それは遠くで盛り上がり、高原になっていた。高いところにはうつすらと白い雪、その麓にはかすかに緑が。

草か？ でも北の山脈よりは近い。

「よく見る。砂漠が盛り上がる寸前のところ」

魔王が腕を伸ばして指した。

目を凝らしてよく見た。

黒い線？ 緑の点？

いや、湖だ……

「すばらしい」

地理学者が振り向いて、私を見た。目が輝いていた。新しい知識

をまえにして、興奮を抑えきれないようだった。

「何物にも換えがたい景色だ。千金に値する」

地理学者の言葉を聞いて、私は心の中でつぶやいた。

ああ、そうだろうよ。君の知識は正しかった。でも、私は千金のほうが好きだった。確かに、ここからの景色美しい。でも景色よりも、金銀財宝が……

戦士と魔法使いも高みからの景觀に見とれていた。

それから、ごつごつした岩を乗り越えて頂上の南にまわった。ここには何も無い。下には砂漠がつづいていた。

「はるか彼方に、山があると聞いているが、わしも見たことはない」
魔王がつぶやいた。

「冬にはルフ鳥がここに飛んで来る」
東へ。

十段ほど登って東にある岩の高台に出た。四阿の屋根で日陰ができていた。二匹の見張り番長が立ち上がった。二人とも良く似た顔をして、同じような服を着ている。

長い髪と顔の半分以上の大きな目をしていた。鼻は小指の先ほど、口は親指の爪くらいの大きさだ。唇はとても薄い。あごがするどくがっている。

ふんわりとした、でも体の線が際立つような薄い白布の服を着ていた。胸元には赤い布を飾って黒い靴をはいていた。異国風のいでたちなのに、見た目は、はつきり女の子だ。

そのうちの一人、緑の髪で赤い目の見張り番長が戦士イスパンのまえに立った。

「あ、あ、あの、さ、砂漠の彼方からキスされて、あのときから、す、す、好きになりました。責任とって、お、お嫁さんにしてください」

頬を染めて下を向いた。

「あ？ えっ？ ……うう……ああ……」

口数の少ない戦士は、呆然としていた。落ち着きを失くして、い

い訳を考えているようだ。

魔法使いが肘で戦士をつつ突いた。

見張り番長は舌を出した。

「冗談でーす」

二匹の魔物は小さな口に手を当てて笑い転げた。もう一匹は桃色の髪に緑の目をしていた。見張りに飽きて暇を持て余しているようだった。

東には何もない。岩塔の盆地も赤黒白の大地も見えなかった。遠すぎるのだろう。

四阿の日陰で休憩した。水筒の水を飲んで、ナツメと干しイチジクを食べた。魔物たちにも干し肉を薦めたが断られた。人間のものは口に合わないらしい。

まわりは、ぐるりと見事な景色に囲まれている。北には山並み。西には高原と湖、南と東は果てしなく砂漠がつづいていた。

すばらしい眺めだ。話にも聞いたことがない。でも財宝が……ため息が出た。

「城塞の高さは？」

地理学者は魔王に聞いた。

「うーむ？」

魔王も知らないらしい。地理学者は四阿を出て、頂上の縁まで行って、下を覗き込んだ。帰ってきて、また魔王に

「西の湖までの距離は？」

「……それは秘密だ……」

魔王は腕組みして笑った。西から、そよ風が吹いて、魔王の三本の髪の毛を揺らした。

地理学者は立ち上がると、頂上の西を目指して飛び出していった。小さい体なのに元気だ。

私は水を飲んで、ため息をはずめた。たしかにここは良い場所だ。胸の中を風が通っていく。水さえあれば一晩ここで眠りたいくらいだ。

水？

そうか、途中で放した駱駝がビブリオに帰らない理由がわかった。
西の湖。

そこからの水の臭いにつられていたのだ。

私も立ち上がった、歩きにくい頂上を横切り、西の端に行った。

縁から下をのぞいていた地理学者が寄ってきて質問した。

「距離は？」

同じことを考えていたようだ。

「ここから、駱駝で五日……六日あればたどりつける」

私は推測を述べた。

「アルの使者はこっちから、来たのかもな。シャイターンと連絡をとって、魔物の力を借りることにした……君の役目も同じだろう？」

地理学者はまえを向いた。

「新しい魔王は封じ込められた。もう用はすんだ」

私は確かめた。

「なあ、財宝は？」

「しつこいな。あきらめろ」

きらりと光る目で睨まれた。

「古文書には虫食いがあつて読めない場所がある。何々は何々で黄金を何々しても換えがたい、そんな意味だ。この絶景を見る。君なら意味はわかるだろ？」

ああ、意味はわかる。でも、そんなことを説明しても、ライデンの祖母は信じてくれない。たっぷり嫌味を聞かされて、言葉の剃刀で切り刻まれて、私は夜も眠れなくなるだろう。どうしよう……

それから、日が傾くまでみんなで景色を眺めた。地理学者はうろうろしては立ち止まっていた。書き物としては景色を確かめて、遠くの山を目に焼き付けようとしていた。戦士と魔法使いは並んですわっていた。

魔王が言った。

「さて、勇者よ。財宝はくれてやる。もって帰っても良いぞ。好き

にしろ」

「遠慮しとくよ……」

「うん、そうだな。日没も見せてやりたいが、暗くなると、あの岩棚が通れなくなる。もどろっ」

冒険者の帰還

冒険者の帰還

来た道を帰った。暗くなってきた岩棚では冷や汗をかかされた。玉座の間にもどると、悪魔っ子が飛んできた。

「いたね。どぐされ勇者、どこに行ってた？」

不愉快な翼の音をたててうるさい。不愉快に答えてやった。

「財宝を見てきた」

「でも、持っていないね」

「心の中に大切にしまつてある」

「ふーん、ね」

悪魔っ子は、人の心を見透かしたように鼻で笑っている。私は泣きたい気分をこらえた。コウモリの化け物にまで、小ばかにされた。私は見栄っ張りな勇者なのだ。誰も見ていなかったら、悪魔っ子を追いかけてまわして、翼をむしって、背骨をへし折っていただろう。すばしこいあいつを捕まえられれば、だが。

先頭を歩いていた魔王が振り返った。

「君らは移動の魔法で帰るのか？」

「そうだ」

「じゃあ、特別な部屋に案内しよう」

魔王は手をふって促した。私たちを連れて行く。悪魔っ子が魔王の頭に止まっていた。お気に入りの場所らしい。髪の毛につかまつて楽しそうだ。

玉座のまえを通って通路に入った。何度か曲がった後、下り階段を降りると、小さな部屋に着いた。

「白魔法の部屋だ。魔力が強くなる」

開かれた扉から、中を見てみると、壁、床、天井がすべて白い漆

喰で塗られていた。床には、良く焼いた石膏だろうか、いちだんと白い粉で線が描かれている。

二重の七芒星と十三の花弁を持つ花丸だった。

「どうだ？」

私は魔法使いに意見を求めた。

「すごい霊的な力を感じます」

「よし、では、ここから帰ろう。移動の魔法にかかってくれ」

魔法使いは、床の紋様を乱さないように服の裾を持ち上げて、境界の中心に立った。一人ずつ、同じようにして魔法使いのそばに寄り添った。

魔王は扉のところで別れを口にした。

「さらば、元気だな。……もう二度と来るなよ……」

「頼まれても、ごめんだ」

と、私は言った。

「さよなら」

「ず、頭突き。す、すごかったです」

魔法使いは手を振って、戦士も魔王へ別れを告げた。

「魔王殿……」

地理学者が呼んだ。私は一瞬、レンミツキが魔王との契約を切り出すのかと思つて緊張した。

「広間で一角獣が突き刺さつて動けなくなっている。後で抜いてもらえると有難い。あと、とても有意義なものを見せていただいた。深く感謝する」

ほつと息を抜いた。

「あたいもいつしよに行くね。勇者を野放しにしてると死神様からお仕置きね」

悪魔っ子が部屋に入ってきた。魔法使いは、天井で羽ばたく悪魔にとまどっているようにみえた。

「おい、おまえは邪魔になる。砂漠を飛んで行け」

そう言いながら、魔王は自分の禿頭を右手で叩いた。悪魔っ子は

迷っていたようだが、結局、魔王に従った。三本の髪の毛にしがみついた。

「勇者、先に行って、あたいが行くまで待ってるね。いいことっ！黙って勝手に動いたり……」

魔王は扉を閉じた。

静かになった。

私は魔法使いを勇気づけてやる。

「ライデン君。落ちついてやれ。君なら、きっと、うまくやれる」仲間たちの目が魔法使いに集まった。しっかりとうなづいた。

「みなさん。心を鎮めてください」
ふう。

みんな疲れていた。駱駝の夜行軍、城塞の迷路、頂上からの眺め、多くの出来事があった。でも、もう終わりだ。街に帰り……どうしよう？ 財宝はなかった。大金持ちへの夢は、はかなく消えた……まあ、なんとかなるだろう。私の母が口癖のように言っていたとおり、西瓜の屋台売りでもして、こつこつ稼ごうか？ 埠頭で荷物運びでもしようか？ でも、カロイドが攻めてきている。ここは戦争で一発当てて、大もうけを……

「はじめます」

魔法使いの厳かな声が部屋に響いた。

私たちは服を整え、姿勢を正して待つ。魔法使いは両手を上げると、口の中で呪文を唱えた。一区切りがついたところで

「目を閉じて、ビブリオの街を思い浮かべてください」

ふたたび、呪文を繰り返した。

魔法使いが子供のころから鍛えられ、祖母から母、母から娘に伝えられる秘伝の大技、移動の魔法がはじまった。魔力の消費が大きすぎて、生涯に一度しか使えない。魔法使いの腕の見せ場だ。

私は瞼の裏にビブリオの街を思い浮かべた。

突然、暗闇の中に街の城壁が浮かんできた。篝火が焚かれていた。戦さの準備だ！ 城門には槍を手にした兵がいる。みな不安そうだ。

ビブリオは劣勢だ、兵の数がたりない。そんな話が聞こえた、ような気がした。

魔法使いの詠唱がはじまった。

美しい言葉でビブリオの街を讃えていく。

「――」

私は懐かしい夜を思い出した。

街のなか。建物の窓から明かりが漏れている。イスハパンの食堂兼酒場だ。客で混んでいて笑い声があふれている。その裏にはライデンの小さな魔法の店がある。恋の相談をする若い女たちで行列ができている。間に深刻な顔をした男もいて足踏みをしていた。商売の悩み事だろう。その横、中庭の暗い影には大きな木の樽があった。樽のわきで三人の子供が口ウソクをもつて、ひそひそ話をしている。魔法使いは魔物の力を語り、私は計略を練る。戦士はびくりしたまま震えていた。三人とも手を重ねて約束した。大きくなったら砂漠へ！

冒険だ！

なれない酒を飲み、いつしよに踊り明かした魔法使いは祖母になり、喧嘩のとき助けてくれた力自慢の戦士はあの世へいった。私は

……

あの懐かしい場所へ。私の母は、借りていた二階の部屋で、いつも頼まれごとの縫い物をしていた。船ごと帰らない父を待ちながら

……

ライデンの詠唱が高くなった。ふわりと体が軽くなった。目を開ける。

夜のビブリオに着いた。建物の暗い影。いくつかの窓には明かり。一歩踏み出そうとしたとき――もともにもどった。

……城塞の白い部屋にいた。

地理学者、魔法使いがとなり立っていた。戦士は？ どこにもいない。ふりかえると後に戦士が立っていた。

「……ああ……だめ、失敗……」

ライデンの呻きにも似た、息を呑む声が聞こえた。呆然としている。

「どうした？」

「わかりません……何かに邪魔された？」

魔法使いは肩を落とすと、両手で顔を覆ってすすり泣きはじめた。

「……ごめんなさい……ごめんなさい……」

私は、すぐ魔王のひっかけを理解した。魔法の部屋と偽って私たちを誘い込んだのだ。疲れて警戒心が薄れていた。かたんに信じてしまった私の失敗だ。

けりをつけてやるっ！

短剣を抜いて部屋を出る。階段を駆け上がり、通路をぬけて、玉座の間に出た。

魔王は玉座にすわって悪魔っ子と遊んでいた。髪の毛を引っ張らせている。

私は叫んだ。

「汚い手を使ったな！」

レンミッキが私に追いついた。

玉座への階段を昇っていた私を、魔王は両手を上げて止めた。

「ちよっと待て。帰ったんじゃないのか？」

心の底から驚いているようだ。目を見開いた。

「移動の魔法に失敗した。おまえのせいだ。人をだまして、邪魔して、あざ笑うつもりだろう。でも、そうはいかない——」

言葉をつづけようとした私に、奴はきっぱりと首を横に振った。静かに諭すように話した。

「君たちの安全は保証した。約束は守る。すごい魔力を感じたから、てつきり成功したものと思っていた。……正直に言くと、城塞を荒らす人間には早く帰ってもらいたい。邪魔するわけがなかるう」
悪魔っ子が、私の頭のまわりをせわしなく飛びまわった。槍を握って空中で踊っている。

「へっへっへ、失敗、失敗。鰐さんと仲良くなってたからね。へへへ、可愛いあたいを無視するからだーよ。へっへへ。勇者ちゃんは帰れなくて干からびる。あたいは死神様からご褒美ね。やつほーい！」

鰐？ 鰐？ 鰐？

「悪運ドラゴン」

私と魔王は同時に気づいた。

そのとき、魔法使いを両腕に横抱きにした戦士も追いついた。

魔王は両手を打ち合わせて二度鳴らした。魔物たちがやってきた。

「悪運のドラゴンを探して、つれて来い。鰐だ」

魔王の命令に、魔物たちは走って出て行った。私はまだ泣きじゃくっている魔法使いに歩み寄った。

「君のせいではない。私のせいだ。悪運のドラゴンに魅入られた。みんなにも迷惑をかけた」

「そんな」

魔法使い、戦士がため息をついた。

私は玉座への階段に腰を下ろして、待った。レンミッキがそばにすわった。

「勇者よ。君の名は？」

僕女という生き物はこれだから、好きになれない。

まったく、のんきな奴だぜ。帰り道がなくなったのに。

私の名を知っているのは、母とライデンとイスハパンの家族だけ。

私は謝った。

「自分の名前、好きじゃないんだ」

「かまわないよ。地名をつけるとき必要なのだ」

私は帽子を脱いでから、地理学者の耳にささやいた。彼女は感心したようだ。

「端麗な先行者か、でもザカルトベリ族とは聞いたことがない」

「ずっと北の、山ばかりの所だ。で、親父は船乗りになりたくて、ビブリオへ来た。まあ、変わり者の家系だな」

「そうみたいだね」

地理学者と目があつたとき、やっと気がついた。私を落ちつかせようとして質問してきたのだ。金縁のめがねを鼻にのせた、深い褐色のやさしい瞳。

私は、これからのことに考えをめぐらし、牙の魔物から取り上げた短剣を鞘から出して、彼女に渡した。すぐ意味を悟ったらしく、何も言わずに受けとった。彼女は私に体を付けた。やはり、疲れているようだ。

レンミツキがさりげなく聞いてきた。

「どうする？」

「君たちは帰れる。心配するな」

ついでに、私も聞いてみた。

「ひとつ質問したい。どうして僕なんだ？」

「兄が五人いた。……私が、最後」

「そうか、なるほどね。すまなかった。……もし君が男だったら、良い相棒になれたと思うよ」

「無理を言うな」

レンミツキが私の顔をじつと見て、かすかに首を横にふる。ばかなことを言ってしまったと後悔した。

「すまない。少し眠らせてくれ。疲れた」

彼女は私の背中を優しくさすって元気づけてくれた。駱駝の夜行軍で、ほぼ二日ほど眠っていない。

そのまま、膝の間に顔を埋めて、しばらくまどろんだようだ。騒がしくなって、目覚めた。

鰐が立っていた。魔物たちも集まってきた。

「鰐！ 鰐ね！ あたいを食べる！」

悪魔っ子が槍で指して、魔王の頭のまわりを飛びまわった。頭をふって、すっきりさせる。これからが勇者の腕の見せ所だ。かたわらに置いてあった帽子をかぶった。

魔王が玉座から声をかけた。

「悪運のドラゴン、おまえは誰に憑いている？」

鰐の化け物は私を指さして

「お友達ですもの」

ああ、そう言えば、そんなことが……はっきり断らなかった……魔王は私を見た。

「どうだ。わしは何もしていない。ということ、君はどうする。まえと同じようにわしの魔法で砂漠に置き去りで良いか？」

私は考えた。三つの課題があった。

- 一 仲間を街にもどす
- 二 私が日干しにされるのを防ぐ
- 三 カロイドとの戦争に勝ち、ライデンを守る

いまは魔王が有利な立場だ。取引の条件は、私のほうから申し述べなければならぬ。まず、鰐に語りかけた。最初に悪運を断ち切っておかないと。

「そう。友達だったな。君はカロイドのアル王についてくれ。そうしたら仲間だ。いっしょにビブリオに行こう。川には、君に似た生き物がいっぱい住んでいる。きっと友達が増えると思うよ」

魔王は意外という顔をしていた。鰐は考えこんで、首をひねってから答えた。

「いいわ。何かのご縁がありそう」

「よし」

三は解決の糸口がついた。あとは一と二をいっしょにかたずける。私は、深く息を吸い込んでから、魔王に取引の条件を示した。

「君の魔法で、私たちを安全にビブリオに帰して欲しい。そのかわりに、戦争のあと飽きるまで、私が日干しになってやる」

私は待った。

長い時間を感じたが、実際は一瞬だったかもしれない。魔王は真剣な表情でうなづき……かけたように見えた。

だああああああめめめめええええええつえつえ

……だめだ。

いつもの冴えがない。あせりすぎた。干しイチジクを玉座の間の反対側に投げておけば、すべてはうまくいったのに。やつぱり疲れていた。悪魔っ子を計算に入れていなかったのが、私の失敗だった。奴は天井の近くから降りてくると、魔王の肩に止まった。

「ちよつと、待つね！ 魔王様、魔王様、勇者のいつもの手ね」

魔王の耳元で早口でなにか告げている。ひそひそ話し……
こちらを向いた魔王の厚い唇の両端がつりあがった。笑っているのかも知れない。いや、笑っていた。

「勇者よ、とても良い手だ。こんどわしも使わせてもらっ」

私は、二をあきらめた。

私は潔い勇者なのだ。

レンミツキが私の袖を引いて、後からささやいた。

「城塞の水を使え……西の湖に出て……五日分の水があれば」

気遣ってもらうのはありがたい。でも、いまの私にはよけいなお世話だった。戦乱が迫っている。時間がない。

「私たち四人を安全にビブリオに帰せ。カロイドとの戦争が終わったら、私が日干しになってやる」

魔王は細かいことは言わなかった。

「よし。約束だ」

それから、魔王の命令で、玉座の間に結界が作られていった。木炭に硫黄を混ぜた黒い粉で床に二重の円が描かれた。円と円の間に

は波線が作られ、四角を二つ組み合わせた八芒星が書かれた。私たち四人と一匹は中心に立っていた。

その間、魔王は悪魔っ子とおしゃべりしていた。私を日干しにする相談のようだ。

いろいろな魔物たちが、そろそろと集まってきた。

魔王が立ち、手を広げて魔物たちを静めた。赤い顔、蒼い体、色とりどりの服を着た魔物たち。物音ひとつしなくなった。

静かに移動の黒魔法がはじまった。

「むーーーーん」

魔王が、口の中で歯を鳴らした。

「むーーーーん」

玉座の間を埋めた魔物たちが同じように応えた。

魔王 「むーーーーん」

魔物たち「むーーーーん」

一定の間を取って、繰り返ししていく。人狼クトルブが縦切り半分のナスナースと肩を組んでいた。ドヴァルパーと牙の魔物もいた。キンタウラスは頭のたんこぶを撫でているようだ。

ばらばらだった魔物たちの調べは、だんだん一つになり、徐々に高くなっていった。魔物たちの魔力が合わさり、一つになった。

「むーーーーん」

「むーーーーん」

そのとき、私はとんでもないことに気づいた。

私が魔王を鎖から解き放ったとき、悪魔っ子は先に来ていた。イブリースには充分、考える時間があつたはずだ。

もし、本当の財宝を守るために、城塞の頂上からの眺めを財宝として、取引することを思いついていたら……だまされたかも知れない……なぜ、私は——君なら意味は分かるだろ——といわれて、景色が財宝だと素直に納得したのか？ 悪運ドラゴンの不運はいつから私に？ ちがう！ 魔王は最初に……あのとき、思いきって……
「むーーーーん」

「むーーーーーん」

魔物たちの調べは、一気に高くなった。体が軽くなったような気がした。魔法使いは戦士に抱きついたようだ。

魔法の発動だっ！

待ってくれ！ と口から出かったとき

「鰐さん、きらあーい。でも、あーたいも、いつしよにいー」
悪魔っ子の間の抜けた声とともに 私たちは夜の街に帰った。

着いた場所は、ビブリオの大通りだった。篝火があちこちで焚かれていた。私の帽子にしがみついていた悪魔っ子はすぐ、暗闇のなかへ飛んでいった。

もう、もどれない。

気を取り直して鰐にはしゃべらないように口止めした。黙っていれば、魔物には見えない。

疲れた体を引きずってイスハパンの食堂に行った。戦士の父が待っていた。再会した親子は堅く抱きあった。ライデン、レンミッキ、そして、財宝を持ち帰れなかった私にも、何度も礼を言う。母も出てきた。同じように息子の無事を喜んだ。

砂糖で甘みをつけた熱いお茶でもてなしてくれた。

裏手のライデンの店は、まだ空っぽだった。

戦争の情勢を聞くと、ビブリオは籠城するつもりらしく、カロイドの軍は舟橋を渡り終えて集結中だと教えられた。兵糧の運搬に手間取っているようだ。

私たちはその夜、戦士の家で綿のように眠った。

カカドウ川の戦い

カカドウ川の戦い

翌日、イスハパンを護衛につけて、ライデンを家まで送らせた。できれば、祖母と母もビブリオに呼んでくるように伝言を持たせた。私はレンミッキを連れて、市庁舎に乗りこんだ。レンミッキの父ダロワが軍師として来ていると聞いたからだ。

勇者が来たと伝えると、市長室に通された。

家具も椅子も部屋から廊下に放り出されて、中では市長と長老たちが床にすわったまま、あーでもない、こーでもないと言い合っていた。入っていくと、ひとり、白いあごひげの男が顔を引きつらせた。

鋭い目と厳しい眉が鋭角の、学者のような風貌を作っていた。長老たちを押しつけて、よろめくように私に近づいてきた。体は小さい。

レンミッキと私の間で目を動かしていたが、腰の剣をはずすと、私に両手で渡してくれた。剣は短く、反りは強かった。余計な飾りは一切ない。

「ウーツの鋼で作られた剣だ。受けとつてくれ」

その言葉を聞いて、私は長老たちの前にも拘わらず、剣を抜いた。

おお……

部屋のなかにどよめきが起きた。剣には刃紋はなく、幼女の髪の毛と呼ばれる微細な縞模様が全体に走っている。錆びず、折れず、すばらしい切れ味と噂されていた伝説の剣だ。

買ったなら、いくらするだろう？ 胸がどきどきした。これ売りに出せば、絶対に家三軒より高いぜ……

レンミッキがダロワに抱きついた。ダロワは娘の頭を撫でた。

市長と長老たちをまえにして、私は撃つて出ることを進言した。部屋は騒然となった。

カロイドの兵力は一万二千、ビブリオはダロワの手勢と浪人衆を集めても三千に満たない。特に傭兵隊を失ったいまは、弓兵で千対五十、圧倒的に不利だった。長老たちは当然のように反対した。

追い出されそうになったとき、ダロワが立ち上がり、私を支持してくれた。

「諸君は何のために戦うのか。勝つためだ。城壁を守るだけでは勝てない。諸君は城壁の泥と石に命を懸けるのかね？ 戦争は兵力ではない。勇気の量で決まるのだ」

黄色い帯をしめた男が私を見た。市長だ。目も口も小さい。頭は半分禿げ上がって、風采の上がらない、頼りなさそうな男だった。迷っていたようだったが、私と目が会うと賛成してくれた。そして、いったん決めると粘り強く皆の説得にまわった。

半日かけて、議論はまとまった。

市長と長老二人、軍師ダロワと私に作戦は一任された。

まず、カロイドの軍に第一の使者を送った。

——ごめんなさい。ごめんなさい。ビブリオは反省してます。もうカロイドの皆様には逆らいません、いままで、ごめんね——

手短に言えば、こんな書状を送った。降伏の条件はまったく書いていない。

次に、第二の使者、志願した長老と私で行った。もちろん、悪運のドラゴンを貢物として連れて行った。鰐には、いろいろと言いつめておいた。

「なんかおもしろそう、期待してるわ」

「アルは悪運の強い奴だ。きっと君を歓迎してくれるよ」

カロイドのアル王の本陣は、国境の大河カカドウ川を超えて、ビブリオの領域に置かれていた。川の兩岸は緩やかな起伏の丘陵がつづいている。短い草の生えた丘に、いくつもの幕舎が張られて、上

半分が白、下半分が紫のアルの旗が風を受けてゆれていた。ビブリオを包囲して攻城戦をやるために、補給路を確保するには絶好の陣取りだった。

私たちは使者として丁重に扱われ、アル王のもとに伺候した。

「貴国カロイド、ますますご清栄の段、祝着至極にござりますれば万感到りまする」

「ふむ」

長老のご機嫌伺いに、アル王は満足げに応えた。

野戦用の幕舎の中は涼しく、瀟洒な敷物と簡素な香炉や杯が置かれていた。

幕僚と將軍たちを従えたアルはなかなか良い男だった。細いが切れ長の目と薄い唇、鼻筋が通っていた。ただ、肌の下には疲れが浮いているようだった。そして、目じりには謀略のかほりが……そして肩だけを覆う鎖帷子の軽装だった。

「ビブリオの城壁を守護する秘密の鰐を献上いたしますれば、此度の戦さ、お控え下さいますよう、伏してお願ひ申し上げます」

長老の言葉にしたがって、私は檻に入れた赤い鰐、悪運のドラゴンを運び込んだ。鰐の貢物にカロイドの奴らは戸惑っていたようだ。私は檻をあけて、鰐を自由にやってやった。悪運のドラゴンは立ち上がって

「かわいがってね！ お友達になりましたよう」

その場にいた皆が驚嘆の声を上げた。

再び、鰐はささやく。

「アルカロイド、好き」

アルが手を叩いて喜んだ。追従の拍手が巻き起こった。鰐も手をふっていた。

「良いものをもらった。礼を言っぞ。……それで、条件は？」

「はっ？」

長老は気づかないふりをした。アルは目を細めてにらんだ。

「降伏の条件だ。賠償金として黄金百タラント。以後税金として交

易金の二割。市長は余が任命する。そう伝える」

「か、かしこまりまして……お、おてやわらかに」

黄金百タラントって、人間百人と同じ重さの金かよ。ふっかけてきたなと思った。払い終わるまで二十年はかかりそうだ。

私たちは恐れ入ったふりをして引き下がった。

まもなく、カロイド軍に下痢と麻痺の奇病が流行りだした。

カロイドの指揮官たちは兵に井戸を掘りなおさせて、カカドウ川の貝と魚を取ることを禁止した。兵糧を補っていた獲物を失ったカロイド軍の兵士の士気が落ちた。

いっぽうで、アル王の提示した降伏の条件は、ビブリオの住民たちの眉をひそめさせた。とても受け入れられない。開戦で街の意見は固まった。

次に、時間稼ぎに第三の使者を送った。長老の一人が志願した。

——わかったわ。でも、もつと優しくして。お願い——

上品に長々と書かれていたが、無駄なことばかりで意味のあることは、それしか読めないようにしておく。

カロイドの軍に倦怠の空気があらわれはじめた。ビブリオは降伏するとの噂が広がり、兵の集結の速度がにぶった。

そのすきに、ビブリオの町内ごとに参加人員の名簿を作り、武器をわりあて、十人長、百人長を選び、軍を編成した。戦傷と戦死したときの補償金の規定も作った。気が遠くなるほどの書類の山を、私たちは処理していった。

ビブリオとカロイドを分けるカカドウ川には、下流から下、中、上の三つの舟橋が架かっていた。アルは軍を三つに分けて渡河させていた。ビブリオから見て、左翼に軽装騎兵、海岸近くのしっぺした道のある右翼には攻城兵器を多く、その間に本陣のある中軍と配置していた。ここは歩兵と弓兵が多い。

ビブリオの城内では、二千五百の槍兵、三百五十の駱駝襲撃隊、五十の弓兵が秘密のうちに出発の準備を整えるため、忙殺されてい

た。

夜襲は月が十二夜のとくに決まった。

ここで、第四の使者を送った。一番年寄りの長老がひき受けてくれた。危険な役目だった。

軍師ダロワが、カロイドの右翼の陣取っている親友だった將軍に手紙を書いた。その男は軽装騎兵を率いる右翼の指揮官だった。

長老はこの手紙を、あて先を間違えたふりをして、アルのもとに届ける。

——やあ友よ。苦勞しているな。束縛を逃れてビブリオに来た。奇しくも君とは敵味方に分かれた。ましてや君は武人である。もれなく配備された兵力は無事か？ 例年ならば、そろそろ暑くなる季節だね。あなたとも決着をつけることになるかも知れない。留守にしている領地に心配はないか？ をつと口が過ぎてしまったか。やつと我々の約束の時は来た。礼を忘れぬ武人として君の無事を祈るから。云々——

内容は自然のものだった。でも、疑いの心を持つものは疑う。準備は整った。

編成されたビブリオ軍は、街の外に集まった。戦えるものは皆、志願した。

見送りの老人たちは自慢の声を響かせて歌い、持ち寄った楽器の弦を弾き、激しく太鼓を叩いて笛を吹いた。毛糸の帽子をかぶった子供たちが、それにあわせて戦勝を願い、列を作り、とびはねて踊った。

女たちは両手に花と料理を盛ってきた。

あちこちの人ばかりで歓声と涙、そして別れと祈りが交わされていた。

レンミッキも来た。白いゆつたりとした女の服を着ていた。髪を布で覆い、後ろに長く垂らしていた。僕女のくせに、やたらと大人びて見えた。めがねをかけていなかったら、見間違えたかもしれない。

い。

ライデン一家は……三人とも店にこもって、勝利の魔法をかけているようだ。姿は見えなかった。準備に忙殺されて、まだ会っていなかった私はある意味、ほっとした。我が愛しきライデンと顔を会わせていたら、きつと魔王との約束を破り、逃げ出していただろう。長槍を担いだ私に、駱駝を引いた戦士イスハパンが駆け寄ってきた。首に花輪をかけていた。思いきったように私に告げた。

「お、俺、これに勝ったら、ま、魔法使いに、こ、婚約を申しこみます」

私は、戦士の胸を叩いた。この男もすぐ、ライデンの尻に敷かれるだろうけれど、

「がんばれよ」

どこかから、悪魔っ子が降りて来た。ほんとうに、こいつは地獄耳だ。

「聞いたぞおー！。戦士は結婚！ 不倫！ あたいの出番ね」

奴は空中で槍を突くまねをした。

私は腰をひねった。となりに立っていたレンミッキは、私が吊るしていたウーツの剣に手を伸ばすと、

ひゅん！

抜きざまに悪魔っ子を両断した。

黒いコウモリの化け物は、上と下、二つに分かれて地面に落ちた。しまったっ！ という表情が顔に貼りついていた。

「ああ、学者先生。やっぱりこの剣はやるよ。私には使いこなせない」

私は剣の鞘を地理学者に返した。肩にかけていた鞆から、愛用の短剣を取り出して吊った。やはり、これが無いと勇者とはいえない。私はこだわりのある勇者なのだ。

「こいつは何者だ」

切り捨てられた黒い悪魔っ子をつま先で押しながら、レンミッキが聞いた。

「だから、砂漠の蜃気楼。何をやっても生き返る」

「鰐に食わせる。半分ずつ、別々の鰐に」

「良い案かもしれない。でも、こいつはなあ、以前、壺に入れて、蜜蝋で蓋をしたけど出てきたからね。まあ、期待しないでいるよ」

別れ際、彼女は私の首に抱きついた。私の胸に涙がこぼれた。

両手に悪魔つ子をぶら下げ、腰に剣をさして私を見送っていた地理学者のおかしな姿は、今でも思い出すことができる。

ビブリオ軍の隊列は四日間の行軍のあと、カロイドの陣が見える場所に着いた。

そのまま、日没の直前に攻撃を開始した。満月に少し欠けた月が、草原を照らして明るい。

ビブリオ本隊、二千五百の槍兵が突進に移った。先鋒は私が指揮する四百の槍兵が先導する。中軍は市長が率いている。弓兵もここにいた。うすい脇備えと後備えは傭兵上がりの浪人が指揮している。早足で歩く隊列で夜目にも大きな土煙が上がった。

カロイド軍の右翼騎兵隊と中軍の間隙を目指して動いた。

夜の攻撃に、カロイド軍は混乱したようだ。

中軍の陣形が動揺をはじめた。おそらく、ただちに出撃を唱えるもの、陣形を変えることを主張するもので、混乱して、命令が二転三転したらしい。

私たちに向けて矢が飛んできたが、風に流されて、当たらなかった。

ビブリオ本隊二千五百は、カロイド軍の間隙を突きぬけると中の舟橋のたもとで、攻城槌と投石器を襲った。守備していたカロイドの工作兵は戦わずに逃げた。

反転して横隊を組んだ。弓兵は遠射をつづけた。少しずつ前進する。

これに対抗するため、カロイドの軍は陣地を半回転させて、陣形の組みかえに動いた。

そして、中軍の後方がから空きになり、そこへダロワの指揮する駱駝襲撃隊が、丘の影からアル王を目指して突撃に移る。

恐怖と驚愕の声が夜の草原をわたって、こちらの耳にまで届いた。カロイドの陣形は一気に乱れた。

連絡の不運と陣地取りの不運が重なって、アル王は駱駝襲撃隊に生け捕りにされた。両足を蠍に刺されて、馬にも乗れない状態になっていた。

あっけなく捕まった。

右翼の騎兵は連絡の不備だろうか、アルの猜疑心か、最後まで動かなかった。

アル王の紫と白の旗が倒された。

鰐も取りもどして戦闘は終わった。駱駝襲撃隊の先頭を務めたイスハパンと堅い握手をして勝利を祝う。

カロイドは一夜かけて、混乱の中、隊列をくずして引いていった。上と下の舟橋を通って川の向こうに消えた。後には使われなかった攻城用の櫓や投石器が残っていた。

アル王を失ったカロイドはまた分裂状態にもどるだろう。

戦闘のあと、草の上で寝ていたら、頭を小突かれた。目を開ける。夜明けまであと少しのようだ。魔物の使者がつま先で蹴っていた。

下から見て、すぐわかった。一つ目のサイクロプス。

奴は帽子を深くかぶって、人間の服を着ていた。

「やあ、どぐされ勇者。日干しの約束だ。逃げるなよ。魔王様からの命令だ」

じつに嬉しそうにしている。悪魔っ子から魔王イブリースの約束を伝えられていたらしい。

鰐をカカドウ川に逃がしてやる手紙を添えて、私は帽子と短剣を寝ていた場所に置いた。後片付けと保管はイスハパンがやってくれるだろう。

それから、寝ているみんなを起きないように、魔物の隊長のあと

についていった。

離れた場所で私は用意されていた箱の中に入れられた。四匹の悪霊たちが声を合わせて担いで走った。

東のオアシスの裏手に、街へ来ていた魔物たちが集まっていた。スライムを肩に載せた巨人のジャーンもいた。

足跡を箒で消しながら砂漠に入っていく。水と食い物はもらったが、そこから先は、ふたをされて場所が分からなくなった。

砂漠の真ん中でぐるぐるに縛られて、捨てられた。このまま順調にいけば四日で日干しになる。

私を置いていくときのサイクロプスの楽しそうな顔。
できれば、君にも見せてやりたかったぜ。

勇者の誇り

勇者の誇り

と、いうわけで

私は勇者だ。

本人が言うのだから、間違いない。胸を張って言える。

では、なぜこんな場所で干からびているのかって？

それは、あいつとあいつと悪魔っ子とちよつとしたヘマとちつぽけな自尊心と無慈悲に水分を吸い取る砂漠のせいだ。

見栄を張ったことを、ちよつとばかり後悔している。

砂漠はあいかわらず、陽射しが強い。干からびるまえに、あたりの様子を見た感じでは、東部砂漠の浅いところだ。地平線に草とか砂丘が見える。遠くには木もあるようだ。魔物たちは、そんなに遠くまでは動いていないはず。意表について前回と同じ東のオアシスの近くで木と草の少ない場所を選んだか？ あの魔王ならやるかもな。蜃気楼が沸き立ったとき地平線の向こうに、オアシスが見えたような気もした。

まあ、いい。イスハパンがライデンか地理学者か、その子かその孫かその曾孫が見つけてくれるだろう。雨が降っても良いんだし……

もう、干からびてしまったから動けない。砂漠はいつもどおり晴れている。

退屈だ。

さて、店の名前でも考えて気を紛らわそう。どのようなときでも詩人の心を失ってはいけない。冒険の師匠が言っていた。本人はへ

たくそだつたけど。

そもそも、ライデンとイスハパンの店は、二人でうまくやっていけるのか、気になる。

私が新しい店の名前を考えてやろう。まともなお祝いができなかったから、また復活したときに贈ってあげれば良い。きっと、喜ばれるだろう。

酒場と魔法の小間物屋がいつしよになった店……どんな名前にしようか？

ライデンの伝来の店

椅子は半、分の店……意味がわからん

椅子は汎ライデンの店……同じく

意外と難しいな。発想を変えて、かわいく行ってみるか。

らいでん酒場はなまる

ヒマワリとタンポポの愉快なお店なの

小さなライデンと怪力イスハパンの複合式の新しいお店でね、砂漠の青い薔薇とかいろいろ面白い掘り出し物もあるからってば男の子も女の子も気楽に来てね食堂

……長すぎる。ボツ。

だいたい、酒場と魔法の小間物屋は、取り合わせがまずい。酒場は男のためにあって、魔法と魔法小物は女の子のためのものである……いや、そうでもないか……唄って踊って酒好きな女もいるし、こだわりちゃらちゃらペンダントを胸に下げた男もいる。商売で悩むときもあるしな。

いっそ、戦士の食堂兼酒場を、荒くれ者が腹を満たして、一杯の酒に癒しを求める場所から、大人な雰囲気の社交場に変える、って

のはどうだ。

昼は、女の子が気軽に入っておしゃべりできるように、お茶と甘いものを取り揃えておく。奥には、恋の魔法処方箋とかわいい小物の店がある。

夜には、紫と黄色と赤のランプできらきらにして、妖しい中にも高級店の雰囲気をもし出す。これなら、夜も昼もお客を呼べるだろう。大繁盛するのはまちがいない。

とすれば、店の名は……気分を変えて、レンミッキ風にいつてみるか。

魔法酒場新伝来亭

酒場甘味合体式魔法処方兼お食事所
冒険添加します砂漠に一滴甘味処

いいな。ビブリオ中に流行ったりして。でも、学者先生に似て、ちょっと堅すぎるか。

まだ、詩人のひらめきが冴えてこないようだ。このまえは、長めの名が多かったから、もっと、単純で、こう……魔物の心も撃ち抜くように決めないと……

少し妖しい雰囲気にして、来た人をその気にさせないとな。

まじめな人も夜はため息砂漠の蜜蜂亭

ライデンの夜なら変身しちゃうよ甘味処

心の砂漠を癒して夜の妖しいひととき本舗

うん、甘味処がいいな。砂漠も響きが良い。乾いた風と砂。ざらつく太陽と砂丘。夜には満天の星。茫々たる塵埃の波頭を照らす青い月の光は、胸の奥で眠りについていたら人恋しさを呼び覚ますだろう。

砂漠はいつでも人の心をかきたて、冒険に走らせる。となると……

砂漠の夜は変わる甘味処

砂漠の地理学者も夜は気だるく亭

魔法で涙も乾いて砂漠茶屋

いまいちひねりが足りないか？

まあいい。時間はたっぷりある。

ああ、それと言い忘れたことがあった。

愚痴になるけど聞いてくれ。

悪魔っ子の持つている槍は、不倫の槍といって、厄介なものだ。

まず、女の体のどこかを刺して、それから男の同じ場所を刺す。するとその二人は道ならぬ恋に走ってしまうという仕掛けだ。

死神が自分の成績を上げるために、悪魔っ子を人間界に遣わしたのだが、奴はへたくそだったらしい。不倫をめざしている女と男を相手にしても、刺す場所を間違えたり、しくじりばかり仕出かすので、仕事を取り上げられ、代わりに私の見張り役を命じられた、と聞いた。

ふだんは木になっているイチジクの実を盗み食いしている。なわばり争いで蜂と喧嘩して、刺された顔を腫らしていたこともあった。もし、日暮れ時、君が果樹園を歩いていて、熟れたイチジクに黒いコウモリが頭を下にして止まっているのを見つけたら注意してくれ。悪魔っ子かも知れないから……

そのコウモリが右手に細い不倫の槍を持っていたら———そし

て、君が急いでいなくて、少しばかり立ち止まる時間があったなら

――石でも投げておいてくれるとありがたい。

槍の穂先が夕日を受けて、きらりと光るからわかるはずだ。

当たることを祈っている。

おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4183q/>

砂漠の夜は変わる甘味処

2011年2月11日18時13分発行